
日浦君の恋愛事情

村瀬ひさり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日浦君の恋愛事情

【Nコード】

N0377C

【作者名】

村瀬ひさり

【あらすじ】

「本当の恋愛って、したことある？本当の恋人って、どこにいると思う？」アパレルメーカーに勤める日浦章吾、25歳。彼が見惚れた相手は5つ年上のバリバリやりのキャリアウーマン梶原理沙子だった。一癖も二癖もある周りのおかげで全然進展しないこの二人のドタバタLOVEコメディです。

1 見惚れる

本当の恋愛って、したことある？

本当の恋人って、どこにいますか？

居ると思っていなかったところにいたら、きっと驚くよね。でもそこに居たらきつとわかると思うんだ。一目合ったその日から、とかって言うじゃない、それってあなたは信じてる？

僕は、信じてなかった。

そんなこと信じられるほどお気楽じゃないよって、そう思ってた。

けどさ。

本当にわかるんだ、そこに居ると。

いくらそんなつもりはなくても、どうしても惹かれていくんだ。駄目だと思っても、無理だと確信しても、どんなに邪魔が入っても、そんなのへっちゃらで突き進むんだ、って思うのって。

やっぱ本気ってことだよな。

あー、マジ？

なんて自分に訊くのって、どうよ。

最近、可愛くなったって思わない？

隣の席の美奈ちゃんがそう言ってきて、え、っと顔を向いたら「えへ」と舌を出しながらツンツンと後ろを指差した。

もうちょっとで昼休みになるって言う、なんとなくソワソワしだす時間。でも仕事は山ほどあって、一区切りがつくのはまだまだ先だなあなんて思っていたそんなとき、指につられてそうっと肩越し

に振り返ると、そこにいるのは梶原主任だった。

年上相手にそれはどうかと思うよと、その時は笑って返したんだけれど、そう言われてみればなんだかやけに可愛いじゃないですか。落ちてくる髪の毛をかき上げる仕草になんだか訳もわからずどきつきとして、僕はあわてて姿勢を戻した。

なんてことがあった所為か、ちよつとなあ、と思ってしまう。

今はパソコンとにらめっこして、この冬の新作ウェアの発表時期とその宣伝媒体の計画を立てている主任の横顔が、とたんにくつきりと浮かび上がって、僕は一人でドギマギとしてしまつて、確認してもらうはずの書類を胸に抱いたままその場に立ち竦んだ。

「日浦？」

「は・・・はいっ」

「あんた、何やってんの」

うわあ、ちよつと眉を寄せてこっちを見上げてくる顔が、これまた色っぽいんですけど。

「ちよつと、日浦。何やってるんだって聞いてるんだけど」

すつと立ち上がって、僕の抱いてる書類をとんとんとついた。

あああ、そうでした、これってば主任に頼まれてた急ぎの書類なんです。

「もう、しっかりしてよ」

ちよつぴりムカついてますってな顔がとたんにニコリと笑つて、ポンと頭をなでられた。

あの、えーと、うわあ僕ってば。

顔が真っ赤になって、ドキドキが止まらなくて、立ってられなくなつてしゃがみこんだ。

「ど・・・どうしちゃったの」

覗き込まないで下さい！ 主任の顔がすぐそこにあるって思っただけで、僕やバくなりますからっ、なんて言えるわけないじゃん。

ただ頭を振り続ける僕の上で、いきなりノーテンキな声が響いた。

「いやー今日もキレーだねえ、梶原クン」

ボタン、と大きな音を立てた扉にかぶって、わはは、と笑い声が響く。しゃがんだ僕にドンツと何かがぶつかって、それが中山取締役の足だってわかった。

「お前、何やってんの」

「……主任に見惚れてました」

なんて、この人に言えるわけじゃないか。

中山取締役はこの会社の社長の息子で、噂では主任の恋人だつて言うんだもん。

「ちよつと、おなかの具合が……」

真つ赤な顔をごまかすためにそういうと

「そんじや洩れないうちに行つて来いって」

主任の前だつて言うのにそんなデリカシーのない事を、ガハハと笑つて言う。こんのお、社内セクハラで訴えるぞ、と憤つて、主任何だつてこんな人の恋人やつてるんですか！　と言つてやりたくて顔を上げると、嬉しそうな顔をした主任がことさらにっこりと取締役に笑いかけているのが目に入った。

可愛くなつたつて、綺麗になつたつて、まさかこの人の所為じゃないですよ？　違いますよね？？

主任ーと声に出して聞けないまま、僕は中山取締役にさつさへ行つてこいよ、と企画室から追い出された。

2 見初められる

僕の名前は日浦章吾、7月が来て25歳になった。

実家は新潟にあつて、大学入学のために上京してからずっと高円寺に住んでいる。

何で高円寺かって言うと、高校生の時にはまって読んでた作家の大学時代の自叙伝の舞台が高円寺で、そこで同じ大学生の仲間と織り成すあれやこれや、本当にくだらないようなそれでいて充実した毎日に憧れたからだった。

でも実際はそんなことはなくて。

ちよつと名の知れた私立大学の、自分の成績と見比べて一番無難に選んだ経済学では、どつちかって言うが目立たない居ても居なくても誰も気にしないタイプで、成績だつて中の中くらい。何とか卒業して今の会社に入つたのはいくつか受けた中で一番最初に採用通知をくれた所だつて周りには言っていたけれど、本当はこじかくれなかったからなんだ。

けれど、考えてみればアパレル業界の中でも難しいといわれてるカジュアルメンズファッションを中心に扱っていて、しかも結構業績が伸びてきているこの会社がなんで僕なんかを、と思ったのは会社に入ってからだった。

『ラウドネス』 日本語で「粗野」と言う社名は、創業以来の中山紳士衣料というのを現在の取締役、社長の息子である中山和孝氏が取締役に就任した時に強引に変えて、名前ばかりじゃなく会社の中身自体も変えて、それからこの会社は一気に伸びてきたと言う。中山取締役は、スーツが主力でカジュアル路線はジャケットがやつとと言うラインナップを、麻素材や軽いナイロン素材を使った着心

地のいい、しかも色目も時に原色を効かせ色に使って目を惹くアイスカラーが中心なものに変え、トータルで着まわせるようインナーからボトムズ、果ては下着まで売り出して「ラウドネスファッション」と呼ばれるものを作り出した。それが雑誌やインターネットに取り上げられるとまず若い女の子が飛びつき、自分の彼氏を着せ替え人形のようにして着飾る、という現象が起こった。一昔前の男のイメージとはガラリと変わった、スリムな外見と日本人離れた顔立ちが受ける最近の『男子』に甘すぎないデザインとちよつとやんちゃなアソビココロがいいというのだ。

それまでもカジュアル路線のブランドはいくらでもあったが、中山取締役が打ち出した宣伝効果と大型スーパーでの販売を見込んだ抑えた価格、そして老舗が出しているという安心感も、幅広い客層に受けた要因のひとつだろう。

とにかく、大ブレイクと言っている時期に僕は入社し、一時期はショップで販売員をしていたこともあった。そのときにわかったのは、僕みたいなどこにでもいそうだけれど一見日本人離れた顔は、女の子受けするということだった。

まさに『ラウドネス』を着ていそうな顔、と言っただって。それに今まで気がつかなかったんだけれど。

・・・僕ってカワイイ系の顔らしい。

駅ビルの中に入ってるショップで新商品を着て立っていると、『カワイイ』と気安く触っていく女の子の多いこと多いこと。初めは洋服のことだと思っていたんだけど、先輩から『お前は顔で受けてるよな』といやみ半分で言われて本当に初めて気がついた。

僕自身はあんまり好きな顔じゃないんだけどな。

と思っても押し出しの弱い性格で「はあそうですか」しか言えずにいて。

そんなことを一年半くらい続けた頃だろうか、社内で行われたスナップアップ研修会に参加して、その販売員として立っていた時気がついた些細なこと、カタログの大きさとか説明文のバランスとか、

本当にそんなことなただけで、こうしたほうがお客さんに受けるんじゃないかな、といったことをレポートにしてみたらそれを読んだ中山取締役に『見初められちゃって』。

僕は入社3年目でこの春企画室に抜擢された。

そこで出会ったのが、僕の上司、企画室主任梶原理沙子さん、だった。

3 お仕事大変です

「あー待ってたよお、これコピーね!」

一抱えあるファイルに視界をさえぎられながら歩いていたら、いきなり声をかけられた。

「日浦っこつちが先!」

声の主のほうに行きかけたら、見えない方向から袖をひっぱられた。

「日浦君、それ終わったらこつちね」

と思ったら、たぶんデスクの向こう側から声が掛かるし。

「日浦ちゃん、コピーは15ページ1組で50部だよお」

お局さまの佐々木先輩は、そんな状況はお構い無しに用件を言いつけるしつ。

冬の新作発表のために僕が出した企画はことごとく駄目だしされて、さつきまで企画会議で散々絞られて帰ってきたオフィスで、今度は先輩方に散々絞られた。

マジかよ・・・

コピーって僕の仕事ですか・・・

そりゃあまだまだまともに企画が通ったことはありませんが、15ページ1組で50部ってさ・・・一体どれだけかかるんだ。

僕はドンと渡されたファイルブックと、スクラップ用の雑誌と、原稿の入ったクリアファイルを抱えてよたりと足元をふらつかせた。

「はい、コピーでえす」

ぐったり、と今言い付かったコピーの原紙を持って椅子に座り込むと、普段僕の隣で事務処理をしている新人派遣社員的美奈ちゃんが、僕の机にトンとマグカップを置いてくれた。

「あ、サンキュー」

どういたしましてえ、とにつこり笑った彼女は僕より年下、そういえば短大に行ってる最中には雑誌モデルをしてたって聞いたことがある。

うーん、間近で見るとやっぱ可愛いもんなあ。

と、ぼーっとその美奈ちゃんの後姿を眺めていた僕の頭を、ポカリとポスターを丸めた筒が襲ってきた。

「コラ、日浦」

「は・・はいっ」

うわっを見ると梶原主任が目の前に立ってる。

「なにやってんのよ、さっさと仕事！」

カツン、とヒールの音を立てて腰に手を当てた主任はなんていうか、むっちゃくちゃカツコイインですが。

丈の短いジャケットの下は襟の大きな白いシャツ。それを外に出さないでピタリ折ってジャケットの襟に沿わせているってところが、隙のなさそうでありそうだっていう微妙な感じがする。いつもながらオシャレって言うしかない。

でもこの人、仕事となると容赦がない。さっきだって僕の出したカタログのレイアウトに、情報を見せるよりもここはイメージ優先だろ、と言って却下したのはこの主任だった。

『折角腕のいいカメラマンに撮って貰ったんだから、全体をこまごま見せるのもいいけどアップショットで裁ち落とし、それでインパクトを出した方がいい』

特に雑誌掲載の場合はどうやって読者の視線を持つてくるかがポイントだ、そう言って3ページの特集記事を演出していく。

1ページ目は、ぐっとせり出した肩にかかったジャケットから覗くデコルテに興味を持っていかれる。中にチラリと見えるシルバーのアクセサリーがむちゃくちゃ映える。ああそうだ、男の目線で見

るよりも、ここは女性視点が優先、だから『イメージ』が先なんだ。 こういうのを着てる彼氏と並んで歩きたい、自分の彼氏にはこういうのを着せたい、そんな憧れをムクムクと引き出すっていうのが『ラウドネス』の得意とするところなんだから。

一転して中の見開きでは、実用的なコーディネートが並ぶ。

男性月刊誌の中でもビジュアル系といわれているそれは、購買層を調べてみると意外に女性客の方が多かった。それを踏まえての演出は「買いたい」よりもまず「着せたい」がポイントだけど、でも媚びてない。

いつもながら鮮やかだなあと思った。

その鮮やかな発想の主任が、コピーのために立ち上がった僕ににっこりと笑いかけた。

「日浦、さっきの企画なかなか良かったから。次は頑張んなさいね」

君のセオリーに囚われない発想は、結構貴重よお。

ポンと叩かれた肩が、そこだけじんわりと暖かくなったような気がして、僕は「はい！」と直立して返事をした。

「次は頑張んなさいね」

うって変わった低い声が、すれ違いざま僕にぼそつと囁く。

ぎよつとして振り返ると、佐々木先輩が主任の格好を真似してしやなりしやなりと立ち去っていった。

4 酔っ払いは大変です

えーと・・・

自分があんまりお酒に強くないってことを、これほど恨めしく思ったことはない。

強くないからさして飲もうと思わない。だから酔っ払うってことがあんまりない。

でもさ。

・・・

マジ？

「じゃあ月曜日ね」

とニコヤカに手を振る美奈ちゃんに片手を挙げて、手を振り返そうとすると後ろからぐいっと伸びてきた腕に首を引っ張られる。

「・・・わぁっ」

バランスを崩して転びそうになった僕の真後ろで、「日浦っもう一軒行こうっ」と大きな声が響いた。

僕、日浦章吾。

『ラウドネス』、という名のメンズカジュアルウェアの会社の企画室で働いている。

でなんで今、「マジ？」って思ったかって言うと、

「もう一軒行くなって言ってるでしょっ」

と俺の腕を強引に引っ張って、『上司』がくだを巻いているからだ。

今夜は冬の新作に向けての 프로모ーションに一区切りがついて、それまでの苦労をねぎらう意味でも「パーッとやりますか」とみん

なの意見が一致して、久々に企画室のメンバーで呑みに出かけたんだけれど。

何で僕だけ主任に捕まっちゃうんだよ。

ていうか、この人こんなに酒癖悪いって、どうしてみんな教えてくれないんですか！

「梶原・・・主任？」

行くぞーっと言って歩き出してすぐ、そうだな、5歩も歩かないうちにカクン、と主任の足が止まって、僕が声をかけるとグウンと前のめりのなっていくところだった。

「うわっ・・・わっわっ」

とつさに前に回ったけれど、倒れてくる、と思った身体は意外にも僕の両腕の中にやんわりと収まって、クスクスと笑ったかと思うと僕の耳元で、「あるけなーい」と言い放った。

歩けない？

ってさ、じゃどうしろって？？

困惑する僕をよそに主任は腕の中で笑い続ける。だからさ、酔っ払いつてば始末に終えないんだよね。

「あの・・・もうお開きにしませんか」

歩けないって言うんなら、タクシーでも捕まえて押し込んだじゃえばいいや、と面倒くさくなってそう思ったりしたけれど、そうは問屋がおろさなかった。

「まだ帰らないって言うてるでしょ」

意外にもしつかりした声で返事が返ってきたりして。

あー、なんかぐったりする。

「駄目ですってもう終電なくなっちゃうし」

「・・・なんだと？」

そのとたん、きらん、と音がしたようにその瞳が見開いた。

「上司の言うことが訊けないっての」

ああああ。

今の状態でそういうことを言う？

まるで大きな荷物と化した主任は、僕の腕の中でもえらそうな顔をした。それがまた、いつもオフィスで見る顔とあんまり変わらなくて、酔っ払いの戯言だって言うのをすっかり忘れるくらいきりつとしてて、思わず僕は顔を横にぶんぶんと振った。

「じゃ、行こ」

とはいっても、もうぐだぐだの足元は到底飲み歩ける様子とは思えなし。で、そのとき「あのそれじゃあ・・・」と僕はいいことを思いついた。

「主任の家まで送っていきますよ、そこまでならお付き合います」

さすがにこんなに酔っ払っている人とこのまま呑みに行つて、そこで「はいさようなら」と言うわけには行かない。かといってここで素直に離してくれるとも思えない。と考えた末の苦肉の策だったわけだけれど、それがいけなかったんだ。

「主任のお宅つて、どこなんですか？」

タクシー、と声には出さないで言いながら手を上げて、運よく１台が目の前にすべるようにして止まった時、主任はまるで唄うようにしてその場所を告げた。

「田町」

・・・・・・・・

高円寺と正反対じゃないですか。

僕の帰りはどうしよう、と途方に暮れている背中を「さつさと乗って」と主任はドン、と押してきた。

「お客さん、どこまで？」

運転手さんの妙に落ち着いた声が、僕の頭の上を通り過ぎる。

「ベルーナ田町まで」

じゃあ近くに行つたら曲がり角とか教えて下さいね、と言う運転手さんの言葉を最後に、タクシーは街のイルミネーションの流れの中へ走り出した。

5 ていうか、マジ？

着いたところはずいぶんと家賃が高そうな、デザイナーズマンションだった。

「えっと・・・どこですか」

入り口が3つもあって、防犯上の都合なんだろうか、部屋の番号しかついていないからどこが「梶原主任」の部屋なのかさっぱりわからない。

「奥奥」

指を指して教えてくれてるんだろうけれど、その方向が定まらなから「？」と思ってしまう。それでも先にたって行こうとするのを支えながら、洒落たレンガ造りの壁をつたって薄暗い中を歩いていった。突き当りまで行って、ポワンと点いた外灯に足を止める。

ああもう、なんだってこんな目に合うんだよ。

半分以上うんざりした気持ちで隣に立っていると、ぬっと腕が差し出された。

「鍵」

え？つと顔を上げたら、主任は明らかに寝ている表情で僕に「はい」と言ってきた。

「あげる」

「あげるって、わっ」

ぐらん、と傾いだ身体は僕の肩にもたれかかってきて、ただでさえ危うい足元がその重みでぐらついてもう少しで倒れそうになる。

・・・まったく、だから酔っ払って困るんだよ。

タクシーに乗る前から、何度思ったかわからない言葉をまた頭の中で繰り返した。

梶原主任は、普段は本当にきりつとして女性としても上司としても、尊敬はしていた。そこには美奈ちゃんにはない「強さ」があると思っていた。美奈ちゃんは、見た目どおり可愛いし、それに外

見からするとわがままなのかなと思っていたのに結構さりげない気配りなんかも出来て、いい子なんだなあと感じてはいたけど、それとは違う「何か」をこの人には見ていた。
と思っていた。

なのに、と不意に肩にかかる温かさを感じながら、ため息をついてしまう。

なんだろう、この気持ち。憧れていたものから、色がなくなってしまうような喪失感。それは一度覚えたことがあるようで、僕の中にじわりと広がっていく。

って、え？

なんか凄く『残念』に思ってない？

その感覚にぎよつとした自分に驚いているところに主任がぺたりとくつついてきて、なおさらその温かさが生々しく思えてドキドキと心拍数があがるのがわかった。

えええ、ちよつと待ってよ。

この『ドキドキ』っていったい何？

「日浦、鍵はあ？」

「あ、は・・・はい今開けますって」

間延びした声に返事して、慌てて僕は鍵を握りなおした。

カチャリと音を立てて開いた部屋の中は、大人の女性の一人住まいらしくさっぱりと片付いていた。

玄関から入ってすぐにあるスイッチをつけると、連動してその奥のリビングの明かりも点いたようだった。その淡い明かりの中に誰の絵なのかわからない、綺麗な色合いの幾何学模様の額が飾ってあって、真ん中の黄色に目を惹きつけられていると、

「こつち」

と、強い力で腕を引っぱられた。

うわっと声が出てしまっって入り込んだ部屋の中にある時計を見上

げると、すでに深夜12時を回り、これから駅まで行っても到底終電に間に合わない、そんな時間になってしまっていた。

「しゅーにーん……」

僕は高円寺に住んでるって、知りませんでしたっけ……

あーあ、これじゃあ予定外の出費だな、と帰りのタクシー代を心配していると、くると振り返った梶原主任がにっこりと笑った。

「日浦、今日は泊まって行きなさいね」

「……ええっ？」

うそ、て言うか、冗談でしょ？

と僕が声に出す前に、すっかり腕を掴んだまま、窓際のベッドへ梶原主任は頭からダイヴした。

「マジ？かよあ……」

僕の嘆きのような呟きは、誰も聞いてくれなかった。

6 お泊りって・・・え？

煌煌とついた明かりの下、僕は右腕を人質に取られたまま、眠る人の顔を見ていた。

「・・・主任」

がっちりと掴まれた腕はそろそろと引き寄せようとしても、まったく抜ける気配がない。だったら相手が起きたって構わない、力任せに引っ張ってもいいじゃないか、とチラリと思うんだけど、なぜかそれはする気が起きなかった。

「本気で寝ちゃってるの？」

マジかよ、とまたつぶやきながら天井を見て、目を梶原主任に向ける。

くうくうと息を漏らしている顔はなんだかずいぶんと子供っぽくて、この人っていったいいくつだったっけ、と今考えなくてもいいようなことを思った。

僕より・・・5つ上、だったっけ？

そう考えると、なんだか不思議な気がしてきた。

放してくれる気配のない右腕はもう諦めてベッドのへりに背中を預け、ほう、と息をついて目を閉じた。そうしてゆっくりと身体の手を全部抜いた。

5つ上って言うと、僕の姉よりもちょっとだけ若いのか。その姉はすでに2人の子持ちで、婿養子をもらって新潟の実家の後を継いでいることを考えると、なんだか本当に不思議な気分になった。

姉は小さい時から僕に味方してくれて、僕のやりたいことには反対したことがなかった。高校卒業を前にして何の目的も定まっていなかったのに「東京に出たい」と言った僕に、いいよと言ってくれたの

も姉が一番最初だった。ただただ家から、いや父親から離れたい一心だった僕の、背中を押してくれたのは姉だったんだ。僕の父は教育者で、最後は地元の小学校の校長を務め終え今は地域のコミュニケーションセンターで館長をしている。厳格と言っていていい父親から小さい頃より「学校の先生の子供」ということで躰けや勉強には特に厳しくされたことを覚えてはいるけれど、でもそれだって常識の範疇を超えてとまでは思っていない。元は美術を教えていたというだけあって、本物を知ることはいいいことだと常に言っていて、休みの日には少しはなれた美術館まで連れて行ってくれたことを今でも覚えていいる。そのときに観た蒼い顔の女の人や自然にはありえないような花の形が、もしかしたら今日の僕を作っているのかもしれない。けれど、その父はある頃から家に帰るのが遅くなり、僕や家族と過ごす時間が極端に少なくなつて、同時に『社会的地位』というのが上がつていった。

いや順番が違う、社会的地位が上がつていったから、家族を省みなくなつたんだ。

それは、僕がこうして社会人になつたからわかることだけれど、その当時の僕にはそんなことはさっぱりわからなかった。いつも気難しい顔をして、声をかけるのさえ憚られるような雰囲気を纏っている父が年に何回か、そう、暮れになると必ずべろんべろんに酔つ払つて帰つてきて、大きな声であたり構わず怒鳴り散らすというのもこの頃からだった。

元々酒には強いほうじゃなかったんだと思う。僕が今アルコールを飲む機会があつても、大して飲みたいかないと思うのはきつと家系の所為だ。だけど僕はその雰囲気を楽しむことが出来る。友達とだつて会社の仲間とだつて、飲んで騒いでいる時間はスングク楽しいから大好きだ。

でも、父は違つたんだろうな。

それを姉はわかつてたんだ。

『駄目よ、お父さんを悪く言っちゃ』

夜遅く帰ってきて、母に無理を言う父に腹を立てた僕に決まっ
そう言う顔がひどく懐かしい。優しい、でもそれだけじゃない強い
人だった。

それに気がついたのは家を離れてからだなんて。

深い深い心の奥底で、姉を慕う思いが広がっていくのがわかる。
でもなんで、何で今頃そんなことを思うんだろう。ていうか、どう
してここで？

・・・えっと、ここでって、あれ？

ピロピロピロピロ、と断続的に音が響いてきた。何の音なのかさ
っぱりわからなくて目を開けたら床にべったりと横たわっている自
分がいた。・・・ええとここって、どこだっけ。

ぼんやりする頭の上のほうでまだ音は続いていて、なんだかこれ
って携帯電話の呼び出し音だよな、と気がついて慌てて自分のポケ
ットをバタバタと探った。ああでもこれって自分の音じゃないし・
・と気がついたのはお尻のポケットに入っていたブルーの携帯が全
然光っていないのを見てからで、じゃあいったいこれってどこよ、
と起き上がって、そこでやっと驚いた。

「梶原主任！？」

頭を上げたすぐ横に、まだぐっすりと眠っている梶原主任の顔が
あって僕はマジで心臓が止まるかと思った。淡いサーモンピンクの
カーテンの向こうから薄く朝日が差し込む見覚えのない部屋、だけ
どそういえば昨日の晩、「あげる」と言われて鍵を手渡されて開け
たのは覚えてる。ってことはここって梶原主任の部屋ということな
んだよね。

・・・って、ああそうだ！

って気がつくの遅いって、て言うか、あのお本当に泊まっちゃっ
たってわけ？

と、自分で自分に突っ込みいれるなって。

なんて僕自身訳のわからない状況にパニックになっている間も、その音はやんでくれずにしつこくピロピロ言っている。たく、ここだよ、と伸び上がったら、主任の身体の向こう側、ベッドの上に投げ出したバッグからこぼれ出た携帯電話がピカピカと光りながら音を発していた。

このままだと起きちゃうじゃないか。

そればかり気になって何とかしてその携帯電話の音を止めなくちゃ、と僕はベッドの上に手を伸ばしてみた。後ちよつとで届きそうなのにうまくいかなくてもう少しだけ乗りあがってみる。自然、僕の身体の下には主任の身体があつて、こんなところで目を覚まされちゃかなりまずいんじゃないかって、気がつかなくてもいいことに気がついてちよつとドキドキしてきてなかなかうまく行かない。

それでもやつと手に取れたその携帯電話を見て、僕は折角起こさないために苦労していたって言うのに、「わあっ」と大きな声をあげてしまった。

真ん中の丸いウィンドウには、『中山和孝』と中山取締役のフルネームが表示されていた。

7 トーストとカップスープ

「わぁっ」

自分のあげた声に驚いて体勢を崩し、僕は梶原主任に激突しそうになってとつさにその顔の両側に手をついた。

「う……ん」

寝返りをうとうとしたのか、僕の真下でもぞもぞと主任の身体が動いた。でも、それが出来ずに突っ張ったようになって不意に止まる。だって、僕が上に乗っかってるから、そりゃ重みで動きづらくもなるって。

「……そうじゃなくて。」

腕の中で止まった主任の、目蓋がごく間近でピクピクと動く。そんなのがはつきりわかるほど近くにいるなんて、見られたら大変じゃないか、と思ってもこの恰好じゃどうすることも出来ない。いや、携帯電話を手離して何とか腹筋で起き上がればベッドから降りることは可能だけれど、そんなことを冷静に考えていられるほど余裕はなかったんだ。

だって、主任、目を開けちゃった……し？

「あ……れ、……日浦？」

「わ、は……はいっ」

距離にすれば20センチ、ないよな、本当に目と鼻の先、そのくらいのところで梶原主任がパツチリと目を開けて、ただど覚えきつてない目元で僕を見ると不思議そうに名前を呼んだ。ちよっとはれぼったい目がいつもと違ってなんだか……やけに可愛いんですが……どころじゃないだろう。

そう思っても、淡いピンクのカーテンの色のすぐ傍で柔らかい色調の羽毛布団に包まった主任ってばなんかきつと温かいんだろうな

とか、そんなことが頭を過ぎった僕はもう気持ちはバタバタしちゃって、でもなんか言わなくちゃ、と焦って、

「おはようございます」

となんとも間抜けな一言を言った。すると、

「………なんでここに居るの？」

不思議そうな顔のまま、そう返された。

「………」

えー、ちよつとそれってないんじゃないんですか。

そのまんま口から出そうになった僕は、「え」と言う形の口で固まってしまった。主任が僕の右手、と言うことは自分の左側をじつと見上げているのに気がついたからだ。ああ、そうだった、と思つて急いで目をやると、すでに携帯電話の呼び出し音は鳴り止んでいた。

うそ、これが止んじやつたらこんなかつこうしてる理由がつかないじゃん。

「ええと、ですね、……まずどきますね」

「ええと、とにかく上からどいてくれない？」

おんなじことを口にして、互いに互いの顔を見返してブッと噴出した。

「主任覚えてないんですか、昨日『泊まってけ』って言ったの」

「………はあ？」

「……マジで覚えてないんですかあ」

「あー、えーと」

クスクスと笑いながら僕は主任の上から、もといベッドの上から降りた。羽毛布団の端っこを持ってこっちを見ている主任に、「ああ」と気がついて携帯電話を渡す。

「中山取締役から電話が入ってましたよ、ずいぶん長く呼び出してたから急ぎの用事だったのかもですが」

「えっ」

取締役と付き合つてるといふ『噂』がある主任、休みの日の朝に

電話って言ったら、デートの誘いとかそんなところなのかもしれない。

「なんだ、そうだよな、きつとそうなんだよな。なぜだかそう思うと胸がきゅう、と痛んだ。」

こういう色が好きなのか、薄いピンクの携帯電話は主任の手に渡ってそれを見下ろす主任の顔がすつと真顔になったかと思うと、すぐにくるんと目を閃かせて僕の顔に視線を合わせた。

「一応訊くんだけど」

恐る恐るって感じで、半分だけ不安めいた声が聞こえてくる。

「なんにもなかったよ……ね？」

「あつ……」

ぎよつとして僕はその場に直立不動になった。

「当たり前じゃないですかっ当然でしょう」

「……あたりまえ、だよな」

ほんの少し、返事が遅れたような気がした。でもクスツと笑った顔がすぐに満開の笑顔になって、そのうち声をあげて「あははは」と大笑いになっていった。

「朝ごはん食べていきなさいね、トーストとカップスープしかないけど」

泪まで溜めてひーひー笑う中で言われたそれに「はい」と返事すると、その笑いの勢いに気圧された僕は「顔洗ってきます」と断って、逃げ出すようにしてバスルームを探すことにした。

8 ケイちゃんって呼んで

「ただいま」

梶原主任の部屋のある田町から山手線に乗って新宿に出て、そこから快速で高円寺についたのは朝の9時半過ぎ。こんな時間じゃもう先輩は部屋にいないのかもな、と思いながら扉を開けると、

「朝帰りとは、章吾もなかなかやるじゃん」

能気な声が頭に降ってきた。

「先輩、まだいたんですか」

「まだとはなんだ、俺は一人暮らしで寂しい思いをしている後輩を思いやってだな」

「・・・寂しい思いなんてしてませんって」

「またまたあ」

章吾はすぐそうやって強がるんだからな、と全然僕の話を見殺して方向違いの納得をしたあと、「お前朝飯は？」と今度はまともなことを訊いて来た。

「食べてきました」

「あつ、じゃやつぱり女のトコだな、何だよ水くさいなあ、そんならそうと言ってくれよ」

「・・・そう言ったらここから出てってくれるんですか？」

「そうは言っていない」

なんだよそれ、とがつくりと来て玄関で座り込むと、まあまあ上がれよ、と肩をポン、と叩いた。

「ここって僕んちですって！」

「まあそうだな」

ハハハ、と笑って奥に引込んでいったのは大学の時の2年先輩で、今は六本木のスタンディングバーで店長をやっている。名前は上原圭一、『ケイちゃんって呼んで』というのが挨拶代わりのイケメン、と言っていていいんだろうな。大学にいた頃はたいして親しくな

かつただけれど、『ラウドネス』のショップ店員をしていた時、お客としてやってきた先輩に『お前ってさあ・・・』と声を掛けられてからなんとなく仲良くなって、で今はなんでこうなったのか、僕の部屋で一緒に暮らしてる。

「いいかげん、謝って帰ったらどうですか」

「・・・だれに」

「だれにつて」

玄関の脇にあるキッチンを抜けて、その奥の8畳一間の壁際に作りつけのベッドにごろんと横になると、先輩はまるでそこが自分専用でもあるように楽々とした顔になって僕を見上げた。

「・・・俺、ここの方が居心地いいんだよね」

「ったく、涼子さんに言いつけますよ」

「言ったって平気だよ、きっと『あ、そう』で終わるに決まってる」

「あーそう、そうですね、じゃ本気で言いますよ」

「どうぞお好きに」

まったくもう、つと僕が言っても全然気にする様子もない。

涼子さんと言うのは先輩が店長をしている店『ANAGURA』のオーナーで、先輩よりも年上、と言うことしか知らない。結構な美人ということだけど実は僕は声しか聞いたことのない相手で、しかもそれって先輩が家出したって言って転がり込んできた時に掛かってきた携帯電話に僕が出て、「絶対帰らないって言え」としか言わない先輩の代わりに事情を説明したんだかされたんだかって状況だったからなんていうか、修羅場だった印象しかないんだけれど。帰らないと宣言したとおり、先輩はその日から僕のところ居ついてしまった。

何を言ってもヘラリと返す先輩にかまってるよりは、まあ今はシャワーを浴びて着替えだよな、とタオルをもって出て行こうとする

と、

「で、どこに行ってたんだ」

あっさりと聞かれた。だから僕もするりと言ってしまった。

「梶原主任のところ」

「あの年上の上司のトコか！」

驚いた声を上げて飛び上がると、先輩はニヤリと笑って僕の前に立ちはだかった。

「いくらあこがれだからってさ、年上は止しとけよ」

「そんなんじゃないですよ」

そう、そんなんじゃない、僕にとってじゃなくて梶原主任にとっては。

一晩一緒に居て、当たり前のように何にもなかったよねと訊かれて、当然ですよと返事したら大笑いをされた僕は、先輩のニヤニヤする顔が無性に腹立たしくなってもう一度、「そんなんじゃない」と言い返した。

9 オレンジマーメイドの味は？

「で、本当のところはどうなんだよ」

シャワーを浴びて出てきたところで、先輩は待ち構えたように訊いてきた。ボタンと後ろ手で閉めた扉に半ば身体を押さえつけられるようにして問い詰められて、んともう、と口を尖らせながらそれでも素直に答えた。

「ホントのところって、本当にただ泊まらせてもらっただけで」

「朝飯まで作ってもらったか？」

「あつ・・・朝飯って言うか・・・」

作るってほどのものじゃなかったし、と僕はまだ2時間も経っていない前のことを思い返した。

「はい、どうぞ」

とん、と目の前に置かれたのは淡いブルーのマグカップで、まるでお椀に取っ手がついたような形をしていた。

「ホントにトーストとカップスープなんですネ」

「悪い？だったら食べなくていいわよ」

「あ、いや・・・戴きます」

厚切りのトーストにはまずマーガリンを少し塗って、その上からオレンジマーメイドを透けるくらいの厚さで塗って出された。朝から甘いジャムなんて思いながら、でも文句は言えないしなと一くち口にすると、意外にこれが優しい味ですごく旨かった。そういえば朝なんて、こんな風にまともに食べるのってないよな、とんだかホッと安心してもう一口かじった。先輩が居候するようになってから、たまに朝早く居る時はご飯にお味噌汁に卵焼きっていう信じられないくらい真つ当な和食が出てくるけど、仕事柄僕と入れ違

いで帰ってくることのほうが多いから、それだって本当の本当にたまにだしな、なんて考えながらひたすらモグモグと口を動かし続けた。

スープはただお湯を入れるだけのものだったけれど、それでもこうしてちゃんとカップで作ってもらうと美味しいんだな、と感心して、最後の一滴まできっちり攪うようにして飲み干した。

「ごちそうさまでした」

カップを返すと、自分に比べるとあんまり進んでいない主任のカップの中身が目に入った。昨日の晩は結構飲んだから、食欲もさほどないのかな、とそれは特に気にするほどじゃなかったけれど。そういえば、と僕の返したカップを大事そうに両手で抱えていたのを思い出した。

「なんだろう、あれ」

「なに、なんかあったのか」

「え・・・そうじゃないんですけど」

あれ、と思ったのはほんの一瞬だった。その証拠に、今さっき思い出すまでおかしなことには思っていなかった。そのカップは主任が使っていたのと似てるっていえば似てる形で、色が違うだけだったというのも思い出した。

先輩がまだ何か聞きだしたそうに覗き込んでくるのを遮って、頭にタオルを載せるとゴシゴシと擦りながら先に立って歩いた。

「とにかく、僕は本当にただ泊まらせてもらっただけで、あとは何にもないですって。それに・・・」

「それに？」

僕がいる間は主任は、中山取締役に携帯電話を掛けなおそうとしなかった。それってつまり、僕は邪魔だということだよな。

「梶原主任には、僕の会社の社長の息子さんっていう、グレードの

高い恋人が居るんですよ」

言い切った僕は、先輩のまだ疑ってる顔を振り切ってもう一度寝付くためにベッドの上の枕に顔を押し付けた。

10 梶原理沙子のユウウツ<1>

手に残されたのは、中身を綺麗に掬われた淡いブルーのマグカップ。

よほどお腹がすいていたのかとも思ったけれど、そうじゃなくてもあのくらいの時は誰だってガツガツ食べるわよね、とその様子を思い出してクスリと笑った。

甘いジャムは嫌いだろうかと内心心配しながら差し出したトーストは、ひどく気に入った感じですぐに食べ終わってしまった。その様を見てこっちはお腹が一杯になっただなんて、きつと思ひもしないんだろう。

『ごちそうさまでした』

ペコリと音がするように頭を下げると、日浦はなぜか照れたように笑って帰っていった。こっちを振り返りもしないで、朝早くここを出て行く彼を見送っている私が何を考えていたかなんて、この先ずつと解りはしないだろう。

「あーあ」

私は馬鹿だな。

強がるのもいい加減にしろ、ときつと言われるわよね。和孝には。

昨日の打ち上げは企画室の全員が参加したのは1次会だけで、2次会まで流れたのは私と小原部長、佐々木さんと米山君、それと美奈ちゃんと日浦の6人だった。普段は『飲み会』自体に参加したくない日浦が居たことに私は驚いて、同時に嬉しいという思いを抑えることが出来なかった。

そう、嬉しかった。

それがそのまま行動に出た。

お酒には強いという自信はあったけれど、それでも昨夜は羽目を外しすぎたとは自覚している。そうじゃなかったら、日浦を強引に

部屋まで引つ張ってきて、泊まっていけだなんて言えるわけがない。

ふう、と息をついて手元のカップに目を落とした。

何を期待して、だなんてのはそのときはさっぱり頭になかったけれど、ただ一緒に居たいという思いだけは強かった。

好きだから。私は日浦が好きだから、一緒にいたいという自分の気持ちに酔いが拍車をかけたのだ。

でもそれも、私だけの独りよがりだ。

そう自分に言い聞かせて、ついさっきの出来事を思い出した。

朝起きたら目の前に日浦が居たのには心臓が飛び出るほど驚いたけれど、日浦の色気もそっけもない態度がいつも仕事で接している時となんら変わりがなくて、私は自分自身にがっかりしていた。

それでも思つて「なんにもなかったよね」と訊いてみれば「当たり前です」と平然と返されて、ああもう決定的、と納得するしかなかった。

なんとも思つてないわけだ、日浦は、私のことなんか。

ホントばつかみたい、私つてば。しかも最後の最後まで、年上の振りして格好つけてさ。

あーあ、馬鹿みたい、と何度目かの馬鹿を呟いてから、初めて使ったペアのマグカップを、キッチンのシンクにとんと置いた。

そこでやつと思ひ立つて、テーブルに置きっぱなしだった携帯電話の履歴を開いた。和孝が朝っぱらから遠慮無しにかけてきたということは、きつとまた何か揉め事でもあつたんだろう、そう思うと無性に腹が立ってきた。

いい加減にするのはそつちよね、いちいち私に連絡してくるなつて言うのよ。

声に出さずに毒づきながら、履歴の一番最初をプチンと押した。

『理紗子っ遅いじゃないかっ』

ワンコールもしないうちに、キンキンとした声が響いてくる。

「遅いって、何？何かあったの」

内心は「またかよ」と思いながら事情を聞いてみる。すると案の定、和孝はいつもの通りのことを言ってきた。

『祐志、そっちに行つてない？昨日から居ないんだよ』

「・・・和孝、これで今月何回目よ」

そこでうつと詰まった声が出たことはしたけれど、この男のことだ、これくらいで落ち込んだりするわけがない。

『あー、4度目くらいかな』

ハハハ、と笑う声にはまったく悪気はなかった。能天気なことこの上ないな。

祐志は私の双子の弟で、フルネームは荒木祐志、中学生の時に両親が離婚して別々に引き取られたから名字が私とは違っている。でも姉弟の繋がりはそんなもので離れるわけがなくて、高校・大学と一緒にのころを選んできた。そうして大学の時に、この和孝と出会うわけだが。

私にとってただの先輩でしかない『中山和孝』は、祐志にとっては運命の相手だったのだ。

「それで足りたかしら」

祐志だって喧嘩をするたびに私のところにやってきていたんじゃ、すぐに和孝に掴まるとわかってるんだもの、よほどの馬鹿じゃないとそんなワンパターンなことをするわけがないじゃない。なのにこの男は必ずここにいてる決め付け。で、居ないとなると次の台詞もわかってる。

『どこに行つたか知ってるだろ？理沙子なら』

「・・・知るわけじゃないの」

『嘘だろ、昨日の晩は祐志が出てつてから君のところに何度も電話したんだ、だけどちつとも出ないから、絶対に一緒に居ると思って、

・・・

威勢のいいのが次第に小声になってくる。ふん、いい気味だね、と声には出さずに毒づいた。

私かわざと祐志のことを匿って電話に出なかったとでも言いたいのか、この馬鹿男は。

「いくら双子だからって、何でも知ってるわけじゃないわ。それに昨日は企画室のみんなと一緒に飲みに出たの、電話なんて気がつかなかったわよ」

『企画室のメンバーで、って・・・日浦ってヤツも行っただのか』

日浦ってヤツ、というところでそれまでの調子とガラリと変わって、ぐんと低くなった。気にしていると心配になったとかそういうのじゃないと思うけれど、露骨といったら露骨過ぎるのに苦笑して、あっさり「そうよ」と言っただけだ。

そこで和孝は、今日初めてと言っただけほど緊張した声で『それで？』と訊いてきた。

「それでって、別に何にも無いって。ただみんなで気持ちよく2次会に行って、いつもの通り気持ちよく帰ってきて」

あっけらかんと続ければよかったのに、そこで私の声は止まってしまった。電話の向こうでじつと私の言葉を待っているのはわかったけれど、私はなかなか次の言葉を言い出せずにいた。部屋に帰ってきてそれで終わり、いつものことよ、と言えばそれで済んだのに。

和孝と祐志は私の気持ちを知っている。日浦のことを想っているって、知っている。それがもしかしたら、甘えに出たのかもしれない。

「ねえ、和孝」

『・・・なんだ』

「私って、女の魅力無いのかなあ」

口に出してしまってから、ああ馬鹿な事を言った、と私は思った。

11 梶原理沙子のユウウツ<2>

『理沙子』

「ごめん、なんでもない」

すぐに必要ないくらい明るい声でそう言って、あははは、と笑い返した。

そうして和孝には、「私も祐志に連絡とって見るわ」と言ってそそくさと電話を切った。

その前に『・・・どうした、大丈夫か?』と聞かれたけれど、それには返事しないままだった。何が大丈夫なのか大丈夫じゃないのか、それすらわからないのに返事なんか出来るわけじゃないじゃない、そう思ったから。

なんて、嘘だ。

和孝に大丈夫と聞かれて、大丈夫じゃないだなんて言ったら、その先何を言い出すかわからない、と言うのが本音。

日浦がここに一晚泊まっていたというのは事実だし、何もなかったのだから疚しいことなんかないんだけど、その『何もなかった』というのを知られなくなかった。

「気が小さいというか、なんというか・・・」

なんだ、私もこうしてみると普通の女だね。

フツツと笑って伸びをしたら、まだ右手に持っていた携帯電話が気になった。

祐志、昨日から帰ってないってどこに行ってたんだろう。

正確に言つと、和孝と祐志は一緒には暮らしていない。祐志は成城にある荒木の家で、祖父と父と一緒に男ばかりで暮らしている。祖父は弁護士をしていて、跡を継がなかった父を飛び越して祐志に期待をかけていたんだけど、祐志はそれがいやで高校生の頃から

ほとんど家に居つかなかった。離婚した夫婦というのは一般的にはどんなものなのか、人の話を聞く限りは二度と会いたくないと言うものなんだろうけれど、私の両親はその点ずいぶん違って離婚してからのほうがその関係は良好なように思う。雑誌編集者と、広告デザイナーという関係においては。

母は常々「私は家庭よりも仕事を取ったんだ」と語っているけれど、見ていると到底家庭に納まっているような人じゃないんだからそれを無理に押し込めようとした父にも問題があったのだと今なら思う。でも、その当時は両親が離れるなんて信じられなかったし、何より祐志と離れるなんてありえなかった。なのに祖父は祐志を手放すのを嫌がった所為で私が母と、祐志は父と祖父と暮らすことになった。どうして私が父親との暮しを選ばなかったのか、今となっては何が理由かもう思いだせなかった。

母が一人で広告デザイナーの道を歩んで行ったその脇で、私と祐志は一緒になってその姿を応援していた。祐志は母から離れるという選択をされたから尚更、事あるごとに母の味方についた。だからだと思う、大学進学ときに私が平凡な経済学部に進みたいと言ったのにたいして、祐志「母さんと同じ仕事がしたい」と言い出したのだ。

私は迷った。同じ大学に行くものだとばかり思っていたから、デザインの勉強をするだなんて考えていなかったから、祐志の行きたい道と同じものを選んでいいのか迷った。でもそれは、祐志にしても同じだった。気持ちにはデザインの道に進みたい、でも一番それに反対していたのはほかでもない成城の祖父で、それに逆らい切ることも出来なかった。芸術系の大学は絶対に受験させない、祖父の態度は強固だった。

そんなときに母が関わった若手クリエイターを対象にした広告デザイナーコンペティションで、蒼山学院大学の『国際経営学科』の学生が大賞は逃したものの審査員特別賞を受賞したという話を知って、祐志はそこを目指すを決めたのだ。

先達がいるからって、同じことが出来るとは限らない。そう言う祖父に、同じことをするつもりはないと言い切った祐志は、失敗したらその時こそ祖父のあとを継ぐと約束した。

そうして、結局自分の意志を貫いた。

思えば、あそこで祖父の言うとおりにしていれば祐志は和孝と出会わなかったのだ。

携帯電話のグループフォルダを開きながら、それを漠然と考えた。

それまでは女の子にだって一生懸命になったことのない祐志が、大学の先輩の話をする時に何でそんなに嬉しそうな顔をするのか、早く気がつけばよかった。そのうち一緒に出かけることが少なくなつて、でもそれはやっぱりいくら双子だからって男と女だから、付き合いの違いは出てくるのが当たり前、そうなんだと思っていた。しかし事實は違ったのだ。祐志が和孝と一緒に過ごす時間が増えていっただけで、だから私から離れていただけだった。

今だってこうして、大の大人が一晩帰ってこないというだけで和孝を心配させるほど、二人の関係が誰よりも近いというだけだ。

「・・・なんだ」

祐志の番号を選んで発信して、留守番電話サービスにすらしていないのか何回も呼び出しているコールを聞きながら溜め息をついた。

私は結局、祐志が羨ましいんだ。

成りたいという自分に成って、同性と言うハンディを乗り越えて好きな相手と一緒になって、何もかも思い通りにしている祐志が羨ましいんだ。

「こっちは何一つ思い通りにならないって言うのに」

パチンと電話を切って、こうなったらGPSで探し出してやろうかと思っただけで、そんなことはきつと和孝がもうやってるだろう、そう考え付くと尚更ばかしくなった。

そのうち見るだろうとメールで一言、『どこにいるのよ?』と打ち込んで、あとはもう面倒になって携帯電話はベッドの上にポンと投げ飛ばした。そのときは月曜日の予定なんかすっかり忘れていて、折角のいいお天気なのにと窓から外をのぞきながら、でも出かける気はこれっぽっちも起きてこないで、自分一人のためのコーヒーを淹れるために立ち上がった。

12 戸惑いのモーニングコーヒー

週が開けた月曜日、僕はイマイチ落ち着かない気分で自分のデスクに座っていた。

『で、本当のところはどうなんだよ』

と訊いてきた先輩には『主任には恋人がいる』だなんて言っただけで、自分の口から出た言葉の意味を思い返して、朝からじわじわと焦りにも似た『何か』がこみ上げてきていた。それはあの日主任の部屋からの帰り際に見た『何か』に近いようで、でもそれを探ろうとするとするりと逃げてしまつて、自分自身でもどうしてだかわからなくて、それで落ち着かなかった。

「おはよ」

はい、モーニングコーヒー。

と言つて美奈ちゃんが持つてきてくれたのはオフィス仕様のプラスチックカップだったけれど、そこから立ち上る柔らかい湯気に救われたように一口くりと啜った。その隣で、自分のデスクに戻るうとしないで美奈ちゃんは窓越しにエレベーターホールのほうを気にしていた。

「今日は荒木さんが来るつて。来春のカタログの話かしらね」

「へえ・・・もうそんな時期になつたつて」

カレンダーはまだ10月、でも来春2月に春物のコレクションを発表するとなると、もうこの時期からカタログだデザインだと動かないと到底間に合わない。コレクションのデザイン自体は出来上がっているけれど、一般販売向けにどういった布地にするとか、柄はどうするとか、コストを踏まえたうえで詰めていかなければならない部分はまだまだある。1年のうちでもコレクション発表という大きな仕事は、僕たち企画室が手がけるのではなくて、デザイン

事務所をお願いしてポスターやカタログをトータルで作り上げていく。今回それを任せているのが、今名前の出てきた荒木氏がトップを務める『KISARAGI DESIGN』だった。何でもコピーライター出身の荒木氏は、ここの会社の社名『ラウドネス』の命名者だつて聞いたことがある。

「そういえばね、荒木さんってウチの取締役と大学時代、先輩後輩の仲だつたんだつて」

「・・・へえ」

あんまりにも上の空な返事だつたんだろうか、美奈ちゃんはちょっと訝しげに「どうしたのよ」と、僕の顔を覗き込んできた。

ちょうどその時、全面ガラス張りの扉の向こうに梶原主任と中山取締役、そのまた向こうに荒木氏が並んで歩いてるのが見えた。不意に顔を上げた主任と僕はぼつちり目が合ってしまったて、でも扉に背中を向けている美奈ちゃんはそんなことに気がつかないで尚更僕の方に身を乗り出してきた。

「なあに、まだ二日酔い？」

からかうように言つてクスリと笑つと、それとも風邪でも引いたの？この間は夜遅くまで飲んでたもんねえ、と今度はさも心配げに額に手を伸ばしてきた。わっ、と思つたときには主任は戸惑つたようにして目を逸らすし、隣の実締役にはむっちゃくちや怖い顔で睨まれるし、そうして荒木氏はその一部始終を見終わつてから、梶原主任になにやら声を掛けると、こっちに来るはずだつたその角を曲がらずに真つ直ぐラウンジの方へ行つてしまった。

視界から荒木氏が見えなくなつてからその後を追いかけるようにして梶原主任が僕の目の前から消え、取締役はまだ怖い顔をしてる・・・。

「美奈ちゃん・・・」

「え？」

「取締役が来るよ」

「ええっ」

ぴよんと弾かれたように飛び上がると、「わぁ」と小さく言いながら美奈ちゃんは自分の席に戻ってしまった。僕はと言うと、え、つともあつ、とも言わないうちにつかつかやってきた中山取締役に目の前に立たれて、

「日浦君、遊び半分でいられちゃ困るんだよ」

普段の王子様風のまったりしたキャラクターがすっかり引込んだ、厳しい口調で一喝された。

「あ・・・すみません」

慌てて立ち上がりペコリと頭を下げると、しばらくじいっと上から下までまるで品定めをするように見られて、そうしてなぜか「はあ」と溜め息をつかれた。

背が高くてきりつとしたイタリアンテイストのスーツがよく似合う、誰が見ても『上質の男』。僕はこの取締役に『仕事』を買われてこの企画室にやってきた。

仕事に対しての閃きは会社では誰もかなわなくて、これは思ったことには思い切りがよくて、しかもなにをやっても上手く行く、そりゃ主任だつて好きになるよな。

そこまで考えて、僕はドキツとした。

その中山取締役は、もしかしたら土曜日の夜のことを知って・・・
・・・・

ヤバイじゃん、いくら疚しいことがないからって、絶対ヤバイじゃないっ

「あ、あのっ取締役っ」

「春物のラフ、上がったっけ」

取締役は美奈ちゃんに向かって声をかけると、「これです」と差し出されたファイルをチラリと見てから僕に渡した。

「荒木くんがラウンジに居るから、これ渡してきて」

えっ、と見上げる僕は、威圧感バリバリの腕組みした格好で見下

ろ
さ
れ
た。

13 梶原理沙子のユウウツ<3>

「祐志、昨日はメール見なかったの？」

月曜、朝から打ち合わせでやってきた祐志に私はそう声を掛けた。

「・・・携帯、見てない」

日浦の事があつてすっかり忘れていたけれど、2月に発表になる春物のコレクションのカタログのポスターや宣伝媒体向けのコピーやらフォントやら、そういったことを『K I S A R A G I D E S I G N』と細々と話し合うという予定をこの日入っていたんだった。

だつたらあんなに心配することなかったのに、と当の和孝に言つてやろうとして向こうから歩いてきた和孝に手を上げたら、

「どこに行つてたんだよっ」

目の前についたとたんに祐志に向かって小声で、でもかなりキツイ調子で言ってきた。

「土曜は知り合いのところで呑んでた、それから成城に居たよ」

これは私に向かって、祐志がぼそりと言った。

「成城？」

和孝はひどく意外そうな顔をして聞き返した。

実家に帰ってただなんて、それは盲点と言うかなんというか、私は思いつきもしなかった。大学を出て、しばらくイギリスに行つて帰ってきたらすぐに母親の会社に入つて、それからそのビルの最上階に寝泊りするようになってから、実家に帰るのは月に数えるほどになったというのに。特別な何かがあつたのかと思っていたら、和孝が必死になつてなにやら訳のわからないことを話し出した。

「あ・・・あれは親父の独断で、えっと、俺は全然その気じゃなく

て」

「別に俺は・・・」

「だから、なにもお前が心配することは」

「何にも心配なんかしてないよ、なんだよそれ」

「だってっ」

きりつと見返した祐志が先にたつて歩いて行くと、和孝は普段は絶対見せないような慌てた様子で後を追った。それについて行くと、祐志は私の腕を取って傍に引き寄せた。

なんだか和孝に対して、バリアでも張っているようなっ恰好だ。

「祐志、知り合いつて誰のこと？」

肩が触れるくらい傍に寄つたのを利用して、耳元で聞いてみた。

一緒に飲んだたというのが私の知ってる人なら様子を訊いてみよう、そう思つて尋ねたのに「ちよつとね」としか言わなくて、目線すら合わせなかった。企画室のある4階まではエレベーターを使う、そのためにエレベーターホールで立っている間も、祐志は和孝の方は一度も見ないで真っ直ぐ前を向いている。

気まずい空気が我慢できなくて、私は明らかに不自然な調子で言つた。

「・・・お父さん、元気だった？」

「まあまあだな」

私が掛ける声を、和孝が顔には出さなければ必死で聞いているのがわかる。まったく、なにがあつたのか知らないけどこの様子はただ事じゃないわね。なのに昨日は「帰つてこない」と言うだけでさほど慌てていなかった・・・いったいなんだろう？

不思議に思つて和孝の顔を見上げると、ばつの悪そうな顔をして目を逸らした。

祐志はと言うと、微動だにしないで立っている。

ますます持つて怪しいじゃない。

チン、と軽い音がしてエレベーターのドアが開いた。

正面にある鏡に3人の姿が映って、なんだか妙な雰囲気のまま狭い箱の中に入り込んだ私は、誰も手を上げないのでしかたなく4階のボタンを押した。

14 梶原理沙子のユウウツ<4>

「理紗子、春物は少し色が入るって言ってたよな」

中にいる間は一言も喋らなかったのに、エレベーターが4階について足を踏み出したとたんに祐志は私に聞いてきた。

「ええ、アースカラーがベースだけど、そこに赤やピンクを入れて効かせ色にするっていうのが春のコンセプトで」

そうよね、と和孝に確認しようと振り返って、まだしよげた表情をしているその顔に「まったく」とため息をつきたくなった。

和孝は私の左側、歩幅が大きいのでついていくのがやっとなのに祐志はそれにお構いなしでゆったりと歩く。その間に挟まって、私はどっちつかずでエントランスホールから会議室までの廊下を歩いた。

さっきの二人の会話、なにか私の知らないことがこの二人の間にあるのは明白で、それも土曜日に起こったことらしいのは流れでなんとなくわかった。和孝が何かやらかして祐志がへそを曲げた、だなんてことは日常茶飯事で、それならこうまでこじれることはないだろう。

そう思うとどうにも不思議で仕方がない。

祐志だって成城の家に行ってたとなると、本気で探してもらいたくなかったわけだ。

私だって思いつきもしなかったんだから。

そんなことを考えながら角を曲がって、企画室が斜め前に見えるところに行き着いて、ふ、っと顔を上げると日浦の姿が正面にあった。

しかもその手はいつも日浦に付きまどって新沢って言う子の腰を抱いてて。

「・・・えっ」

「日浦じゃないか」

「・・・あれが日浦？」

祐志の声が少し遅れて聞こえた。

はっとして立ち止まると、日浦に覆いかぶさっていた彼女はぐんと前に乗り出して、日浦に顔を近づけていくのが見えた。

その瞬間。

仕事中でしょ、とか。

昼間っから、とか。

そんなことじゃなくて、相手はなんで私じゃないんだろうと思う
とそう思ったことに戸惑って、そこから先に進めなかった。

「先に行ってる」

私の周りの空気が、その一言で解けた。

「祐志」

軽く片手を上げて行ってしまった後を追って行こうとすると、和

孝は反対に企画室の方へずんずんと歩いていった。

どうしよう。

どうしよう。

迷ったのはほんの一瞬。

和孝が企画室のガラスの扉を開けてしまったとき、私はくるりと
振り返って祐志の後を追った。

15 これって好きって事？

「あの、僕が行くんですか」

「他に誰がいる？」

「あ・・・いえ」

そろーっと振り向くと美奈ちゃんはこっちなんか知りません、つてな顔をしてデータ打ち込みに専念していた。

裏切り者お、元はといえば美奈ちゃんが誤解されるようなことをしたからじゃないか。

ムツとした顔で思わず口を尖らせると、中山取締役が腕を組んだまま僕のまん前に移動してきた。こうやって間近に迫られると、やっぱり背が高いよな、だなんてのんきなことを考えていると、

「・・・お前さ」

ずいぶんと小さな声で、ちょっと前かがみになってそう言われる。えっ？と思ったのはそんな風に砕けた言い方で声をかけられるなんてことは初めてだったからだ。

とたんに僕は悟った。

やっぱり土曜日のことはバレてる！

「す・・・すいませんっ」

手渡されたファイルをぎゅっと抱えると、ガバリと頭を下げた後ずさった。

そりや何にもなかったけれど、だからってそれをここで言ったからって土曜日のことがなくなるわけじゃない。

「日浦君・・・？」

「すいませんすいません・・・あの、行って来ますっ」

取締役が次に何か言ってくる前に、きつと梶原主任と僕のことを疑ってるんだろ？からそれを問い詰められる前に、僕はその場から逃げ出すことしか思いつかなかった。

ボタンと音を立てて強化ガラスの扉が閉まった向こう側で、なに

か言ってる声は全力で走り去った僕の耳には入ってこなかった。

だから、僕には聞こえなかった。

「……美奈子さん、困るんですけど」

中山取締役は他には聞こえないように、でもずいぶん丁寧に言った。

「だって」

「だってじゃないです、ここは会社なんですから」

「……ごめんなさい」

ペロリと舌を出して肩をすくめると、パチパチッと瞬きして「うふふ」と笑う。

「まったく」

なんだってこんな苦勞をしなくちゃならないんだ。

ふう、と息をつくとくるりと踵を返して取締役は企画室を後にした。

本当は企画室の隣にある会議室に来るはずだったデザイナーの荒木氏は、エレベーターから真っ直ぐ歩いていった突き当り、二方向を窓が占めているラウンジにいるはずだった。でもそこにはさっき僕と目が合って驚いた顔をして、何故だか傷ついたように見えた主任もいるはずで。

近づくにつれて足が遅くなった。角を曲がる頃にはもう止まりそうで、曲がりきったところでとうとう本当に止まってしまった。

なんだろう、これ。

すごく悪いことをしているような気になってるんですけど、僕は。

抱えたファイルを強く握り締めて、そうだよな、と思い返した。

そうだよ、主任は取締役の恋人、で、その恋人の取締役が僕のことを疑ってて、それは僕が主任のところに泊まつちゃったからで、別に何にも疚しいところはないんだけれどそれはやっぱり『恋人』にしてみれば許せないことで。

・・・僕が悪いんじゃない。

いくら泊まつていけって言われたからって、その気もないのに女性の一人暮らしのところに入りこんで一晩過ごしちゃうって言うのはいけないことだって。

あれ・・・でも。

下を向いて、足元をじっと見た。

でも、その気がないってのはなんか違うような気がする。

朝から感じてる『何か』がそこにあるようで、僕はそれを追いかけたくなった。もう少し手を伸ばせば捕まえられる、そんな感じがして浮かんできたのは朝ごはんと一緒に食べてる時の主任の顔で。

嬉しそうな顔だった。

なんとなく、こっちまで嬉しくなるような。

すぐ嬉しそうな顔、で僕はそれを今失くしたくなくて、でもこれって。

先輩の言う『あこがれ』とは違う。

そうじゃなくてもっとちゃんと。

好き？

「うわ」

頭にボツと出てきた単語に我ながら驚いた。

ファイルで顔を隠したままバタバタと先に進んでラウンジに着いて、荒木氏を捜さなくちゃって顔を上げてすいと目を動かし

た先に、主任がいた。

僕の搜してる荒木氏に腕を捕られて、よろめいたところをぐつと抱きしめられて、そうして。

「俺は、お前の泣き顔を見るのはいやなんだよ」

荒木氏が主任に向かって言う言葉が、僕にも聞こえてきた。

16 ウーロン茶の告白

「何だ元気ないな」

辺りが人の話し声でざわざわとしている中、「はいよ」と目の前にウーロン茶の入ったグラスをトンと置かれた。

ここは六本木のスタンディングバー『ANAGURA』。先輩が店長をやっている店で、今日も先輩を目当てにやってきてる女の子でカウンターの周りはぎゅうぎゅう詰めになっている。店に入っただけで見たとたん、先輩に手招きされたけれどそんな中に入っただけでその女の子たちからどんな顔されるかわかったもんじゃなかった。ちよつと離れたテーブルについてホールを担当してる睦巳くんが「ウーロン茶お願い」と頼んで後はボーっとしていた。

店内には奥の方にVIPルームって呼んでるボックス席が一つあるだけで、あとは全部背の高いテーブルがよきよき立ってて、ここは本当に「スタンディングバー」なんだけれど、お客さんはほんの一時飲んで帰るというよりも店にいるお気に入りの男の子を眺めに来てるって言ったほうがいくらい女性客が多くて、しかもそれに充分応えられるくらいスタッフは皆格好が良かった。

先輩はその筆頭で、カウンターの中でシェイカーを振っているとホント僕の部屋でうだうだと寝転がってる姿がウソみたいにかっこいいと思えてくる。

そんな先輩が自ら僕にウーロン茶なんて運んだものだから、カウンターの女の子たちは一斉に僕の方を見て、なんだか不満そうな顔を始めた。

「なんでもないですよ」

「うそお、お前がわざわざここに来るなんてあんまりないじゃん」
だからさ、なんかあったんじゃないかって。

言いながら、くしゃりと頭を撫で付けた。

猫っ毛な僕の髪はすぐにぐしゃぐしゃになるからあんまり触られたくないんだけど、むっとした顔で先輩を見上げたら視線の端の方で女の子たちが今度はなにやらヒソヒソクスクスと笑いながら話し出したのが見えた。

「先輩の取り巻きサンたちに恨まれるからやめてくださいって」

「んなの気にするなよ」

なっ、と肩に腕を回してちょっとだけぐっと抱き寄せられたら、

「きゃー」と小さな悲鳴が上がった。

「・・・なに？」

「なんでもないなんでもない・・・それよかやっぱなんかあっただろ？」

「うん・・・」

あったことはあった。だから独りで部屋に帰るってのがなんだか嫌になつて、で先輩のところに来たつてのは確かなんだけど。

どうやって話したらいいのかわかんないや。

話の続きをいう前に、氷がくると廻ったグラスを持ち上げて一口飲んだ。

「あ」

「うん？」

悪戯っぽくクスリと笑った顔にむっとして応えた。

「これウーロンハイじゃないですか」

「いいじゃんたまには」

「だって僕お酒苦手だって」

「だからたまにはって」

下から覗き込んでクスクスと笑うのにつられて、なんだか笑ってしまつて強ばつてた気持ちが解けてきた。あ、こういうのなんだ、先輩が女性に人気の理由。傍にいてくれる安心感って言うの？それがただ顔がいいってだけじゃないんだって、今わかった気がした。手にしたグラスからもう一口飲んで、僕の傍から離れようとしな先輩に「実は」と話し出した。

「梶原主任なんですけど」

「ん？ああ、こないだお泊りしてきた美人上司な」

「・・・ええ、で主任は恋人がいるって言うてたじゃないですか」

「あー、会社のおエライさんだっけ」

「うんうんと頷きながら先輩は先を促した。

「なんですけど、どうも違ったみたいで」

「ああ？まだ他にいたのか」

「ええ・・・ていうかちょっと」

「で、ナニ、お前は落ち込んでるっての？」

「・・・ええと」

そうなんです、と言ってしまうのはなんだか気恥ずかしかった。好きと自覚したとたんに失恋するなんて、やっぱり僕には手に入るわけのない高嶺の花だったと決め付けられたようで、ぐっと来ちゃって。

口ごもった僕の肩をポンポンと叩くと、まあもう一口飲めって、と言って先輩は僕に訊いてきた。

「で、知ってるヤツだったのか？」

「え」

「だからさ、その美人上司の相手、知ってるヤツだったのかって」

「・・・はい、あの」

もう一口、コクンと飲み込んでから僕は言った。

「春物のコレクションのカタログをお願いしているデザイン事務所の人で、荒木さんって言ってます。『K I S A R A G I D E S I G N』ってところのデザイナーで」

僕は自分の思いを吹っ切るように、きっぱりとした口調で言った。そうしたら、

「・・・うそだろ」

「え？」

「それって間違いじゃねーの？」

驚いたような顔をした先輩が目の前に居た。

「先輩・・・もしかして」

荒木さんのこと知ってるんですか、そう訊こうとしたのは傍を通ったスタッフの声に遮られた。

「オーナー、いらつしやいませ」

僕がその声に気付いて振り返ると、そこにはロングの髪をゆったりとしたウェイヴにして肩に垂らしている、むちゃくちゃスタイルのいい女の人が立っていた。

コツコツ、と小気味のいい音が近寄ってくると、その女性は僕の顔を見据えて言った。

「圭一、この人なの？」

17 ブルー・マルガリータ

「涼子さん、来るんなら連絡くれればいいのに」

すつとオーナーと呼ばれた女の人に近寄った先輩が、その耳元に話しかけるのが聞こえた。オーナーって言うのと、思いだしているところに先輩が戻ってきて、僕にその女の人を紹介した。

「もう知ってるよな、こちらが川島涼子、さん」

そうしてすぐに振り返るとその人の腰に手を回し、抱き寄せて言う。

「今世話になってる大学の時の後輩の日浦」

まるで内緒ごとを言うように小さな声で僕を紹介した先輩は、後ろの取り巻きの女の子達が盛大にため息をついているのを綺麗に無視してにつこりと笑った。

その代わりとでも言うように、川島涼子さんは身体半分振り返るとカウンターの女の子達に華やかな笑顔を返した。

僕は今日の前で起こったことがまるで一枚の絵のようにあんまりにもピッタリとハマっているのに驚いて、身動きもしないで二人のことを見ていた。

「世話になってる、じゃないわよ」

つん、と横を向くと涼子さんはするりと先輩の腕の中からすり抜け、僕の傍に来て手にした小振りのバッグの中から一枚、小さなカードを取り出した。

「はじめまして、川島涼子です。圭一がお世話になっております」

バサツと音がするほど長い睫毛を伏せて、涼子さんは軽く頭を下げた。そうしてすつと差し出されたその薄いピンクのカードには、極々シンプルに名前と携帯電話の番号が書かれていただけだった。

「あ、あの、日浦といいます」

慌てた僕はポケットを探り、胸の内ポケットからやつのことで名刺入れを取り出すと、社名が斜めにデザインされている『企画デ

ザイン事業部・企画課』と書かれた自分の名刺を差し出した。

「あら、ラウドネスって圭一の好きなブランドじゃない？」

鮮やかな赤いマニキュアに縁取られた細い指が、何の変哲のないただの白い名刺をはさんで先輩の顔をチラリと見た。

一つ一つの仕草がどうにも『色っぽい』としか言いようのないこの女性を前にして、先輩は照れたような顔になって「ああ」と応えた。

「前に一揃え買ってあげたことがあったわ、そういえばあのジャケット、よく着てたわよね」

「色が気に入ってたからな、今年はまた違うのがいいけど」

「まあ早速おねだり？いいわ考えといたげる」

クスツと涼子さんが笑ったのを合図というように、先輩はテーブルを離れるとカウンターに戻って何かをシェイカーに入れ始めた。先輩が動いた所為でそれまでこつちをじっと伺っていたような女の子たちがまたきやあきやあと話をし始める。でもさっきまでの店内と変わらないのに、なんだかここだけ空気が違うんですけど……。

僕がそおつと先輩の方を見やると、いつの間にか伸びてきた赤いマニキュアの指先にテーブルの上に投げ出していた手をとられた。

「……えっ」

「日浦さん、でしたわね」

「はい」

「圭一とは大学から一緒って聞いているわ」

「……はい、そうですけど」

スルン、と撫でられた手の甲から、なんだかぞわつと鳥肌が立った。

「ずいぶん前から仲良くしてくださってるのね、知らなかったわ」

「いえ、あのそう前からって訳じゃ」

「でもあの子の面倒を見てくれてるんでしょう」

「面倒って……ええと」

ねつとりと響いてくる声は容赦がなくて、しつかりと握られた手は引つ張ろうにもびくともしなくて、本能的に危機感を感じた僕は思わず、

「先輩っ」

と声を上げた。

「なんだ」

すぐ上からあつさりと返事がして、涼子さんの左側から「どうぞ」とカクテルグラスがテーブルに置かれた。

「あんまり日浦をいじめないでくれって」

「あら、誰がいじめてるのかしら」

「あ、いえそんな」

「ていうか、お前も辛抱しすぎ。相手にするなよこんなの」

「まあなんて言い方かしら」

「別に虐められてなんか」

「そうよ」

いいながら手で掲げたのはスノースタイルのグラスにブルーの色が鮮やかなカクテルで、コクンと一口飲んだ涼子さんが嬉しそうな顔をして先輩を見上げた。

「やっぱり圭一の作ったのが一番美味しい」

「そりやどうも」

「今度はテキーラをラムに変えてよ」

「XYZ? 結構きついけど」

「そのときはホワイトキュラソーでアイスをクラッシュにして、で、そうだ、ライムの量を多めにしてすっきりさせるといいわね」

うまく出来たらメニューに載せてもいいわよ、とさすが経営者らしく「これはいい」と思ったことには行動力が速いというところを見せ付けられた。

なんだかこういいう人が僕の周りって多いよな。

ふう、とため息をついていると涼子さんが僕のグラスにカチンとグラスを合わせてきて、囁いた。

「今度お昼でも一緒にしない？お電話差し上げるわね」

え、つと顔を上げるとカクテルを飲み干した涼子さんが、僕の返事なんか待っていないで軽く手を振って行ってしまった後だった。

火曜日の朝は、昨日とは違った意味でぐったりとした気分であった。
てきた。

「はあ」

思わず出てしまったため息に、美奈ちゃんが気づいて「どうしたのよ」と聞いてくる。

「あ、いや・・・あはは」

カリカリと後ろ頭を掻いてみても、下手な隠し事はきかないわよと言つような視線には勝てずにもう一度「ははは」と空笑いをして、どんよりと下を向いた。

どうしたのもこうしたのも、結局昨日は先輩に僕の気づいた思いも、目撃した衝撃の光景も、でもって先輩が何か知ってるらしい荒木さんのことも、何一つ話をしないまま『ANAGURA』から帰ってきてしまった。

部屋に着いて、真つ暗な中でぽつんとひとり立っているとなんだか無性に哀しくなつて、思い出さないようにしようと思えばなおさら昼間見た情景が浮かんできてしまつて、ぶんぶん頭を振つて追い払おうとした。

でも、出来るわけ無いじゃん。

はあ、ともう何度目かわからないため息をついてその場にしゃがみこんだ。

どうしてだろう、中山取締役と主任が恋人だつて話を信じていたときは別にここまで落ち込んだりしなかった。そりゃ、会社でよく見かけるツーショットはまるで誂えたようにお似合いで、そこに入り込もうだなんて考えもしないで、ただどなんだろう、それが現実

味を帯びて自分の中に入ってくることはなかった。

でも昨日荒木氏が抱きしめていた主任の背中が、あんまり細くて、その腕の中にすっぽりとはまってしまいうくらい小さくて。

それは生々しいほどの衝撃だった。

どきん、とした。

すぐに目を伏せた。

そうしてドアの陰に隠れて立って、後ろ向きになって。

咄嗟になんで、と思って湧き上がったのは強烈な怒り。

なんであんななんだよ、と口から出そうになってぐっと身体に力が入ったら、手にしたファイルがぐにやりと曲がって、それに叫ぶのを押しとどめられた。

今は仕事中。

頭に浮かんだのはその単語で、僕はこのファイルを荒木氏に渡してこなくちゃこの春のコレクションの打ち合わせははじめることが出来ないことを思い出した。

顔を上げると、角を曲がって中山取締役がこっちにやってくるのが見えた。とたんにさっきのやりとりをぶわっと思い出した。

こんなところにいたんじゃ、余計に変に思われるじゃん。

すうっと息を吸って、くるとラウンジのドアに向き合うと思いきり力を入れて、

「お待たせしました」

僕はそう、言った。

打ち合わせは難なくすんだ。イメージコンテを描いてきた荒木氏と主任の意見がところどころで食い違って、結構キツイ言い合いをしているのが本当にいつもどおりで、最後は主任の意見が勝つてあとはロゴの配置と写植のときのフォントの幅と行間と、と言う細々したことを実際に作ってみてと言う話になって終わったのだけだ。

その最中ずっと、僕はやっぱりどうあってもこの人が好きだ、と思っていた。

ちよつとだけ曲がつている襟元が、さっき荒木氏に抱きしめられた所為だとわかっていても。

好きなんだけれど。

「はあ」

ため息もつきたくなるつての。ものすごくグレードの高い二人が僕の『好き』って気持ちの前に立ちふさがってるんだからさ。

すぐに諦めるよ、と自分に言い聞かせたけれどそれがどうしても出来なくて、何で諦めたくないのかそこを聞いてもらえるかなって先輩のところに行つて、そしたら先輩は荒木氏のこと知ってるような感じでいて。

訳わかんないつて。

ぐるぐると廻る中で、いったい何がどうなってるんだと考えても答えの出ないまま夜が明けてしまっていた。

先輩は朝になつても帰つてこなかった。

きつと涼子さんのところに帰つたんだろうな、と思うとそれだけがなんだかほつとしたようなでも気の抜けたような感じになって、冷たい水で顔を洗つて会社に出てきた。

美奈ちゃんはまだ何か聞きたそうにしている、それでまた誤解されるようなことにでもなつたらと身構えてしまったけれど、さすがにデータ入力から目を離すことが出来ないのかチラチラと視線をよこすだけで何のリアクションも返つてこなかった。

うだうだしてないで仕事しなきゃ。

よし、と気合を入れて立ち上がったところにデスクの電話が鳴つ

た。

「はい、企画課です」

美奈ちゃんの明るい声が響いて、僕にじゃないよなと思っていたんだけど。

予想は見事に外れてくれた。

「日浦さん、外線からお電話です。川島さんって女の人」
「川島さん？」

先輩の店で会った、華やかな印象の女性を一気に思い出した。

19 日替わりランチはベスカトーレ

指定された店に着いて、電話で言われたとおり名前を告げると「お待ちしておりました」と言われて店の奥の方、窓際の眺めのいい席まで案内された。

昨日会ったばかりの川島涼子さんは、僕の顔を見るとにっこり笑ってすっと右手を差し出した。

「お座りになつて」

昨日とは違う色のマニキュアが、ひらりと目の前で閃いた。

「いきなりごめんなさいね」

明るい日差しの中でもやっぱり色つばいとしか見えない人は、ミントの入ったウォーターボトルからカラランカランと耳障りのいい音をさせながら僕のグラスに水を注いで、「これ、評判いいのよ」と教えてくれた。

「一度来なくちゃと思つてはいたんだけど、日浦さんのお勤め先の近くだつてわかつたらもう早速、と思つてしまつて」

クスリと笑いながら窓の外に目を向けた。つられて僕も外を見て、ずつと先の信号が青に変わつて人がどつと繰り出すのを眺めた。この場所は僕の勤める会社に本当に近い場所にあつて、そういえばここつて少し前に新しいイタリアンレストランが出来たつて佐々木先輩が言つてた店なんじゃないか、そう思い至つて顔を戻すと、僕の方を見ていた涼子さんと目が合った。

「あの、ここも川島さんのお店なんですか？」

会話の流れで、それはなんとなくわかつていた。

「ええ、いい感じでしょ」

『La fiore fiorisce』というの、とすらりと流れるように涼子さんは言つた。

注文はもうすでにされていたらしく、僕が席に着いたらすぐにカラトリーが運ばれてきて、小ぶりのサラダと一緒に置かれていった。

洒落たイタリアンレストランというところでも女性客の方が多いものだけれど、ここはぼつぼつと男性客も入っていて、広めに取ってあるテーブルの間がその居心地の良さを作っているようだった。

六本木のスタンディングバーとはずいぶん違った印象だな、と思いつながらきよきよと辺りを見回して、あっちの店は全体に木目調の落ち着いた雰囲気を作っているのに対してここは白が基調の天井の高い、解放的な感じの店になっているからだと思った。

でも。

「なんか、僕は一人ではちょっと入りづらいかな」

どうせなら誰かと一緒に来たいよね。そう思っただけで浮かんでは主任の顔で。

「あら、じゃあ彼女でも連れてくればいいじゃない」

僕の頭の中を覗いたみたいになんて言われて、うつと詰まって目を逸らした。昨日僕が帰った後に先輩はこの人に主任の話をしたんじゃないだろうな、とまさかそんなことはないよなと思いつながら「そうですね・・・」ともどもごと口ごもって返した。

「・・・ランチはお手頃でお奨めのよ。ここら辺はオフィスビルが多いでしょう？お昼時にちょっと足を伸ばしてもいいかなって言う気にさせるには1000円以上は無理なの、だから今日の日替わりランチは魚介類のパスタセットで800円なのよ」

そう言ったところにその魚介類のパスタが運ばれてきた。

「ペスカトーレってメニューに書いておいてもいいんだけど、それじゃなんのパスタ？って必ず聞かれるの、だからウチの店では素材の名前を使って説明させていただいてるのよ」

やっぱり帆立はレアな状態がいいわね、とフォークに刺して、口元まで持っていくところでふつと笑った。

「ごめんなさい、なんだかおしゃべりよね、私」

「あ、いいえ」

熱々のパスタはすごくいい匂いで、一口ち口に入れるとオリーブオイルとトマトソースの香りがふわっと口いっぱいに広がった。細めのパスタはソースをしつかり纏っていて、唐辛子のつんとした辛味がすごくきいている。こういうパスタにはニンニクが付きものなんだろうけれど、オフィス街のランチというのを狙ってか、あんまりきつくないのが余計に唐辛子を際立たせている。

美味しいな、と思った。

でもさ、僕ってただお昼を食べに来たわけじゃないんだっただよ・
・ね？

「あの」

軽くトーストしたバゲットを千切っている涼子さんに、僕は今日ここに呼び出された訳を聞いた。

「お話があるってことでしたが」

電話ではどうしてもお話したいの、としつこいくらいに迫られたすぐ隣にいる美奈ちゃんに聞かれるんじゃないかとひやひやしながら「はい、はい」と返事をしているうちにずるずるとここにくることを承知していたんだけど。

話って、たぶん先輩のことだよな。

大体想像がつくから、なんだかなあ、と思ってしまった。

僕だって先輩には早く涼子さんのところに帰ったらと何度も言うてるんだから、その話だったら僕に言われたって困る。

すぐに返事の返ってこないをちよつと訝しく思いながら、大きな海老だな、と濃厚なトマトソースに塗れたそれをフォークで突き刺していると、

「あなた、圭一とはどういう仲なのかしら」

「え？」

「だから」

じつと僕の顔を見つめて涼子さんが言った。

「圭一のこと、好きなの?」

20 パスタなカミングアウト

「えっ」

ていうか、は？

「あ、でも大丈夫、心配しないで。私は何も二人のことを邪魔しよ
うとか思わないから」

フルフル、と目の前で手を振って、涼子さんはフォークをぎゅつ
と握りなおした。

「ホント、誤解しないでね。私はただ本当のことを知りたいだけな
の、圭一が誰を好きなのか、知っておきたいだけ」

うん、そうなの、と一人で頷いて、慌てたようにパスタをフォー
クに巻きつけている。 緩やかにたわむ巻き毛が俯いた顔の脇で揺
れてる。

「あの・・・」

「ええと、だってやっぱり気になるじゃない？突然家を出て行くつ
て言って、そうして一緒に暮らし始めたのが若い女の子だとばっか
り思っていたのに大学の時の後輩だって言っし、どうせすぐに帰っ
てくるだろうと思っていたのもう1ヶ月よ・・・本気なのかしら
と思っただろうしても知りたくなっただの」

ぐるぐるぐる、と巻きつけられ続けるパスタはもう一口では入る
状況じゃなくなってきてて、それでもまだ涼子さんは手を休めよう
としなかった。

「昔からね、もてる子だったのよ。ウチに連れてきた女の子は一人
や二人じゃないわ。でもみんな2、3回付き合ったら別れちゃって、
なかなか本命って言うのが現れなくて」

あれ、とここで思っただけれど口を挟むヒマもなく話が続けられる。

「でも、男の子だなんて……ああ、ごめんなさい。私あの子には本当に寂しい思いもさせてきたし苦勞ばかりかけてきたから、あの子が選んだ人なら男だ女だってそんなことにこだわらつたりはしないのよ。自分だって好き勝手やってきたんだもの、あの子が人を好きになるってことに私が文句を言える立場じゃないのはわかってるの」

「川島さん」

何か言わないと、と思っても聞く気がないのかすると僕の声は無視された。

「日浦さんって、お逢いしてみたらずいぶんしつかりしてらっしゃるんだもの、きっとあの子のほうから一方的に迫ったんでしょ？あの子も悪い子じゃないのよ、ただ今までのお付き合いがずいぶんという加減だったものだからあなたに対しても強引なんじゃないかしらって、そう思ってたの。でも昨日の様子を見ていたらなんだかしつくりと落ち着いているようで、ちょっと安心しちゃったのよ、私」

ふっと笑った口元が、僕が思っているよりももっと年上の女性の顔になって見えた。

ぐるぐる巻きになってもうパスタを1本も巻きつけられなくなったフォークをじいっと見つめて手を離すと、今度はグラスの水をぐんと一口飲んで僕の方に顔を向けてきた。

「でもね」

トン、と音を立てて置いたグラスの中で氷が跳ねた。

「あなたにだつてご両親がいらっしゃるでしょう？こんな普通じゃないお付き合いを許してくださるのかしら。それを思うと私、どうしようって、もう居ても立ってもいられなくなっちゃって」

「……ええと」

あの、何か根本的に話がすれ違つてるような気がするんですが。どうも変だな、と今言われたことを繰り返してみても、なんかむちゃくちゃな誤解をされてるって言うのがわかってぞぞつと背中に寒

気が走った。

普通じゃないお付き合いって、ええと僕と先輩が？

ていうか普通じゃないお付き合いって何？

じゃなくって涼子さんが先輩の恋人でしょう？

と、いろんなものが頭をいっぺんに駆け巡ってしまつて。

ちよつと待つてよ。

僕がそれを言おうとして身を乗り出したところに、何を勘違いしたのかがばつと僕の手を握って涼子さんが言った。

「私だつて親だもの、子供の幸せを一番に考えるわ」

「ええっ」

親つて、親つて誰が誰の？

「息子の圭一が選んだあなたのご両親には、私からもご挨拶に行かなくちゃと思つてるのよ」

「選んだつて……選んだつて誰が誰を！？」

「ちよつとまつてくださいつ」

明るい日差しの差し込むお洒落なイタリアンレストランの、眺めの見事な窓際の席で、僕はこのとんでもない誤解を解くために必死になつて声をあげた。

それが、僕がここに居るつて事を知らせることになつただなんて、その時は全然全く、知りもしなかった。

21 梶原理沙子のユウウツ<5>

「・・・今の、日浦の声じゃない？」

今日のランチタイムはちよつとお洒落にイタリアンでも食べに行きましようよ。そう佐々木に誘われたのは午前中の仕事が一段落してコーヒーでも、と思って足を向けたラウンジまでの廊下でのこと。

キャリアは今でこそ理沙子の方が上だが、年齢は佐々木の方が2つ上、そういった経緯もあってか昼時に気が向くと誘いをかけられることもしばしばで、先日から2つ通りをはさんだ向こう側に出来たファッションビルの6階にとつてもお洒落なレストランが出来たのよ、とウキウキと誘われていることだし、昨日から少しばかり落ち込んでいた気分を佐々木とおしゃべりで紛らわせるのもいいかな、と思つて出かけてきたのだけれど。

「日浦、くん？」

言われて顔を上げて、あつちよ、と背中越しに指を指された。

流行りモノにはうるさい佐々木が「絶対気に入るわ」というだけあって、ここ『La flore fiorisce』は白い壁と茶色のラインが続く窓枠が開放的な気分になさしてくれる、ランチだけで来るのはもったいないようなお洒落な店構えだった。

最新のファッション雑誌にも載っているのよ、と見せられたのは30代の女性向けに発行されているグレード高め月刊誌で、見開きの3分の1を使って紹介されている料理のほとんどが1000円未満の手軽さ、それにこれなら少し足を伸ばして行ってみてもいいじゃない、と思わせるのには充分な量と見栄えが並んでいた。

一番のオススメは日替わりランチ、と記事にはあって、気の利いた名前のついたパスタが載っていた。

そこで今日のランチを、と言って頼んだのは『魚介類たつぷりのペスカーラ漁師風パスタ』。いわばペスカトーレなんだけれど、こうして地名が入っているとなんだか本格的、と思うのは魚沼産コシヒカリが美味しいというのと同じようなものか、と一人で納得した。

出てきた料理は、800円と言う一般的なランチの値段にしては味も量も申し分なくて、本で見えて期待してきた以上のものがあったのが驚きだった。

「美味しそうね」

そういいながら佐々木はパチリと携帯で写真を撮っていて、どうするのと訊いたら自分のブログで紹介するのだといていた。本当にこういうことにはマメなんだから、とデザートには小ぶりのアイスマデつくと大騒ぎの佐々木に話を合わせてクスクスと笑っていたところだった。

「間違いないわ、あの後姿は今日着てたスーツと同じなもの」

「そう・・・一人出来てるのかしら」

こんなお洒落なレストランに男の人が一人でくるって言うのもおかしいわね、と内心ドキドキしながら言ってみた。周りにいる男性客は皆必ず連れがいた。大概が女性を連れていて、またそれが普通だろうとも思う。

なら、日浦は誰と来ているんだろう。

理紗子は自分の背中越しににいるという日浦が、また何か言わないかと耳を必死で澄ませた。

「うっん・・・女の人と一緒に。わあ、なんだかずいぶん色っぽい人よ」

でね、両手を握り合ってるのよ。

なんだか嬉しそうにいう佐々木に、「うそ・・・」と言って振り返ると、そこには佐々木の言うとおり今日着ていた明るめのブルー

のスーツの背中があった。そうしてその向こう、ここから見ても巻き毛が華やかな女性が、日浦の手をしっかりと握っているのが見える。

「嘘でしょ」

そんな馬鹿な。

頭では否定しても、見えているのは間違いなく日浦とその女性の手を取り合った姿で、こんな昼間っからなんでそんなことを、と今すぐにもそばまで行って問い詰めてやりたくなって、ぐっところえた。

だって、私はそんなことできる立場じゃないし。

そう考えて、昨日のラウンジでのことを思い出した。

企画室の前から逃げ出した先のラウンジで、祐志に抱きしめられていたところを、日浦は見ているはずだった。

でも平気な顔をして何にも言わずにただ普通に仕事を進めて、それでも時折理紗子の方を見ては訝しそうな顔をして、その視線が怖くてすぐに手元の資料に目を落としていた。

なんで何にも聞かないの。

今思い返しても悲しくなる。

やっぱり、私って日浦にとってはまだの上司でしかないのね。

それが当然とわかっていることでも、こうして自分以外の女性と一緒に居るってことを見せ付けられるのは堪らなかった。

「・・・ちよつと用事を思い出したわ、先に帰るわね」

「え、だってまだデザートが来てないわよ」

「私の分もあげるわ」

「ねえ待ってよお」

「ごめんなさい、じゃ」

立ち上がって、払っておくわと言って伝票を取り上げた。じゃああとで返すわね、と言う佐々木に向かって手を振ると、そのまま振り返らずにレジまで歩いた。

絶対に、後ろは振り向かなかった。

22 梶原理沙子のユウウツ<6>

オフィスに戻っても、なかなか心の動揺が収まらなかった。
何故。

それしか頭に浮かばなくて、次第に日浦を責める言葉で埋まってい
いく。

あの人は誰と聞きたくて、どうして二人で居たのと聞きたくて、
あんなお洒落なレストランに、何故二人つきりでと聞きたくて苦し
くなる。

しかもあそこはリザーヴされていた席だったはずだ、窓際がいい
といった佐々木がウェイターにそう言われて断られていたから。

あの人のために用意してたの？

思わずそう言いそうになって、そばを通った人影に口を噤む。

どうかしてる、私。

本当に、どうかしてる。

ふう、と一息をつくと午後の仕事を始めるためにパソコンの電
源を入れた。

「あ、主任」

ファイルを抱えた新沢が、つつつと近寄ってデスクを覗き込んだ。

「あのイタリアンレストラン、行ってきたんですかあ」

「え？」

わあ、いいなあ今度は誘ってくださいよお。

ひどく明るい声がわあっと広がって、いったい何が起こったんだ
とぎよつとして身を引いた。

その合い間に伸びてきた手が、ピンクの可愛らしいリボンでくく
られた透明のビニール袋をつまみ上げた。

「かつわいい」これって『La fiore fiorisce』のオープン記念のドルチェですよ」

「あ……ええ」

新沢の手の中で、コロんとしたメレンゲの菓子が揺れる。

すっかり忘れていた。レジで会計をして、そのときに「どうぞ」と渡されたものだ。そういえばレジの横に色とりどりのリボン包みが綺麗にディスプレイされているな、と思ったのだった。

「主任知ってます？このオーナーってすごい美人なんですよ」
クスクス、と何が面白いのか含み笑いをすると、あそうだ、と言って抱えていたファイルの中からA4サイズの雑誌を引き出した。
「これに載ってるんです、ほらここ」

それは次の号にうちの上下コーディネイトが載る予定の雑誌で、男女共に人気のある情報誌だった。パラパラとページをめくった先、何店ものレストランが紹介されているページの左半分を使ってにこりと笑った女性がワインを持ってこちらを向いていた。

「この人……」

「綺麗ですよええ、なんでも都内にバーやカフェやら、いろいろ持ってるらしいんですよ」

で、そのお店全部で出しているオリジナルワインがこれなんですって。

綺麗なパールピンクの指が、全体に花の模様が描かれているボトルを指した。

「甘い芳醇な香りが癖になるほどなまめかしいって……、なんだか素敵」

ふふ、と嬉しそうに肩をすくめる新沢が、自分の心を見透かしているように思えた。

この人、さつき日浦と一緒にいた人だ。

そう気が付いた自分の心を。

「それ……あげるわ」

「ええ、嬉しい」

両手で小さな包みを持ってにっこり笑うのが、なんだか憎らしくてぞくりとする。

ああもう、本当に、どうかしてるわ私。

スカートのすそを翻して離れていく後姿を見送って、キーボードに目を落とした。

「主任」

雑誌を投げ出したままだ、とふと思ったとき、頭の上から呼ばれた。

「日浦」

顔を上げたらいつの間に戻ったのだろっ、日浦が居た。

「あの」

歩幅一歩分寄ってきた日浦は、一瞬迷った顔をしてから言った。

「・・・今晚、お時間ありますか？」

23 売り言葉に買い言葉？

「ちょっと待ってください」

僕が乗り出すようにして言うと、「まあ」と涼子さんは掴んでいた手を離した。

「ごめんなさい、昼間から私ったら」

でも、本当にあなた達のこと邪魔する気はないのよ。

そう重ねて言われてなんだかもの凄くぐったりした。あの、なんで僕が先輩とそういう仲だと思っんですか？ていうかさ、男同士だし、別に友達の家に1週間や2週間転がり込む事だつてあるじゃないですか。それにお聞きした様子だと先輩って結構自由にさせてもらってるみたいだし、たった1ヶ月やそこら僕と一緒に居るからってなんだつてそう短絡的にそういう仲だつて決め付けるんですか。

と言いたいのにな、実際に出了言葉は、

「……そんなじゃないです」

たったそれだけだった。

「あら、違っつて言うの？」

「そうですよ」

「嘘、ごまかそうとしてもダメよ」

クスクス、っと笑うと今度はなぜか嬉しそうに両手を合わせるときゅっと身体をくねらせた。

「大丈夫、心配しないで。私はあなた達を応援してあげるわ。ああ、なんて切ないのかしら、人目を忍ぶ恋、この世で信じられるのはお互いだけ」

愛だわあ。

うふん、と瞬きするのを呆然と見つめた。

なんだこれは。

なんか、とてつもなく話がおかしくなっているんじゃないだろうか。

涼子さんのこの感覚、おかしいって絶対。

「あの、話を聞いてください」

「お聞きしてるわ」

「じゃなくてですね、僕の話をちゃんと聞いてくださいって」

ちよつと強気に出た所為かもしれない。涼子さんは「え？」と小首を傾げると、

「なにかしら」

と言つて椅子に座りなおした。

「僕は先輩とお付き合いかしてません」

「・・・あら」

「本当にただの先輩と後輩ってだけです」

ほかにどんな関係があるって言つんだよと言つと、言ってる自分がなんだか情けなくなつた。どうせなら、主任との仲を疑われて荒木氏が取締役に殴られてる方がいくらだってマシってもので。

それだつたらいつそのこと、本当にしてしまったっていいんだ。

それならいくら殴られたって、本望なんだから。

「・・・でもなあ。」

そんなことなんか百万年経つたってありえないって、すぐに思つてしまつて余計に情けなさが募る。

「なら、証明して頂戴」

「・・・はあ？」

思わず主任が今ここに居たら、と頭に描いた状況をなぞるように、涼子さんがつんと顔を上げて言い放つた。

「あなたが圭一と付き合つてないって、証明して頂戴」

「あの・・・」

「他にお付き合いしてる人がいるって言うの？圭一のほかに誰かいるって言うの？」

さっきまでの乙女チックな様相はどこへ行ってしまったのか、グイと腕を組んで脚を振り上げて組みかえると、涼子さんは長い睫毛をバサリと閃かせて僕を見下ろした。

「さあ」

う、っと詰まった僕は思わず「いますよっ」と返してしまった。

「ちゃんと、すごい美人の彼女がいますっ」

売り言葉に買い言葉、とはいえなんでこうなっちゃうんだよ、と内心ワタワタしているところに、

「そう、じゃあ今夜連れてらっしゃい」

絶対命令、そんな口調で涼子さんは言った。

あああ、もう後には引けなくなってしまった。

24 今夜だけのお願い

「今、なんて言ったの？」

「今夜、お時間ありますかって・・・」

驚いたように身を引いた主任に、やつぱりそうだよなあ、とがっかりと肩を落とした。やつぱりいきなりじゃあ、無理だよなあ。

そう一人ごちて「あ、すいませんなんでもないです」と立ち去ろうとした僕に、

「いったい何の用事？」

ときわめてビジネスライクに訊いてきた。

「・・・あ」

そういえば、用件を言ってなかった。

「なに、仕事のこと？ 昨日の春の新作の件なら、次の金曜日までに改めてラフを作るって話になったじゃない」

きゅっで見返してくる目元がなんだかすごく挑戦的で、僕はますます無理だよ、と諦めかけた。

涼子さんに「すごい美人の彼女がいる」と言った時、真っ先に頭に浮かんだのは他の誰でもないこの梶原主任だった。それでも連れてらっしゃいと言われて一時しのぎでいいのなら、本当言つと美奈ちゃんに頼んだほうが楽かもしれないと思った。きちんと事情を説明して、今夜1日だけ彼女の振りしてくれる？ そういつて誘っても美奈ちゃんだったら大笑いはされるだろうけれどすんなりOKしてくれるだろう、そう確信していた。

でも。

彼女なんだ。

ほんの一時、たった一晚偽者の彼女になってもらうというのなら、主任にダメモトでお願いしたっていいじゃないか。

それが最初で最後まで、僕の彼女ですって人に紹介できるんだから。

レストランから帰ってくる道すがら、そう心に湧き上がった感情は今ここで主任と向き合うまでは絶対調に達していたんだけれど。ビジネスライクな口調に圧されて、僕の勢いは一気にしゅんとしぼんでしまった。

「・・・日浦」

がくつと俯いた僕のことをどう思ったのか、主任は心配げに僕の顔を覗き込んだ。

「何よ、何か失敗でもした？」

取引先のある問題なら早めに対処しないといけないんだから、落ち込んでるヒマなんてないのよ。

きびきびと言ってくるのに頭を横に振って、

「なんでもないです」

と言って自分のデスクに戻ろうとした。

「ちょっと、なんでもないじゃないでしょ」

すつと立ち上がると主任は僕の腕を取ってぐいつと引つ張った。

え、っと思って顔を上げると、そのまま企画室を出て行く。

「あ、あの」

「ここじゃ話せないんじゃないの？ラウンジで聞いわ」

「えっ」

ラウンジ。

その単語に過剰に反応する自分が情けない。

主任は昨日の事なんかなんとも思っていないだろう、荒木氏が抱擁していたその場所で僕の話の話を聞くて平気で言っつて、僕がそれに戸惑うなんてことはこれっぽっちも考えていないんだろう。

嫌なんだけど、すごく嫌なんだけど、とっても嫌なんだけど。

うじうじと考えたまま引つ張られてエレベーターホールへと続く

フロアへ出て、ここを左に行くとラウンジだと気がついたところで僕はいきなり立ち止まった。

「なに？」

急に動かなくなった僕を、訝しげに主任が見る。

どうせ断られるって覚悟したんじゃないか、だったらきっちり言ってしまえ。

言わないで諦めるなんて、男らしくないぞ。

僕の中の日浦章吾にそう言い放って、ぎゅっと目をつぶって「よしっ」と小さく気合を入れた。

「主任」

「・・・なに？」

正面に向かい合って、目を見て一気に言ってしまった。

「今日だけ、僕の彼女になってもらえませんか」

「いいわよ」

どれくらい経ったのか、ほんの3秒か4秒か、そんな短い時間だったのかもしれないけれど僕には永遠の時間のように思えた一瞬後、がばっと下げた頭の上であっさりと主任の声がした。

「え・・・と」

「いいわよ、別に」

顔を上げた僕の前で、ゆっくりと腕を組んで主任が言う。

「ところで、今日だけってどういうことよ」

うつうつ、そうでした。

用件も説明も全部すっ飛ばしてる僕は、結局ラウンジでしどろもどろの話をすることになった。

25 ファンシーツィードは恋のファッション

「今晚は」

仕事が終わって六本木の『ANAGURA』に着いたのは、夜の8時に近い時間だった。カランと鳴ったドアを押して主任を先に通すと、涼子さんがカウンターで一人カクテルを飲んでいた。

「・・・どうも」

軽く頭を下げると、すつと、主任がまるで僕の姿を隠すようにして前に立った。

「はじめまして」

身体の向きを変えた涼子さんと主任の視線が合った。

「・・・・・・」

なんだか、バチバチツと火花が飛んだような気がした。

「なんですって」

結局ラウンジに連れて行かれて理由を問いただされて、もう隠し立てなんか出来なくて、涼子さんに今一緒に住んでいる大学の時の先輩との「ただならぬ仲」を疑われているんだということを話した。

「じゃあ、あの人はその先輩の母親だつて言うの？」

「あの人って」

まるで知った人のことを聞くような言葉に、ん？と思って聞き返した。

「・・・ああ、えつと、その人、涼子さんって言ったかしら。その人はじゃあいったいいくつなの？」

急いで返ってきたのは僕も実は知らないことで、「わかんないんですよ」と返事した。

「僕はずっと涼子さんが先輩の恋人だと思ってましたから」

先輩と一緒に暮らすようになってから何度か電話で話したことがあって、そのたびに聞くのは「圭一」と名前を呼び捨てにするのと、まるで奥さんか何かのように事細かに状況を聞きだそうとする詰問で、先輩は自分では絶対に出たがらなくて僕はっかり話してたんですよ。

そう返すと、

「ふーん、なんかおかしいわね」

訝しげに主任はつぶやいて、自動販売機で買ってきたコーヒーを口にした。

「・・・おかしい、ですか？」

「そうよ、だって普通男の人が二人で一緒に住んでたからって、すぐにそんな仲だなんて思うわけないじゃない」

主任は僕が思ったことそのまんまを言って、トンとカップをテーブルに置いた。

「でしょ？日浦は全然その気はないんだし」

ぴ、っと視線が飛んできて、僕は思わず背筋をただしてコクコクと頷いた。

あーなんかドキドキする。

ただでさえ一大決心して『彼女のフリをしてください』だなんてお願いしちゃって、それでその理由が理由だし、その所為か知らないけれど主任はさっきからなんだかキリキリといわば戦闘態勢のような機敏さで次々と聞いてくるし。

それがいちいちドキツとするほどカッコイイと思ってるだなんて知られたらなんていうか。

照れまくるよなあ。

ははは、と『照れる』という単語に自分で照れまくって笑っちゃったら、とたんにきつと睨まれた。

「日浦」

あー・・・

「すみません」

「もう、自分ことでしょうか？しっかりして頂戴」

はい、と返事をするともう一度「もう」と溜め息をつかれて、それで僕は思い出した。

今日1日だけだったんだ。

主任が僕の彼女でいるのって、今日1日だけだったんだ。

「梶原理沙子、さん？」

「はい」

「あなたが、あの子の彼女？」

あの子、と軽々しく言う目の前の女に、チラリと目をやってから真っ直ぐ向き直った。なにによりきなり、そう思っただけでムッとしたところを強いて冷静に冷静にと言いつつ聞かせて、にっこりと笑ってみせる。

「章吾からお話は聞きました」

呼び捨てにする名前がなんだかくすぐつたい。

照れくさい気持ちをそのままにクスツと片手を口元に持ってきて、困っちゃったと言ってみせると相手はちょっと身体を引いて構えた。ジロリ、と上から下まで視線が動いて、ふーんと頷いていく。

その遠慮のなさがカチンと来て、すっと背を伸ばして黙って見返した。

なによ、なんか文句でもあるの？

とっさに自分の今日のコーディネートを思い返して、どこかおかしいところがあったかしらとチェックしてみる。

ジャケットとパンツは自社ブランド『ラウドネス』のレディースバージョン『マーガン』で、少し高めの襟とウエストのベルベットがアクセントのファンシーツイードのセット、この冬のトレンド要素満載のインナーは胸のリボンとボーダーがお洒落なストレッチニ

ットで、可愛くなりすぎない大人の女性の甘さが出せるラインナップがちょっと自慢だったりする。

今日これ着て会社に来たといてよかった。

いつもはもうちょっとビジネススーツに近いものだから、慌てて一揃えしなくちゃならないところだったとロツカールムでほっとしたものだ。

それにバッグは仕事を意識したエディタースバッグ、靴はサイドラインにポイントのあるハーフブーツで、どこを取ってもこの冬イチオシであるはずなだけ。

うん、全然大丈夫、そう思って相手をきゅっと思あげたそのとき、川島涼子は真っ赤な唇をにやりと引き上げて言った。

「彼女って、本当かしら」

26 ピンクのストロベリー・マティーニ

「・・・え？」

「だってほら、あなた達ってバランス悪いじゃない」

クスン、と笑って後を覗くようにして身を乗り出した。私の後ろでは日浦がここの店長で渦中の人、上原圭一となにやらこそそそと話をしていた。

もう、なにやってるのよ日浦っ

ぐつと腕を伸ばして日浦の左手を掴んだ。え？つと驚いたような表情は無視して、くたんと肩に頭を乗せてから川島涼子には「バランス、ですか？」と言い返した。

「えつと・・・章吾、私たちバランス悪いって」

おかしいこと言うのよお、と笑いかけると、ぎょつとしたような顔になって「あの・・・えつと」と口ごもってしまふ。うーん、そういう顔も可愛いんだけど、今は可愛いっていうよりもビシッと決めてもらわないと格好がつかないじゃないのつと組んだ腕の内側をぎゅつと抓った。

「わっ」

慌てたように見返す顔に、『ホントにもう』と言いたげな顔でちよつとだけ口を尖らせる。二人の仲をはつきり言ってくれなくつて、思わず拗ねてみました、だなんていう感じに見えればいいなあ、と微妙な計算が入っているのをこの日浦がわかってくれればいいんだけど。

と、心配したとおり日浦はそこらへん全然ピンと来ないで、

「主任、いったいなんですか」

と普段どおりのですます調で、組んだ腕を見ながら訊いてくる。

あのね、彼女だって言うんじゃないかってたっけ。

ジロン、と見上げると「あれ？」ってな感じで困っている、この頼りなさがいって言えばいいんだろうけれど、でも私の好きな日浦はこういう日浦じゃない。そうよ、ダメ男の日浦が好きなわけじゃないんだから。

うん、もう、何とか言いなさいよ。

もう少しでそう言い出しそうになって、日浦の顔に真っ直ぐ見返した。

どれほどの間そうしていただろう、コホン、と取ってつけたような咳払いが後ろから聞こえてきて、振り返ると日浦の先輩の上原がトレイを持ってそこに立っていた。

「まあまあ、とにかく席にどうぞ」

ニコツ、と笑われてすつとカウターの席に案内される。なんだかその仕草がスマートで、ちょっとだけ「どきん」としてしまった。昔からもてていてね、と言う川島涼子の言葉をふと思い出して、この雰囲気ならそれもわかるわ、と思わず納得してしまう。

だからって、日浦との仲をあらぬ方向で勘ぐると言うのはどうにも解せないんだけど。

そう思いつつ成り行き上川島の隣の席に着いた私の前に、淡いピンクのカクテルが差し出された。

「どうぞ」

「・・・まあ、綺麗」

「ありがとうございます」

脚の長いカクテルグラスの中には、なんともいえない綺麗な色がゆらゆらと揺れていた。日浦には普通のショットグラスに黄金色の液体が入っていて、それがなんなのか想像つかなくて上原に訊ねようとすると、

「先輩これまた？」

「うん、いや・・・今日のはフツー」

「マジ？」

「マジマジ、そう警戒するなって」

「だって」

「……おいつと言ってやりたいくらいなベタベタな会話を日浦と二人でやっていた。

「ほら、あっちの方がお似合いじゃない」

ぎよつとして隣を見ると、面白そうなものを見る顔つきで川島涼子がブルーのカクテルの入ったグラスを持ち上げた。

「あのですねえ」

き、つと視線を向けると「まあコワイわぁ」とかなんとか、全然悪気のない様子でクスクスと笑っている。

あんたらいったいどういう親子なんだ。

日浦から聞いて知ってはいるものの、こうしてみると本当にこの上原圭一と川島涼子はどこかのセレブとその若い愛人にしか見えなただけれど。ムツとしながらカクテルグラスを手にとつて、やけくそ混じりにグイッと空けるとそれは見た目以上に柔らかくてやさしい味がした。

「おいしい……」

「あ、そうですか。よかった」

漏らした声を聞き取つて、上原が私と川島の間割り入ってきた。

「ストロベリー・マティーニです、それ。イチゴは生の使ったんですよ」

にこにこ愛想のいい顔で、上原は言う。

「なんかすいません、涼子さん悪気はないと思うんだけど、こうと思つたらもう思い込みが激しいって言うか」

「あら、ちがうわっ」

「ちがわねえだろ、もう、全部涼子さんの所為だろうが」

訳わかんないことでつち上げて話をややこしくするんじゃないっての、と言つてちよつとおどけた調子で「めっ」と言つと、川島涼子はこころなしかしゅんとした様だった。

「そつじやなくてもこの章吾がアンタを連れて来たつてんで、俺は

驚いてるんだけれどさ」

ハハハ、と笑って言うのがなんとなく引つかかって、「？」と
思っている。と笑い顔のまま言葉を続けた。

「だってコイツ、昨日憧れの上司が男と抱き合ってたんで俺の
ところに泣き付きにきたんですよ」

「え」

「わあっ先輩っっ」

慌てた日浦がブツと噴出してバタバタと椅子から飛び降りてきた
けれど、そんなことよりも今の話をちゃんと聞かせて、と構えて上
原圭一に向きあう。

そうよ、なにその『憧れの上司』って。

ぜひそのお話をお聞きしたいわ、そういうと、上原は一瞬神妙な
顔になって訊いてきた。

「梶原さんだっけ、アンタさ、デザイナーの荒木さんとはどういう
知り合い？」

祐志？

何で今ここでそんなことを。

そう訝しく思っただけで、視界の端にものすごく心配そうな日
浦の顔が映った。

27 キラースマイルの功績

「章吾から聞いたけれど、あの人コイツの会社の宣伝やってるって」

でもってさ、あんた荒木さんとどんな関係あんの。

すると涼子さんと主任の間に入り込んだ先輩は、そのまま居座って不穏なことを言い出した。

先輩。

荒木氏のことやっぱり知ってるんじゃない。

あの日、僕が荒木氏のことを話したときに驚いた顔をして、しかもそれが主任との抱擁シーンを僕が目撃してのことだとわかったら「嘘だろ」と即座に返してきたんだ。絶対何か知ってる、そう思ったけれどあのあとはそこに居る涼子さんの出現でそれどころじゃなくなつて。

それどころかっつてのはそれだけじゃ済まなくって、涼子さんは先輩の母親だとか、そんなこといきなり聞かされても信じられないじゃないか、そう思っていたところに先輩と僕がどうのって、うーんあんまり想像したくないことは聞かされるわ、そうじゃないならその証拠に彼女を連れて来いだわ、なんだか圧倒されることばかりでちゃんと頭がついてこないうちに主任がOKしてくれちゃって。

ものすごく驚いたけれど、とんでもなく嬉しかった。

じゃああとで打ち合わせしないかね、と言って定時であがって、駅前の『Ritirata』っていうイタリアン・パブでピザを食べながらあれこれ話していたときも、舞い上がっちゃってほとんど覚えていなくって、だからさっきいきなり腕を組まれてニコツと笑って見上げられて、それどころじゃなくってピッタリくっ付かれたときにはもう、ドキドキはMAXになっていたからもうもう、自分

がなにやつてるんだかわかんなくってさ。

先輩にウーロン茶出してもらって、これってこないだとおんなじじゃないですよ、と聞いているときが一番楽だったって言うか。

だって主任、今日はカッコ可愛いんですよ。

ものすごく。

流行のグレイを基調にしたチェックの上下は、夏に僕が雑誌の宣伝ページを組む時にレイアウトしてOK貰ったのと同じものだった。ずっと斜に構えて立ち上がったモデルさんにディレクターズバックを持ってもらったのも僕が決めたことで、それとは形が違っけれど主任が僕の考えたとおりの格好をしているのに驚いちゃって。ヒールの高い靴を履いたら僕とあんまり変わらなくなっちゃっ身長があるからこれだけ綺麗に着こなせるんだよな、そう思ったらすごく嬉しくて。

主任が本当の彼女だったらどんなにいいか。

こんな素敵な人と並んで歩けたらどんなにいいか。

そう思ってたさっきから見蕩れてばかりなんだけれど、いきなりもいきなり、先輩は僕が今は考えないようにしようと思っていたことを突然すらっと訊くしつ。

いったいどんな返事が返ってくるのか、僕は気が気じゃなかった。

社内では中山取締役と付き合っているという噂だけれどそれは本当じゃなくて、実は荒木氏が本命でした、なんてのが語られたらどうしよう。いや、それよりもあの時は荒木氏に突然襲われて危なかったところだったとか、あーでもそんなことあるわけないか、いくらなんでもこっちはクライアントなんだし。

じゃあ、と考えてあの時そういえば『俺は、お前の泣き顔を見るのはいやなんだよ』って言ったのは荒木氏だったと思ひ出した。

泣いてた？主任が？

なんでどうしてと思ひ巡らして思いつくのは、取締役との仲を荒木氏は知っててそれでなにかあって主任を慰めてたとかって言うな

んだかドラマによくあるようなシチュエーションで、そんな馬鹿なとすぐに自分の考えを否定した。

こんな可愛い人をフルなんて考えられないじゃないか。
フツタのかどうかはわかんないけど。

そんなことをむーっと考えている先で、ニコニコ笑っている先輩に向かって「ぷっ」っと噴出すと、
「関係って」

ククク、と笑いたいのを堪えている、そんな感じの主任はしばらくそうしていたけれど、チラリと僕の方を見たら耐え切れなくなつたように「あははは」と笑い出した。

「やだっなにそれ・・・私と祐志？」

クスクス止まらない合間に涼子さんは「何よ他にもいるの？」と言つてきて、また先輩に「黙ってなさいって」と怒られてて、なんだかこうしてみてると親子って言つよりも姉弟みたいな感じに見える。その方が自然だったの。

って、それよかその『関係』のほうだった。

ひとしきり笑いが収まるのを待つて、先輩がまた「教えてって、なあ」ととっておきのキラスマイルで言い寄つた。すると主任は、それに負けないくらいの極上の笑みを浮かべてあつさり応えた。

「教えるも何も、祐志は私の双子の弟よ」

「えっ」

「・・・ええっ？」

「あらまあ」

予想外の答えに先輩も固まっちゃったけれど、僕はそれ以上に力チコチに固まっていた。

弟って。

マジ？

28 ちょっとこの人借りるな

「それって・・・マジ？」

あんまりのことだとつさに声をかけられなくなった僕より先に、先輩は言った。よく見るとその驚きようは相当なもので、まるで怒っているようにも見えた。

「ええ、それがなにか」

周りがあんまり驚いたものだから、主任はきよとした顔で「そんなに变？」と僕に聞いてきた。

「变って言うか・・・」

まず想像すらしなかった。そりゃあ美男美女でお似合いで、そういえばなんとなく雰囲気も似てて意見の出し合いの時なんかはそりゃあもう遠慮の一つもなくて、その感じがすごくいいなと思っっていたんだから。

ふるふると顔を横に振って、「変じゃないですけど・・・」とそのあとが続かなかつたら、先輩がずいっと身体を乗り出してきた。

「なあ、マジかよ」

「なんか気になる言い方ね」

隣で聞いててもどうして先輩がピリピリしてるのかわからなくて僕はなんていつていいのかわからなかった。するとすぐのその怒気を引っ込めて、

「え、ああ・・・いやあ」

カリカリと頭をかいた。

ハハハと笑い返すのがすごく白々しいって、先輩。さっきまでとは打って変わって「じゃあ次はなに作りましょうか」なんていきなり聞き返したりして、変なヤツ、と主任が小声で言っているのが聞こえてきた。

双子の弟だって。

隣でストロベリー・マティーニのグラスを持つ主任の顔を見た。

昨日会った荒木氏とは、その顔かたちは似ているとは思えない。よく言う二卵性双生児ってヤツなのかな、なんて思いながら、でもなと疑問がわきあがる。

荒木氏が弟。

だとしたら、なんであの時抱き合ってたりしたんだ？あ、やつぱり中山取締役にきついこととか言われたり、最悪別れ話だったりして。

それをこのとき聞いちゃえば、こんなことにはならなかったのに。あの時に僕がどんな恰好で主任に目撃されたのかなってことはすっかり頭に無くて、ただただ主任にとっていたいどんなことが起こったのか、それを考えるのに一生懸命で、この先話が全然違う方向に進むだなんて思ってもいなかった。

「・・・・・・・・あ」

先輩がカウンターの内側に戻って涼子さんの注文『X・Y・Z』を作り始めたとき、ふと思いついたとしても言うように、主任は先輩の方にがばつと顔を上げた。

「もしかして、祐志と土曜日、会ってた？」

びつと指を刺して言う主任に、先輩はぎょつと身体を離して後ろのボトルが並んでいる棚にもたれかかった。

「え、や、・・・・・・・・あ」

「・・・・・・・・会ってたんでしょ？」

先輩の反応が図星と物語っていたのは明白、主任は指した指を下ろさないでじつと見続けた。僕はというと、全然話が見えなくてただ交互に二人の様子を見てた。

「・・・・・・・・いや会ってたんじゃないって」

ふう、つと息を吐いて言葉を繋げた。

「ここにずっと居たんですよ」

先輩は両手を挙げてまるで『降参』とでも言うようなポーズをと

った。

すると、ふうん、と主任はなんだかすごく納得した顔をして頷いて、「そうだったのね」と言って一口分残っていたカクテルを一気に飲み干した。もう聞きたい事は終わった、そういうオーラが出ていた。

でも先輩は、それまで言いたくて言いたくて仕方が無かった、というような顔をして

「えっと、アンタは知ってるわけ？」

さぐるように、訊いた。

「なにを？」

「なんで荒木さんがここに居たかったのを」

「・・・知らないわよ」

「わ、じゃあ拙いじゃん」

「なにが」

「え、だつてさ」

足元に目を落として何か考えていた先輩は、大股でフロアに出てくると僕の顔と涼子さんの顔をチラリと見てから主任の腕をぐつと掴んで引つ張った。

「話がある」

「ちよつとっ」

「ワルイ、この人ちよつと借りるな」

「なによ、その借りるってのはっ」

「いや、ちよつと」

「先輩っ」

そこで歩き出した足を止めて、先輩は僕の方にむかって片手を挙げて「ごめん」と言った。

歩いていったのは奥のVIPで、そこまでいくと主任がブツと腕を振って先輩を突き放すのが見えた。

・・・なんだよ、もう。

いったい何が起こったのかさっぱりわからない僕は、先輩が持つ

てきてくれたウーロン茶をぐいっと一口で飲んでしまった。

29 クラブでパーティー

「ちょっと、いつまで引つ張ってるのよ」

ぶん、と腕を振り上げて上原の手を振りほどいたら、「ワリイ」とひとこと言ってきた。

いったい何事？と思って訝しげな顔のまま真っ直ぐ相手を見据えると、「あのさ……」と言ったきり今度はあさつての方向を向いて何かを言い出しにくそうにしている。全くなんでこんなところに引つ張ってこれなくちゃならないのよ、と腕を組んで構えたら、

「あんたさ、荒木さんの付き合ってる人、誰なのか知ってる……のか？」

恐る恐る、といった様子で聞いてきた。

なんだ、そういうことが。

この人は私が祐志がゲイだって事を知らないと思ってるんだ。そう考えればなかなか話をしたがないという理由もわかる。身内には隠しているという方が多いというのは想像できるから。となると、やっぱり和孝の所為で何かが起こったということなのかしら？

日曜の朝、慌てた様子でかかってきた電話を思い出した。

本当に、なにをやらかしたのよ、和孝。

私は目の前で「参ったな」と頭をかく年下の男の顔をじっと見た。

偶然なんだとは思うけれど、何で日浦の先輩だというこの人と祐志は知り合いなんだろう。六本木に知り合いがいるだなんて、今まで聞いたことがなかったわ。

しばらくそうして黙っていたけれど、上原が痺れを切らしたように「なあ、どうなんだよ」と言ってきたのに「そうね」と答えた。

「わかってるわ、誰なのかもちゃんと」

「なんだ、そうなんだ」

公認かよ、といった顔は少し安心したようで、そこでやっと「座つてよ」とボックス席に座るようすすめられた。

「あのさ、知ってるならあんたにもこの話は聞いといて欲しいんだ」

よほど言いにくいことなのかすつと目線を下に逸らしてから、上原は話し出した。

祐志とはここの系列の店で顔見知りになったということだった。

「そこも涼子さんの店なんだけど」

川島涼子はこの上原圭一の父親と離婚してから、フード産業を手広く展開している川島信介という人と再婚して、そこからこの世界で水を得た魚のようにその才能を発揮させ、今のフードコーディネーターとしての地位を確立したというのだ。今までにない発想と店舗展開を思いつくのが得意でね、そう言うとなんだか自慢しているようにクスリと笑った。

「ちよつと先の交差点の角にまるでファッションビルみたいな飲食店オンリーのビルがあるでしょ？あそこの3階の『Nebbish』って知ってる？結構流行ってるんだけど」

その店は最近のファッション雑誌の3冊に1冊は紹介している『今一番行きたい店』と言われているところだった。いわゆる『クラブ』で、有名人も多く足を運んでいると紹介されていた。

「そこでね、月にいっぺんくらいの割合でパーティーがあるんだ。あ、でも他のパーティーもあるから毎週なんかしらあるんだけどさ」

核心を話しながらない上原は、まずは自分と祐志の間柄を説明したいらしい。そう考えて構えていた気持ちを少しだけ緩めた。

「で、そのパーティーってのがメンズオンリーでね」

そう言つて、チラリと私の顔を見上げた。

ずいぶん気を使っているのだろつ、そう思うとなんだかじれつた

くて、「わかつてるわ」ともう一度言った。

と、すぐにぎょつとして顔を向けた。えっと、そうだとしたらやつぱり川島涼子の言ってることは本当なの？日浦はあの調子じゃそんなつもりは無いかもしれないわ、この上原はどうなのかかったものじゃないわ。

「まさかあなた・・・」

あからさまに怒気を込めて見返すと、「ほら、だからさあ」と困った顔をした。

「涼子さんもそうなんだよ、俺のこと男オンリーだつて決め付けるんだ。俺はそこにはゲストで行ってるんじゃないってスタッフで行ってるの。そりゃ、別に人の好みをとにかく言うつもりはないし、結構受けもいいし、なんだかんだでそのパーティーに呼ばれることが多いけど、でもさ、そういうのって普通の恋愛と同じでしょ？」

相手が男だからって、構わず誰でも好きになるってもんでもないでしょう。

はあ、とタメ息を吐かれてなんだか申し訳なく思ってしまった。

そうだ、普通の恋愛と同じ、祐志だって和孝じゃないときっと好きにならなかった。ずっと傍で見ているのだから、それはよくわかる。

「そうね」

「ごめんなさいとは言えなかった。他に言葉が見つからなくて、私はそれだけ返した。」

私が素直に返事をした所為か、上原はちよつと目を見開いてすぐに笑い返してきた。

「まあそれでさ、そこに荒木さんはパートナーを連れてきてたんだけど、こないだ途中で相手が帰っちゃった事があってさ、なんか喧嘩でもしてたみたいだから気になっちゃって」

ほら俺ってそういうのに気がついちゃう人なわけよ。

ちゃんとした説明になつていないような気がしたけれど、そこで祐志はこの人に私には言えないことを話したというわけだ。一見軽

そうに見えるけれど、この上原という男はなぜだか話をして見たいという気にさせる何かを持っている印象をしている。こうやって面と向かって話をしていると、それが自然に思えてくるのが不思議だった。

「場所を移しましょう、って言って、こっちに來ただけでさ、それが結構へビーな話だから俺じゃどうにもならないし」

そこで一時、言葉を区切った。

これからが核心だ、そう思うと私はほんのちよつとだけ身を乗り出した。

「・・・で、荒木さんのパートナーって人に縁談が持ち上がったって言われてもさ」

「は？」

「あ、いや縁談・・・」

「なんですって」

バン、とテーブルと叩いて私は立ち上がった。私の剣幕に驚いたのか、上原は身体をずずつと後ろにずらした。

和孝。

あんたはそんな大事なことを黙ってたの？！

30 見た目が9割？

先輩と主任が席を立つて、何が起こったのかさっぱりわからない僕は先輩に『ちよつと借りるな』と言われたものだから無理に追いかけることも出来ずにいて、そのままカウンターでウーロン茶を飲み干してしまった。

「なんか変な感じになっちゃったわね」

涼子さんが二人の後を目で追って言う。

その時トレイをもつてカウンターの内側に入ろうとした睦己君に、「私にカシスソーダを」と言った後「あなたは？」と振られて、またウーロン茶でいいです、と返事したらちよつとだけ意外な顔をされた。そうしてさっきまで主任が座っていた椅子に移ると、「アルコールって苦手なの？」と聞いてきた。

「苦手って言うか・・・」

あんまり好きじゃないんです、と言うのはやっぱり苦手なことだよな、とそこで口を濁すと「うふふ」となぜだか嬉しそうな顔をされた。

「日浦さんって」

斜めに身体を向けている涼子さんは右手でカウンターに凭れ掛かると、僕の名前を呼んでゆつくりと脚を組み替えた。なんかゾクツとしたのは、気のせいだよな？

「素直なのね、思ってることがすぐ顔に出るわ」

クスクスと笑うのがなんていうか、背中がゾクゾクツとするんだけど、これってなんだろう。そう思いながら睦己君が差し出したウーロン茶に手を伸ばすと、その手にすつと涼子さんの手が重なった。

ひんやりとした指先は、ビクついた手の甲をするりと撫でると次に出てきたカシスソーダのグラスに伸びた。

ほんの一瞬だったから、何のことだかわからずに「あの」と声を

掛けると、

「そんなに怖がらなくてもいいのに」

とまたクスクスと笑われる。

「でも意外だったわ」

ゆつくりとソーダの気泡の上がっていく液体をコクンと一口飲んでから、涼子さんが真っ直ぐ前を見て言った。

「本当に彼女を連れてくるんですもの、仰るとおり綺麗な人ね」

若くて、お仕事が出来そうなカンジの人よね。

そこで口元を引き上げたのにはどんな意味があるのか、僕には想像つかなくて「そうなんです」と即答した。

とたんに「あははは」と声を上げて笑い出すと、涼子さんはさもおかしそうにバンバンとテーブルを叩いた。

「だから素直だって言うのよ」

「は、あの」

「あなた、本当にあの人と付き合ってるの？」

「・・・えっと」

本当に、といわれるとどうやって答えたらいいものか。ちょっとそこで詰まってしまったのを涼子さんは見逃さなかった。くると僕の方に身体後と向き直ると、僕の腕に手を掛けてぎゅっと押さえつけながら、

「嘘はダメよ」

と、きっぱりと言い切った。

「・・・でも彼女の方はあなたのこと好きみたいね、それはすぐにわかったわ」

腕を押さえている手に力が入るのがわかる。僕は「えっ」と言っただけ、なんて言ったらいいのかわからなくて涼子さんの顔と手を交互に見比べた。

「だってかわいいじゃないの、好きな男の前では一生懸命可愛らしい女でいたいって顔に書いてあるもの」

「好きな男って」

「やだ、自分のことでしょ。なに言ってるのよ」
僕のこと？

驚いて顔を上げると、にんまりと勝ち誇ったような顔をして涼子さんが頷いた。

「嫌いな男の為に誰があんなふうに嬉しそうな顔をして隣にたったり、人を威嚇しまくったりするもんですか」

あなたって、何にもわかってないのねえ。

ふう、とため息をつく、涼子さんは僕の両手を取って「ね？」

と訊いてきた。

「あなたは彼女のこと好きなんですよ？でもどこが好きなのかしら」

「どこがって、すごく美人で仕事も出来て、尊敬してますし・・・」

「それって彼女を好きってことじゃないでしょ」

「え？」

「だってそれって全部見た目でしょ？」

見た目、そう言われてもぴんと来なかった。こんな人が僕の彼女だったらどんなにいいか、そう思ったのは確かだし主任のことを尊敬してあこがれているのも違うないんだ。

なのに、それが好きってことじゃないって。

あの朝嬉しそうに笑ってた主任の顔がふいに浮かんできた。思いがけずに一晩一緒に過ごしてしまった日曜日の朝、カップスープの向こう側で柔らかい笑顔を見せた主任のことを。

いつもとは違う、なんだかそれをいつまでも守ってあげたくなるようだった笑顔を。

「でも、僕は主任のこと好きです」

誰がなんと言おうと、これはもう気づいたことだから。

「ふうん、そう」

そう言つと、涼子さんは僕から手を離して胸の前で腕を組んだ。
「だったらちゃんと言わなくちゃダメよ」

31 夢見るような恋の話

「言わなくなつていいって、男の人ってすぐそう思うのよね」

「そんなこと思いませんよ」

「あら、じゃあ言った？」

テンポよくするつと聞かれて、「いえ」と答えてしまっていた。

「どうして！もう、ダメねえ」

ダメねえって言われてもなあ・・・。

うーん、と軽く落ち込みながら涼子さんの言葉を聞いていた。好きって自覚したのはホント昨日だし、とたんに失恋したんだって思ったのにそれがどうもとんでもなく見当違いだったってことがわかったのがついさっきだし、なんだけどそれがどうにも僕の知らない方向に話が進んでいつて、それを主任に直接聞けないまま、なんかこのまま今夜は終わりそうで。

どうしよう、それが本音だった。

「顔がいいとかスタイルがいいとか、そういうことしか言わないのよ男って」

「はあ」

「はあじゃなくて、あなただって彼女のこと美人でかっこいいとか思っただけでしょ」

「いや、あの」

「可愛いとかって、思ったことある？」

「あー、えーと」

「ほら、ご覧なさい」

まったく、涼子さんはそう言いたげに軽く手を振ると、カウンタ―に肘をついて背筋をきゅっと伸ばした。なだらかな背中ラインと組んだ脚までを包んでいるのは柔らかそうなジャージー素材のワンピース、袖口が広がっているのがアクセントの黒に近い臙脂色で動くたびにぬめるように見える。どう見たって先輩の母親って感じ

じゃないよな、と何故だか急にときどきして、手の中のウーロン茶を慌てて一口飲んだ。

「圭一つてもてるじゃない」

いきなり、涼子さんはくりと僕の方を向くと言った。

「ね、なんであの子があんなに女の子にもてるか知ってる？」

「・・・そりゃ、かつこいしし優しそうだし」

突然振られてケホケホとむせながら、僕は思ったとおりの事を言った。

「優しそうね、ま、確かにそうなんだけど、あの子ガツガツしてないでしょ」

わかる？誰にでも、どんな子にでもみんなおんなじ。

言われてVIPルームに行ってしまった先輩を、思わず振り返った。いつも愛想のいい顔をしているばかりじゃなく、怒る時だつてそういう男も女も関係なくきつちり怒るし、声を掛けられれば気軽に返事する、嫌な顔つてあんまり見たことない、それが『上原圭一』、先輩だつた。

「どの子にもおんなじ顔して、しかも見た目がいいから誰だつて寄つて来るのよ。あの子の父親と同じだね」

そこでふつと何かを思い出したように言葉を止めて、口元をきゅつと引き上げて笑った。

「あの子の父親はねえ、あの子なんて目じゃないくらいかつこよかったのよ」

どこか嬉しそうな口調は、そのあと饒舌に恋の話を語りだした。

すごくかつこよかったの。

まだ店に入つて踊ってるなんて言う年じゃなかったから、原宿のホコテンで、あ、ホコテンってわかる？歩行者天国、車が入ってこないようにしてもう昼間っからみんなで踊るのよ、ローラースケート履いて。ローラースケートって、わかんないか。

彼はその中でも一番光ってたわ。

他にもブラックコンテンポラリーとかテクノとか、いろんなサウンドやファッションで決めてる子達がいんだけど誰も彼には敵わなかったわ。そのころはテレビでも袖や裾にフリルとかくっつけてローラースケートでぐるぐる踊るグループなんかが出てきて、でも私たちはこっちの方がモノホンだって息巻いてたの。

私はもうずっと彼の追っかけをしてて、出来るだけ目立つようにいつも跳ねてたものよ。サーキュラーのスカート履いてね。

誰にだって優しくかった彼がある日ね、私に言った事があるのよ、「お前学校どうしたんだ」って。私まだその頃は本当は学校に行ってなくちゃならない年だったのね、だけど日曜っていったら1日中彼の周りで踊ってるでしょ、平日だって昼間っから彼がバイトしてる店に入り浸っててほとんど行つてなかったの。だって、彼の方が大事だったんですもの。

そしたらすごく怒られちゃって。

自分をもっと大事にしろって。親が学校行かせてくれるって言うんなら、ちゃんとしてって勉強もちゃんとしろって言うてくれて。

そんなこと言うてくれる人なんていなかったのよ。

親は私が家に居ようが居まいが関係無しで自分たちのことに掛かりつきりでしょ。あ、会社をやつてたのね当時は流行ってたゲームとかを輸入販売してたのよ、また最近出てきてるじゃない？ルービックキューブとか、ああいうのを売ってたの。もう昼も夜も電話がなりっぱなしの会社で、子供なんて構つてられなかったのね。

学校では先生がもう来るなっていう態度でね、ちょうど不良とかスケバンとか、そういうのがかっこいいってもてはやされた時期だったのよね、そういうのって何度も繰り返すじゃない。

ま、私はその先端を行つてたのね。

今でもそうだと思ってるけど。

そんな私を彼は優しく包み込んでくれたの、ホントのお前はもつといい子だろって。俺はわかつてるんだなんていわれて、もう夢中

になったわね。

夢見るような眼差しと言うのはこういうものなんだろうか。

うつとりと話をするのに僕は口も挟めないでただ聞き役に廻っていた。

でも、それっていったいいくつかの時の話なんだろう。　なんだか気になって、口に出してしまう。

「涼子さんって、その時いくつだったんですか？」

女に年を聞くもんじゃない、そういわれるかと思っただけけど、案外すんなり教えてくれた。

「１７歳」

「えっ」

「私は１７で彼は１９歳だったのよ」

一緒に居た時間はあっという間に過ぎたわ。

圭一ができたって言ったらすんごく喜んでくれてね、すぐに籍を入れてちゃんと結婚式も挙げて、みんなに祝ってもらったって言うてたんだけどそれも全部夢になっちゃった。

「・・・夢？」

「そう、彼ね、バイクショップに勤めてたの。バイクが好きでね、今の走り屋って言うのとは違う、一人でどこまでも行っちゃうタイプだったのね。ある日夜遅くに帰ってくるはずだったのに全然来なくて、心配してて朝になってから連絡があって」

雨が降っていたのだと、涼子さんは言った。

雨が降ってきて、夜の見通しの悪いカーブを曲がろうとしたときに何かに乗り上げたんだらうと現場検証をした警察官は説明してくれたと。スリップしてそのまま道路に投げ出されて、頭を強く打ったのが直接の死亡原因だと言った。

「あの子には話してないの」

まだお腹の中に居た先輩は、生まれてすぐに涼子さんの両親に預けられてそのまま幼稚園に上がるまで育ったという。涼子さんはその後アルバイトをしながらテーブルコーディネーターの仕事を学んで、そのときに今のご主人と出会ったと教えてくれた。

「たぶん、彼がもうこの世に居ないって言うのを信じたくないのね、圭一は彼にそっくりだから。今の主人もそれはわかってくれてるの」

優しい人なのよ、彼より顔は悪いけど。

クスクスと笑って、涼子さんは僕に向き合った。

「なんであなたには話したのかしら」

どこかほっとさせるものを持つてるのかもね、彼女があなたのことを好きだと思つのも、それを感じてるからかもしれないわ。だったら、それを活かして行かなくちゃ。

そう言つと、まるで乙女の顔から一気に鮮やかな大人の女性に花開いたように、艶やかに微笑んだ。

「本気で好きだつて言うんなら、見た目だけ追いかけてダメよ。そんなのすぐに女にはわかるもの」

あなただって、ただかわいい男の子っていうだけでちやほやされるのなんて嫌だと思わない？

女は心から包み込んでくれるような男の人を待ってるのよ、彼女みたいになんでも一人でやってしまえるような女は特にそう、本当は甘えたいんだから。

そう言つてグラスを傾ける涼子さんは僕から見るとずいぶんかっこいい大人の女性で、なんだかもっともつと話を聞いていたい、そんな風に思えてしまつて。

じつとその横顔を見つめていたのに気がついたのか、クスツと口元を上げて涼子さんは言つた。

「教えてあげてもいいわよ、オシナの口説き方」

え、っと驚いて目をあげた向こう、主任がなんだか怒った顔を
してこっちに向かってくるのが見えた。

「え、い・・・いいですっ」

僕は勢いよくブンブンと顔を横に振った。

32 宣戦布告？

「冗談じゃないわ」

和孝をとにかく捕まえて話を聞かないと。

今すぐにもここを出て、どこにいるのか突き止めないと、そう
思って持っていたバッグから携帯電話をとりだすため立ち止まると、

「あのさ」

と上原圭一が恐る恐る声を掛けてきた。

「俺が言っただって荒木さんには言わないでくれる？」

「なに言ってるのよ」

「だって、ずいぶん迷った末って感じだったんだ。他人には言えな
いって感じでさ」

「・・・じゃあ、なぜあなたには言ったの」

「そりゃ」

なんと言おうか迷ったように口ごもってから、上原はにやっと笑
った。

「俺、部外者だし」

何にも知らないヤツの方が、言いやすかったんじゃないの。

そついうと立ち上がって私の隣に来て小声で囁いた。

「余計なことだけどさ、ちゃんと話を聞いてからにしてよ。荒木さ
んにしる相手の男にしる」

まるでその余計なことをしそつだとも言うように、念を押され
る。

わかってるわよ。

ふん、と横を向いてカウンターまで戻ろうとして、そつだ、とさ
つきから気になっていたことを私は口にした。

「あなたは本当に男と付き合う気はないのね」

「うん？」

「男って言うか・・・日浦とって意味だけど」

元はといえば川島涼子の勘違いとはいえ、この男が日浦と一緒に暮らしてることから始まった話だ。祐志のことといい、話のわかる男といえはそうなのかもしれないけれど、ボーダーラインの低いのは気になるところだし。

そう聞くと、さも意外なことを聞かれたように目をパチパチと瞬かせると、それこそ人の悪いといっていいような顔で、

「まあね」

と答えた。

「ちよつと、なにそれ」

「や、だって俺どっちもいけるし」

「さっきと話が違うじゃない」

「男だからって誰でも好きにならないってヤツ？」
そうそう。

「だって俺日浦のこと気に入ってるし」
えっ。

「なに、そんなに驚くことないじゃん」

「驚くわよ、いきなりそんな」

「そっちだってまだ本物じゃないだろ」

クスツと笑うと、上原はカウンターでなにやら話しこんでいる日浦と川島涼子の姿を振り返った。どんな話をしているのか、真剣な面持ちで話を聞き入っている日浦の顔が一瞬驚いてすぐに笑った。

「あいつ、なにやってもいつもまじめでさ、なんかこう、ぐりぐりしたくなるじゃん。わかる？腕で抱えてぐりぐりしたくなるの。あいつがそこに居ると思うとなんかほっとして、こう、なんていうか」

上原の言いたいことは想像できた。

嬉しくなるのよ。

わかるわよ、それは。私だって同じなもの。

でもそれは声に出して言わなかった。この上原が私と同じように

日浦を想っているだなんて、認めない。

むっとした顔で腕を組んだ私に立ちはだかるようにして、上原は続けた。

「あんたの話はちよくちよく出てたんだ。職場にすぐかつこよくてむっっちゃ美人の上司がいるって。話してるときの様子がまあこれが嬉しそうでさ、好きって言うよりもホント高嶺の花にあこがれます、そんな感じでね。あいつにはよく出来たねえちゃんがいるって言うからそんじゃシスコン？とかって思ってたんだけど、それよかなんか本気に近いようだから、ま、応援してたわけよ。でもさ、本当に連れてくる日がくるとは思ってたって言うかさ、あんなに会ったら会ったでなんか俄然闘志が湧いてきたっていうか、ライバルじゃなかったのかさ」

「ライバルどころか、あなたのことははじめっから日浦は考えてないって言うのっ」

だから私が今夜彼女として一緒に来たんじゃないのっ

「わかんねーって、先のことなんかさ」

もうわかってるっていうの、その話が本当なら、私と日浦は両思いだってことになるじゃない。

だったら、何を戸惑うことがある。私の方が年が上だとか、会社の上下関係だとか、大人の顔をしている場合じゃないでしょ、梶原理紗子。何より、こんな男に邪魔なんかさせないわ。

ニヤニヤと笑い顔の上原圭一に、宣戦布告のように指を突きつけた。

「誰があなたになんか渡すもんですか」

和孝を捕まえるのも、祐志を問いただすのも、もう後回しにしたっていい。

それよりも日浦は絶対、私のものにするのよ。

33 恋にオチテ

なんだかすごく怒っているように見えた主任は、僕の前に来るとほつとしたような顔になって言った。

「日・・・章吾、帰りましょ」

「あら、もう?」

振り返った涼子さんが意外そうな声を上げると、そちらにはキッと目を向けて、

「私がここに来ればお話は済んだのでしょうか?」

だったらもう用事は無いはずですわ。

そう言つてにつこりと笑った主任の目は、全然笑っていないかった。

「・・・どうかしたんですか」

「いや、別に」

するりと傍にやってきた先輩に訊くと、普段と同じ賺した調子で返された。なんか変だよな、と思うのはこつちに帰ってきてから主任と先輩が全然目どころか顔すら合わせないし、先輩はなぜだか僕の背後にピッタリとくっついて離れない所為で。

どうもおかしな感じがする、と訝しんでいたらいきなり主任が僕の腕をぎゅっと引つ張つて、その拍子に僕は椅子から転げ落ちそうになった。

「わっ」

「・・・っと、危ないなあ」

あつと思つた次の瞬間には、僕は先輩の腕の中にいた。右手は主任に取られたまま、背中を先輩に抱えられてるって感じで僕を挟んで二人がにらみ合っていた。

・・・なんで?

なんか話があるって言うてたけれど、それがこの状況を作ってるのか？

よくわかんないな、そう思って後ろの先輩の顔を見上げようとした時、主任の手からふっと力が抜けたような気がした。

顔を見ると、なんだか戸惑っているように見える。

どうしたの、主任。

「あ、だいじょうぶ？」

「ごめんなさい」

はっとしたように、主任は手を離した。

僕はその表情が気になって大丈夫と聞いたつもりだったのに、主任は僕にすごく悪いことでもしたような顔になって、腕を掴んでいた手をじつと開いたまま見つめていた。

なんだか、それがどうにも。

幼く見えてしまった。

今すぐに抱きしめたいほど。

それまで僕が見ていた主任はバリバリ仕事が出来て、そりゃそんな所そこの男なんて相手にならなくて、だから僕も外から眺めるだけでいいやとかつて思ってたところがあって、涼子さんの言うとおり、見た目にあこがれてるだけで。

でも不意に見せられる僕の「思った通りじゃない」主任、一晩一緒に過ごした土曜の夜とか次の日曜の朝とか、そして今日の前で立っている主任のそこにどうしても惹かれて、そう、惹かれて。

昨日、なんだかわからない想いを掴みたいと思っていたときに、僕の心に落ちて来たのは好きって言う言葉だったけれど。

今僕の内に堕ちてきたのは、紛れもない『恋』だ。

「帰りましょう」

僕はその手を掴んで言った。

「……え？」

「先輩、今日はごちそうさまでした」

「おい・・・もう帰るのか」

支えてくれた背中を離して僕が両足で立ち上がると、今度は先輩が僕の手を取って引き寄せようとした。なんだか取り合いでもされてるような感じになって、でもそれはただ椅子から落ちた僕を心配してくれてるだけ、そう思っ「大丈夫ですよ」と声を掛けた。

僕の左手はしっかり主任の手を掴んでる、それさえ分かってればあとはもう、なんとかなるって。

じゃあ、と言って店を出て行こうとすると、先輩が僕たち二人を追いかけるようにして言ってきた。

「俺、今日は早く上がるからさ。明日の朝飯は期待しとけよ」

どうしてここで明日の朝の事なんか、と思っ立ち止まると、主任が不安そうな顔をして僕を見上げてきた。

何があつたのか知らないけれど、先輩と主任の間になにかあつたのはもう明白で。僕はどっちに答えるのか、そう聞かれているような状況なんだ、そう感じた。

うーんと。

ちよつとだけ考えて涼子さんの方をチラリと見る。鮮やかに笑つた涼子さんは、ぐつと親指を突き出した。

その人が好きだっ言うんなら、頑張んなさい。

母親にそう言われたみたいだった。

「あの」

先輩の目を見ながら、僕は言つた。

「今夜は帰らないかもしれないんで、ちゃんと戸締りしてくださいね」

え、っと驚いた主任を、僕はそのまま引っ張っていった。

34 やつといえた告白

「日浦」

表に出て、右左と顔を振ってみたけれどこんな狭い小路では空のタクシーがやってくる気配はない。

大通りまで出なくちゃいけないな、そう思って先を急いだ。

僕はこの人が好き、と自覚してみたものの、どうしよう、となんだか今になってドキドキしてきた。でも僕の手の中にあるのが主任の細い手で、それがしつかりと僕の手を握っているのを感じて、それが嬉しくて。

なんかこう、むくむくと湧き上がってくる感情で身体が浮いてきちゃうくらいの高揚感、と言ったらいいのか。

それが僕を動かしてる感じで。

どんどん歩いて行って、じゃああその角まで行ったらタクシーを捜してみよう、そう思っているところで、

「日浦」

ぐっ、と後ろに引つ張られた。

「・・・主任」

振り返るとちよっぴり頬を赤くして、ハアハア息を切らしている主任がそこにいた。

あれ。

僕はそんなに大股で歩いてましたっけ？

悪いことしちゃったな、と手を離して「すいません」と言つと、どん、と胸を拳で突かれて驚いた。

「？」

「なにさっきの」

「え？」

「さっきのっ、なによ今夜は帰らないかもってっ」

「あ、あの」

そうだ、そう言ったんだ。

「ええと、さっきのは」

上原先輩に向かつて、本気で思ってた言葉。そう言おうと口を開いて、きりつと顔を向けた主任と目が合った。

「わたしそんなに」

そこでいきなり口を噤むと、くると背を向いてすいっと上を見上げて大きく息を吸った。深呼吸、そんな感じの主任につられて僕も胸いっぱい空気を感じ込むと、ほう、と息を吐いた。目を向けた先に見えるのは飲食店が多く立ち並ぶこの通りだけれど、先輩の店は1本中に入っている所為であまり人通りが不多。すぐそこには大通りに面した明るい街灯が立っていて、それに照らされて主任の顔がくつきりと浮かび上がった。

綺麗。

そう思った。

見た目だけじゃなくて、その存在そのものがとても、すごく。

「・・・土曜日のこと、誤解してるんでしょ」

背を向けたまま、主任がぼそりと呟いた。

「はい？」

「酔っ払って誰でも家に泊めちゃう女だとも思ってるんでしょ」

「そんな」

なに言ってるの？

言われたことの意味がさっぱりわかんなくて、僕は主任のことを抱き寄せようとして伸ばした手を叩き落とされた。

「主任それは違いますって」

「だって」

ぶん、と見上げてきた顔はなぜだか今にも泣きそうで、僕はいったい何をしちゃったんだろうと焦って今度はオロオロしてきちゃった。

とにかく話を聞いてもらわなくちゃ、と今にも走って行ってしま

いそうな身体を逃がさないようにもう一度手を伸ばして。

また背中に向けた主任をやつとのことと捕まえて、ぎゅっと抱きしめた。

「主任」

ビクリと肩が震えるのがわかってなおさら力を込める。

「だって」

「主任、僕は」

「だってまだ私、何にも聞いてないものつえ。」

「日浦から何にも聞いてないものつ、なのになんでいきなり帰らないだとか、それにあの、上原って人っ」

腕の中の身体を僕は必死で抱きとめた。

前にのめりそうになりながら、声を震わせる主任を一生懸命抱きしめた。

先輩が何を言ったのか、すごく気になったけれど今それを聞いたら何もかもが台無しになるような気がした。それよりも、もっと大事なことを伝えなくてはならないんだ。

「僕は主任が好きです」

強ばっていたその身体から、力がふつと抜けたのがわかった。

「うそ」

「嘘じゃないです」

「ただの憧れでしょ」

「違いますよ、もう」

頬に手を当てて、振り向かせようとしたらそこに主任の手が重なった。少し冷たい指先が、まだふるふると震えていることを教えてくれる。

「本当に、主任が・・・理沙子さんが好きです」

耳元で主任にしか聞こえないように囁くと、腕の中の身体が柔らかく姿を変えてゆっくりと振り返った。うつすらと盛り上がった涙で潤んだ瞳が、閉じていくのを目の前にして僕はその口元に引き寄

せられるように近寄っていった。
近寄っていったんだけど。

キーッと引き攣れたようなタイヤの急停止した音が、耳に入ってきた。

「待てよ、祐志っ」

「……祐志？」

「ってどっかで聞いた名前だけど。」

「お前なんか知るかつ、ついてくるな」

ボタン、と大きな音がして、バタバタバツと人の走ってくる足音がこつちに近寄ってきて、それってやっぱり、絶対確実に、僕の知ってる人だったんだ。

「荒木さん……」

僕は主任を抱きしめたまま、呆然とその名前を呼んでいた。

35 いい加減にしなさいっ

「荒木さん」

その声で主任が飛びのくようにして僕から離れると、向こうからやってきた荒木さんも僕たちに気がついてぎよっとしたように足を止めた。

「祐志、なにしてるの」

「なにしてるって」

不審そうな主任にむすつとした顔で返事して髪をかき上げると、そこで初めて僕に気がついたように「君は」と目を向けてきた。

そういえばここって歩道の真ん中で、そりゃ人の通りは少ないけれど一応往来な訳で、そんなところでこうやって抱き合ってたたりしたらやっぱり不審だよな、とそこをを咎められるとちよつとまずいかも思っていたら、

「・・・いつの間にそういうことになってたの？」

意外そうに聞いてくるのに僕よりも先に主任が、「そうじゃないったら」と手をバタバタさせて答えた。

「そこのお店で一緒になっただけで」

「いや、あの違います」

主任の弟さんだつてわかつてる今はちゃんとご挨拶しなくちゃ、と一歩前に出て名前を名乗ろうとしたら、「ああ今それどころじゃないんだっ」とすぐに立ち去ろうとするから、僕も主任も「えっ」と驚いているうちにもう一人、車道から走ってくる人がいた。

あれ。

・・・もしかして。

取締役？

走りこんでくるその勢いに圧されて僕が後ろに下がろうとすると、それを見て荒木さんがなんだか慌てて逃げ出そうとするから、それを主任ががっちりと腕を取って引きとめた。

「離せよっ」

「だって祐志、和孝が」

「だから離せって言ってるんだろ」

「でもっ」

何がどうなってるのかさっぱりわからなくて、僕は気持ちだけがあたふたしてただばーっと、そこに立っているだけだった。

「・・・ゆうじっ」

その僕の目の前にぎゅっと腕が伸びてきた。

「待てよ、なあ」

中山取締役は、僕どころか主任も目に入っていない様子で、ひどく困ったと言う顔を見せて荒木さんの肩に取りすがった。

「ついてくるなって言っただろ」

それをいともあっさりと振り払って、まるで汚いものでも触ったかのようにジャケツトの肩をパンパンと払う。

マジかよ。

露骨じゃないですか。

目を丸くしている僕の隣では、はらはらと心配そうに二人の顔を見つめている主任がいて、それはどう見ても好きな男がいきなり現れたって感じじゃなくて。

でも中山取締役の名前を呼び捨てにしてるってのは、どういふことだって、ちよっと、いやかなり気になってるんだけれど。この状況であっても。

そうこの状況、今まさに取締役が荒木さんの胸倉でもつかみかけるんじゃないかって、緊迫した状態で、荒木さんのほうはというとちよっとでも相手が動けば握っているこぶしがぶんと飛んできそうなすごい剣幕で、きりりと取締役の顔を睨んでいる。

いざとなったら僕が間に入って止めなくちゃいけないんだよな。

と思つて覚悟を決めて、ふうっと大きく息を吐き出したら、

「あんたたちいいかげんにしなさいよっ」

主任が大声で怒鳴りつけた。

「・・・理沙子」

「理沙子じゃないわよ、和孝」

ずいっと身体を二人の間に出すと、両方をじろりと見回してから取締役の顔に焦点を当てる。そして、

「和孝、縁談って何？」

前後の説明をすつ飛ばして、いきなりそうそう訊いた。

え、つと驚いたのは荒木さんのほうで、取締役はというとひどくムツとして「違うつて」と顔を顰めながら言い捨てた。

「それは誤解だつてさっきから言ってるんだ」

「じゃあ私にもちゃんと話さないよ」

「そうしようと思ってるさ」

取締役の返事は主任にだっただろうけれど、目はずっと荒木さんのほうを見たまま逸らさないでいる。荒木さんはそれを嫌うようにしてそっぽを向いて、なんだかこれって、あれっもしかして思っってみました。

もしかして、取締役って主任とじゃなくて。

荒木さんと、だったりとか。

え。

そう考えると、いろいろすつきりしそうな気がする自分がにわか信じられなくて、

「・・・うそ」

思わず声が洩れた。

「日浦君、君居たのか」

ぼそつと出た言葉に気がついて、取締役が僕の方を向いた。

さっきからずっと目の前に立っているのに、今初めて現れたようにいわれてなんだかそれこそ「うそ」と思うんだけど、僕と主任を交互に見比べて何を思ったのか取締役は、

「君たちも一緒に来てくれ」

と、なぜか僕の手を取って今来た道を元に戻ろうとした。

「え、なにっどこに行くの」

「和孝、お前何考えてるんだ」

「なにつて」

振り返った取締役は最初の困った雰囲気は微塵も感じさせないで、きつぱりと言い切った。

「事実をきちんと説明して、祐志にわかってもらう、それだけだ。」

・理沙子と」

そこで僕の腕をつかんでいる右手を掲げて、荒木さんに向かって笑いかけた。

「この日浦君は僕の証人になってもらう」

36 だって可愛くって

「はいって」

地下駐車場に入ったときからずいぶんとでかいマンションだなとは思っていたけれど、こうしてリビングまで通されるとさすがというかなんというか、僕の高円寺の部屋なんかとは比べ物にならないくらいの広さがあって、眼下に見える夜景がさっきまで車窓から見えていたのと同じ街のイルミネーションかと思うと、何階だったっけと気になってどうにも落ち着かなかった。

「相変わらずね」

まるでモデルルーム、人が住んでないような部屋よね、と主任は僕に笑いかけると勝手知ったるといふ素振りで真ん中のソファまでやってきた。その後ろについてきたはずの荒木さんは、リビングの入り口で黙って腕を組んで立っていた。

あの後、路肩に止まっていた取締役の車でそのままこの恵比寿のマンションまで連れて来られた。

大通りに出るとちよつと先に六本木ヒルズが見えてきて、田町に行くんならそこを左に曲がるんだけれど、今夜は否応無しにハンドルは右に曲がった。

僕は助手席に座って後ろの二人をバックミラーでチラチラと見ていたけれど、取締役の方は気にした様子はまったく見せずにとにかく車を流れに乗せて走らせていた。証人って、なんか大ごとになつてんのかな、とそう思ってもこの雰囲気じゃ誰に何を言っても返事は返ってきそうもないよなと諦めて、結局僕はこの三人とここまで来てしまったのだ。

「コーヒーでも淹れようか」

僕と主任がソファに腰掛けるのを待つて取締役がそう言うのと、それに応えたように荒木さんは動いて、あれっと思っっているうちに廊下に向かつてそのうちボタンという音がした。ここまで歩いてきた時に見た、どこかの部屋のドアが閉まったのだとわかった。

「・・・いいんですか？」

荒木さんに説明するって言うてたんじゃ、と僕が気になって訊くと、

「うん、まあでもこうして連れ戻せたわけだし」

と取締役は苦笑交じりに返してきた。

「で、和孝、それで？」

キッチンへと歩いていった取締役の背中を追いかけるように、主任が言葉短く訊いた。カウンターの向こう側に立つまでその返事は返ってこなくて、コーヒーメーカーから軽くブーンと言う音がしはじめてから、「だからそれはさ」と心底参ったという顔で言い出した。

「縁談のことだろ？こっちはその気が全然ない話なんだって、僕だつてつい先週聞いたばかりで」

「あきれたわね、自分のことでしょ」

「・・・まあそうなんだけれど」

ハハハ、と笑うとコポコポといい音と匂いをさせはじめたコーヒーを注ぐ為、食器棚からカップを取り出した。真っ白いのなかに青いラインが目立つそれはたしかどっかのブランド、そこまで気がついたけれどちょっと離れたこの距離じゃ確認は出来なかった。

それにしても、と顔を向けているキッチンからグルリと視線をまわした。黒が基調の調度品と窓際には脚の長いスタンドが一つ。主任じゃないけどこれじゃどこかのホテルのような感じがして、こんなところに1人暮らしなんていったいどんな気分なんだろうな、と思わず気になってしまふ。

それとも。

いなくなってしまった荒木さんのことが頭を過ぎる。

一緒に暮らしてる、とか。

不思議なことに、それには違和感を感じなかった。思えば僕だつて、いくら居座られたからといって先輩と一緒に住んでるんだし、共同生活っていう意味では他人と暮らすのはあんまり嫌だとも思わないし。

でも手馴れた手つきでコーヒーを淹れる取締役があの人と、思うとどうにもピンとこない。

うーん、と考えているところに「どうぞ」とそのコーヒーが差し出された。

「その気が無いって、じゃあ祐志は誰からそれを？」

主任は向かいに座った取締役を追及する手を休める気はないらしい。それに困り顔で「だからさ」と返して、ゆったりと脚を組み替えた。

「親父が仲間内に洩らしたらいいんだよな、僕の縁談を考えているって。でそれがどうしてか祐志の会社の誰かの耳に入ったらしい」「・・・は？」

誰かって、もしかして母親？

カチャンと手の中のコーヒークップが音を立てて、驚いている主任に「まあね」と応えると、あーあ、と溜め息をついた。

「・・・でもさ、君たちのお母さんってそういうのに動じる人じゃないじゃん、祐志にこんなことがあるらしいわよって言ってくれちゃって、でそれが先週の金曜」

「ああ、・・・帰ってこなくなった日ね」

「そ、でそれから祐志には逃げ回られてて」

「ちゃんと説明しないからでしょ」

「しようとしてるさ、なのに聞いてくれないんだって」

だからそこを理沙子からも何とか言ってやってよ。

僕は二人の会話を黙って聞いていた。意外においしいコーヒーは、

あと半分残っていた。

こうしていると、どうしても気になることがあった。

取締役、なんだかさ。

嬉しそうに見えるのは何故なんだろう。

その僕の疑問は、主任も感じていたらしい。苦笑しながら返事をする取締役に、「何でそんなにニヤニヤしてんのよ」ととうとう噛み付いた。

「だって」

クスン、と笑って取締役は言う。

「そんなに怒るほど、僕のこと好きだったのかって思うとさ」

ククク、とそれまで以上にニヤついて、コーヒークップを両手の中に収めてしまふとなんとも幸せそうに呟いた。

「可愛くって」

ボタン、と後ろで音がしたかと思うとバタバタと足音がして、僕のすぐ後ろでドスン、と大きな音がした。

「・・・祐志」

主任が僕の隣で目を真ん丸くしている。

何事？と振り返ると、荒木さんが大きなバッグを脇において立っていた。

「日浦君」

有無を言わさぬきつちりした声が、僕の名前を呼んだ。

「今夜から君のところでやっかいになる」

「はあ?!」

なんでそうなるの？

待つてくださいよ、と言う僕の声は全然耳に入っていないようで、ソファにかけた僕のジャケットとバッグを攫むとそれをまるで人質にでも取ったように悠々と玄關に行ってしまった。

「・・・マジ？」

何が起こったのかと呆然とする二人をおいて、僕は慌ててその後を追いかけた。

37 シンプルイズベスト

「・・・ただいま」

上原圭一はドアをゆっくりと開けてまず顔だけ中に入れた。

一応声は出しては見たものの、きっと誰もいないだろうとは思っていた。

『今夜は帰らないかもしれません』

きつぱり言い切った日浦は今まで見たこともないようなきりりとした顔つきをしていて、なんだコイツこんな顔も出来るんじゃないかと改めて見直したっていうかもつと言えば惚れ直したというか、んまあそんなところだったただけけど。

ああまで言っただから、どんな状況になっついようと今夜はここに帰ってきてないよな。

上原がそう思って、真っ暗闇の玄関に一步踏み入れたらカッンと何かにぶつかった。

いや、ここでぶつかると言ったら靴だろうな。

何度もここに足を踏み入れたけれど、今までこんな風につつかえたことなんかなかったぞ、と思って足元を見ると、ぼんやりと霞んではいるけれど絶対に章吾の持ち物じゃないワークブーツがそこにあった。

「誰の？」

ふいに思い出したのは店で見た梶原理紗子の足元で、そういえば彼女はデザイナーズもののようなハーフブーツを履いていた。まさか章吾、お泊りじゃなくてお持ち帰りかよ、といやーな予感が頭を過ぎって、それじゃここに帰ってきた俺ってば間抜けもいいところじゃん、そう考えながら目を凝らしてみる。

あのブーツはヒールが若干あったよな。

でも、それとは全然様子が違う。

まるで男物だよこれ、そう考え付いてからが早かった。

バタバタと深夜だということを忘れたように部屋に上がりこむと、スタン、と音を立てて奥の八畳間に続く引き戸を開けた。部屋の明かりはいつも真っ暗にしないと寝付かないはずの日浦が、今は淡いオレンジの常夜灯をつけているのに驚いて、やっぱりあの女かよ、と一瞬ムツとする。

だったら電話の1本でもよこせよ、と言いたいのを我慢して、じやあその顔でも拝んでやろうかとベッドに近寄ってみて今度こそ本当の本当に驚いた。

「………なんで、荒木さん？」

寝顔だつて見間違うはずのない、ひどく端正な顔がそこにあった。

「おはようございます……す」

なんとなく気後れしながら会社にやってきたのは、昨夜のことが頭にあつたからといつもと違う明るさでなかなか寝付けなかったかと、やっぱり主任と顔を合わせるのが気恥ずかしいからで、しかも最後はとんでもない別れ方をしていった僕はどんな顔をしてたらしいのかと鬱々としていたからだ。

いや、嬉しさから来るウキウキも半分はあるけど。

半分以上か？

「おはようございます」

ニコツと笑って早速コーヒを淹れようと美奈ちゃんが立ち上がったところに、「日浦」と名前を呼ばれた。

「はいっ」

自分のデスクに鞆を置いて、顔を上げたところで主任をばっちり目があった。

「月曜の資料、もう一回揃えて会議室に来てくれる？」

怒ってるって顔じゃないのはさすがに仕事だからか、いつものがらのシンプルイズベストなスタイルでそう手短に指示を出すと、佐々木先輩に何か言いながら企画室を出て行った。

「かつこいいわよねえ」

オフィス用のプラカップでコーヒーを持ってきてくれた美奈ちゃん、主任の後姿を見ながら溜め息をついた。

「あの人の彼氏って、いったいどんな人かしらねえ」

ほう、とお盆を胸に抱えながら言うのに僕はもう少しでコーヒーをブツと噴出すところだった。

あの、僕です。

なんて言えないっての、まだまだ。

主任の今日のいでたちは細身のストライプが入ったチャコールグレイのパンツに白のカッターシャツ、その上にオフホワイトのロングカーディガンを羽織っているのはこの先流行すると言われている甘辛系ファッションの見本のよう。捲り上げた袖から覗く、腕に嵌めている大きな目のクロノグラフウォッチまでビシッと決まって、自社のカタログからそのまま出てきたと言っても過言じゃない。

それに比べて僕はどう見てもかつこいいとは言えないよなあ。

ホントにこんなのであの人隣に立てるのか、と昨日の今日でまでもや心配になってきた僕は、「いやいやいや」と頭を横に振った。

気持ちを伝えるのが大事。そう、それが一番。

誰がなんと言っても主任は僕のが好きだって僕はわかってるもん、で僕は。

僕は主任が好き。

「えっと、じゃあパターン表貸してくれる？」

熱いコーヒーを頑張って一気に飲み干すと、月曜日に使った資料をもう一度ファイルに揃えていく。

さっきの主任の後姿を見て、そう思った。僕は主任が好き、それ

で今は仕事中。

甘いことを考えてないで、しっかり仕事しなさい。そう言われたようだった。

必要な書類を確認しながら、でもデザイン画はコピーを荒木さんが持つて行つてゐるし、写植に必要なコピーはもとの構成を変えていくことになったからそれは金曜日の会議待ちじゃないのかな？と、なんかおかしいなと思ひながら、それでももしかしたらデザイン構成に必要な布地サンプルがいるつてことなのかも、と思ひついてパターン表を持つていくことにした。

「失礼します」

コンコン、とノックしてから入った会議室。返事がないからドアを開けて、振り返つたその顔を主任の手が覆つた。

「しゅ・・・・・・・・」

え。

ん、と息を吞んでから、僕は持つていた資料をドサドサツと足元に落とした。

しっかりブラインドが下ろされている室内で、僕は会議室のドアに押さえつけられながら、柔らかな唇を押し付けられていた。

38 抱きしめてもいい？

ただ触れるだけの柔らかい感触は、僕を驚かせるのには充分だった。

思っても見ないこと、それが起こると人間身動きが出来なくなるってのは本当だ。びっくりして止まったまま、僕はかろうじて動く視線をゆっくりと降ろした。

軽く閉じた睫毛が目の前でフルリと揺れる、それだけでも胸のドキドキが止まらなくなつて、どうしたらいいのかと戸惑う気持ちをいつそう深く押し付けられた唇が、後押しして離し立てる。

昨日抱きしめたときよりも、もっと近い場所にいる。

あの時よりも、もっと温かい。

甘く優しい香りが鼻腔をくすぐる。それがどんなに気持ちのいいことなのか、わかつて。

そろそろと腕を持ち上げた。

抱きしめてもいい？

そう訊く代わりに触れただけの唇を軽く啄ばむ。

逃げない唇は応えるように軽く開いて、より深く近づいた。

手触りのいいニットの背中に触れる。ぎゅっと抱きしめたら壊すんじゃないかと思うほどの細いウエストに腕を回して、角度を変えて口付けた。

なんか、

すごくイイんだけど。

昂ってきた気持ちが身体を満たしていく。

こんな風だなんて思っていなかった。

好きな人とキスするってことが、こんなに気持ちいいことだなんて思ってもいなかった。

しかも社内で、ってのが余計にクル。

ドキドキしちゃって誰か来たらどうしよう、そう思うのが普通な

んだろっけれど、今はそんなこと考えるよりもこの柔らかくて甘い感触を味わうほうが先、そう思ってしまうってのはなんていうか、やみつきになりそう。

もっと、そう思っ舌を差し入れたらとたんに身体を突き放された。

「・・・え？」

なんで？

「この先はここじゃダメ」

「って、え？」

「・・・ばか」

っん、とほんのり赤くした頬を逸らして力の抜けた僕の腕から逃れると、大股でデスクまで行きつくと「・・・もう」と唇を尖らせた。

さっきまで柔らかく触れてた唇を。

「昨日の分なのっ」

「・・・あ」

なんだそういうこと。

っていうか、

「うわ」

今になっ恥ずかしくって、顔が赤くなって来た。

だって、主任にキスされちゃった。

もう、何でそんなに可愛いことするんですか。全然、全然イメー
ジじゃないからたまんなくなるじゃないですか。
「あの」

足元に落した資料をかき集めると、慌てて傍まで寄った。

ちよっつとでも近くに居たい、そう思っのことだったのに、とな
りに座っても顔も見ようとしんない。

まだ頬は赤いままだってのに、なんだかなあ。

照れちゃって、とクスリと笑みが洩れるとすかさず、「祐志はなんか言ってた？」と訊いてきた。

「荒木さん？」

「そう、だって昨日日浦と一緒に帰ってちゃってからこっちは大変だったんだから」

和孝はむっちゃくちや落ち込みまくるし、宥めるのも一苦労なだよ。

ぶん、とむくれた顔も可愛いなと思いつながら、それに僕は大きく考えもせずにあつた事だけを話した。

「僕んちに着いてからすぐに寝ちゃったから、特に何も言っていなかったですよ」

本当？と振り返った顔にうんうんと頷く。

「今朝は先輩が朝ごはんを作ってくれて、それを三人で食べて出てきたけど」

「先輩って・・・上原圭一！？」

「・・・ええ、だって朝になったら隣で寝てたんで」

「うそ」

ガタン、と勢いよく立ち上がった主任はきつと僕を見据えて言った。

「あの男も一緒なのっ」

39 梶原理紗子のユウウツ<7>

「・・・はあ」

手にしたフォークでパスタを絡めとろうとするけれど、うまくいかなくて溜め息をついた。

「どうしたのよ」

手を止めた私を、訝しそうに佐々木が覗き込む。

その佐々木はさつきから精力的に皿の上のものを次々片付けていた。昨日日替わりランチを食べたあと貰って帰ったメニューの中に、ミニピザが付いて1000円のレディースランチと言っているのがあると知った佐々木が、どうしても今日のランチもここに来ると言って引っ張ってこられたイタリアンレストラン『La fiore fiore』には、入ったときにぐるりと店内を見回して川島涼子がいらないのを確認したけれど、やっぱりどうにも落ち着かない。

「昼前からちよつと変よ」

もぐもぐ、と口を動かしながら言うのになんでもないわ、と返して、仕方無しにパンを千切った。

「朝はなんだかすごくウキウキしてたじゃない、なんかいいことでもあったのって、聞こうと思ったくらいだったのに」

春物のコレクションについてもう一回練り直すって言って、会議室で日浦と話し合ってからよね、なんか面倒でもあった？

何にも知らない佐々木は、仕事のことに決め付けてくるけれど、そうじゃないから余計に面倒って言えば面倒で。

「・・・はあ」

蜂蜜の混ざったマーガリンをほんの少しつけて、口の中にポンと投げ入れた。

上原圭一が朝ごはんを作ったと聞いて、驚いて立ち上がった。
「なんでよ」

思わず聞きただすと、それに圧されたように「え……ええと」と日浦が言った。

「なんでって、えーと」

一緒に住んでるから。

さっきまでの甘い雰囲気が一気に冷え込んだように心配そうな顔を向けてきた。

「……ああ、もう」

私ったらこんなことじゃまたビビらせるだけで終わっちゃうじゃない、とその顔を見てはつとする。仕方ないでしょ、日浦は上原のことをただの先輩だと思ってるんだし、それに、宣戦布告したのはこっちなんだし。

あの男がそれで引き下がるとは思えない、と考え直して、ならこっちは出来るだけ普通の顔をしていようと自分に言い聞かせた。

そうよ、日浦にはその気はないんだから。

何にも心配することなんかないわ、と独り頷いて、すぐそばに椅子を引いて座った。

さっきまで抱きしめてくれた腕、思ったよりも力強い抱擁は、ドキドキしていた気持ちを余計に奮い立たせて、もっと近づきたいという欲望が湧いてくる。顔を振るときつと触れてしまう、そんな近くに意外に柔らかかった唇が見える。啄ばむようなキスにんだか気持ちいい、なんて思っていたら舌を差し入れられて、驚いて突き放してしまったけれど。

驚いただけなの、だって昨日の今日だし。

ってすぐに言えばよかったのよ、私ってば。

「でもなあ」

パスタを弄びながら独り言が出てしまう。

アプローチとしては強引過ぎたのかしら？そりゃ、いきなりキスされるなんて思ってただろうし。

あああ、そうよそうかも、とフォークでガシガシと皿を突き刺していたら、佐々木が恐ろしいものでも見るように眉をひそめた。

「・・・ねえ、なんかあったんでしょ、それともストレス？」

「なんにもないって」

「だって、明らかにおかしいもの」

最後の一口になったピザを、あーんと言いながら口に運ぶと、「んだあってんねえ」と言葉にならない声を出しながら指差してきた。

「ここ、皺が寄ってる」

ここ、と言われてつんと押されたのは眉と眉の間、眉間と呼ばれるところ。えっ、と手を持っていくと、クスリと笑って「ねえねえ」と聞いてきた。

「それとも、日浦クンに迫って断られたとか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ」

なにそれっ。

突然のことにフォークを取り落としそうになる。

「だってさ、見てればわかるって。あなた日浦にぞっこんでしょ？」

いつつも目で追っかけてるじゃない、声のトーンだって日浦を呼ぶときだけ違うんだもの、自分で気が付かなかった？

呆然とする私に、これぞ極め付けと言うセリフを言った。

「会議室に呼び出すなんて、見え見えなことするんだもの、わかる人にはわかるっての」

ふんふん、と鼻歌交じりにデザートのカaramelソースがけのアイスクリームを掬いながら、佐々木がニヤニヤと笑う。

「そっかーそれならわかるわよ、残念だったわねえ」

全然残念だと思っていけないような口調で言つて、「これって美味しいわぁ」とスプーンを舐めた。

「違うわよ」

「なに？」

「違うつて言つてるの、まだ振られてないもの」

「・・・え、なに、じゃあ迫つたのつてはホントなの？」

「迫つてないつてばっ」

日浦から好きだつて言つてくれたのよ。

でもそれを佐々木に言うことはできなかった。言つてもいいかと思つたけれど、でもそれよりも気がかりが大きすぎた。

自分の惚れてる男が、その男を狙つてるつて公然と言つてのけた男と一緒に暮らしてるつて、やっぱりどう考えたつておかしいじゃない。

しかも。

自分の身内がそこに転がり込んだなんて、言えないつての。

「はぁ」

今日何度目かの溜め息をついて、ぐずぐずになってしまったパスをフォークでかき集めた。

40 梶原理紗子のユウウツ<8>

「そうそう、聞いた？」

結局アイスクリームは食べる気がなくて、佐々木にどうぞと言
って差し出した。すでにすっかり食べ終わっていた佐々木は、コー
ヒーをすすりながら「えーでも太っちゃうから」と言うけれど、そ
れでも手は引つ込めなかった。

「・・・なにを」

まだなにかあるのかしら。

ふう、とまた出そうになった溜め息をかみ殺して私が聞き返すと、
佐々木は目をキラキラさせながら、「実はね」と喋りだした。

「取締役、どうも結婚するらしいわよ」

「えっ」

思っても見ないところから出てきた話に、何であんたが知ってる、
そう言いそうになってぐつと息を詰めた。

「うふふ、やっぱり驚くと思ったわあ、あなたは取締役と噂にもな
ったしね」

「やだ、それは周りが勝手にしてただけで」

「わかってるわよ、だってあなたは日浦が来た時から・・・」

「ああ、日浦の話はいいわ、で、なにその結婚って」

両手をふるふる振って押しとどめて、佐々木の話の元に戻させた。
まさか、もう社内で噂になるくらいの話だったのかしら、でも私は
昨日が最初だったのよその話を聞くのってば。

「いったいどこから聞いたんだ、と佐々木の顔をじっと見返すと、
「そんな怖い顔しないでよ」

とつんと顔を逸らして、アイスクリームの器に視線を移した。

「ねえ、それ誰から聞いたの」

「・・・誰だっていいじゃない」

「だって、それって会社ではまだ誰も知らないんじゃない？」

「そりゃあ・・・」

スプーンを加えた口が、「あっ」と言って舌を出した。

「じゃあ、外注先？」

まさかと思つてかまを掛けた。祐志の母が知っていたのなら、取引している会社の誰かがこの佐々木に漏らしたと言うことはありえる。

「外注つて言うか」

「じゃあどこ？」

教えてよお、なんならまだ時間があるからケーキでも食べる？

ウインドウに並んでいたティラミスを思い浮かべながらそういうと、「そうねえ」と思案した顔が、ストロベリーチーズケーキがいわと言つてきた。

「ゴルフ場の副支配人からなのよ」

佐々木はチーズケーキが来ると、ニコニコとしながら意外なことを言つた。

「ほら、年末恒例のゴルフ大会があるでしょ？あれで使つてる武蔵野カントリークラブの副支配人、あの人私の高校時代の先輩なのねで、その人からこの前大会の打ち合わせで出向いた時に聞いたの。社長が仲間内に言つてるらしいのよ、いい縁談があるって」

「社長が」

昨夜聞いた話と同じだ。社長は本当に和孝の縁談を考えているらしい。

まずいな、と思つたとき、佐々木はもっと意外なことを口にした。

「でもね、その相手つてどうも私、わかっちゃったようなのよ」

「は？」

なにをいきなり、そう思つた目の前で、佐々木はストロベリーチーズケーキの一きれを大きな口をあけて飲み込んだ。

「新沢さん、あの子がそうよ、きっと」

「・・・うそお」

冗談でしょ。

ティラミスを掬っている手が思わず止まる。・・・まさかそんな訳はない。

でも、佐々木は自信たつぷりに喋り続けた。

「だってこないだ聞いてちゃったんだもん」

ほら、荒木さんが打ち合わせに来た月曜日よ、日浦のところにごい勢いで取締役が来て、で彼を追い出してから言ったのよ。新沢さんに。

「すんごく丁寧な言い方でさあ、『美奈子さん、困るんですけど』なんて言うんだもん、なんだなんだって足が止まっちゃって」

ほんの一瞬だったから、誰も気がつかなかったと思うけど、あの子も甘えたような顔するんだもんおかしいなと思ったらピンと来たのよ、ああ、これがあの副支配人の言っただ縁談の相手かしらって。

「新沢さんは社長の縁故だっけ言う話だし、なんか訳ありだとは思ってたのよね」

最後の一口になったコーヒを飲み干して、佐々木は満足げに頷いた。

「・・・ほかには言っただけでしょうね」

「当たり前じゃない、私は噂話って好きじゃないのよ」

それはどうだか、と疑わしげに佐々木の顔を見つめ返して、ほんの少し考えてから伝票を取り上げた。

「誰にも言わないでね、変な風に広まったら困るのはこっちの方なんだから」

暗にあなたと私は同じネタを知ってる共犯だと言い置いて、佐々木を促して立ち上がった。「自分の分は払うわよ」という佐々木にいいわと言いながら、これはすぐにも確認しなくちゃ、と決めた。

ここのお昼代くらい、情報料として和孝に請求してやるわ、と思

いながら『La fiore fiorisce』を後にした。

41・・・まだ自信ないかも

『あの男も一緒なのっ』

主任が立ち上がって言う迫力に圧されて、ブンブンと頷くと「な
んでよ」と詰られた。

「なんでって・・・えーと」

なんかマズイこと言ったかな？そう心配になって主任の顔を見上
げると、「ああ、もう・・・」とまたあきれたように呟かれて、で
もすぐに「仕方ないか」と肩をすくめた。

「宣戦布告しちゃったのはこっちだし、ね」

どうせ日浦はその気はないんだし。

となんだか意味のつかめないことを言うから、

「なに？」

と訊くと、「なんでもないわ」と言つて、ちよつと乱暴に椅子を
引いて腰掛けた。

先輩、僕のことなんか主任に言ったんでしょ。

そのことを聞いてなかった、と思い出したところに「ねえ」と主
任が上目遣いに訊いてくる。

今まで気がつかなかった、甘えた目線。

僕が近寄ったよりもまた近い距離、肩が触れるくらいのところに
ある頬。

その先には今知ったばかりの唇がある。

柔らかかった、なんてことを思い出したら、そりや今度はこつち
から手を伸ばして抱きしめて、甘い感触を味わっても怒られないよ
ねとかつて、思うじゃない？

気が付かれないのを幸いに、すつと上げた腕を背中に回してもう
少しで頭に手が届く、と言う場面でぐつと寄って問い詰められた。

「3人一緒だったのよね」

「え？」

「朝、3人一緒だったのかって聞いているの」

あ、・・・そっち？

えっと、もう一回キスしてとかじゃないの？

一瞬止まってしまった腕はとたんに行き場をなくして、「えーと」
とかがって言いながら頭の上で曲げ伸ばし運動なんかをしちゃったく
らいにして。

「・・・どうしたの？」

「いや、ハハハ」

どうしたのじゃないんだけど、なんて、まだまだ言えないよな。
と、ちよつとだけ拗ねた気分で笑ってみせる。

不意に、さつき美奈ちゃんが言っていた言葉を思い出した。

『かつこいいわよねえ』

『あの人の彼氏って、いったいどんな人かしらねえ』

ここに居ますって言えればいいと、そのときは思ってたけど。

・・・僕には。

まだその自信、ないかも。

やっぱりいくら押しかけられたからって、さすがに弟さんが僕ん
ちに居るっていうのは気になるよな、と心配そうな顔だった主任を
思い出しながらアツアツで湯気のたつてる味噌汁を手にした。

なんだか外に出る気がなくて、今日は6階の社員食堂に来てい
た。

ウチの会社の社員食堂は結構充実していて、日替わり定食が3種
類、肉がメインと魚がメイン、それとダイエットメニューというこ
とで、女性ばかりか今話題のメタボリック症候群が当てはまってそ
うな管理職クラスに人気の豆腐料理がある。今も僕の隣のテーブル
では総務課の部長さんがその豆腐料理を食べていて、よく見ると香
ばしい色をしたステーキがメインで僕の選んだチキンステーキより
も美味しそうだ。

「なんだ、今日はここなのか？」

あさりの味噌汁だ、と思っていたところに上から声がかかった。

「・・・取締役？」

「理紗子が外に行ったから、てつきり君も一緒だと思っていた」

「あ、いえ・・・」

そういえば、佐々木さんと連れ立ってフロアを出て行った主任の後姿を見た。あのあとなんだか顔を合わせ辛くって、ちょうど確認が入っていた新規テナントの企画を読み直すふりして、声もかけなかった。

ふーん、とちよつと不満げな声をさせて取締役が隣に座ってきて、え、っと思ってる僕に、「あのさ」とぐつと近寄って訊いてきた。

「祐志、どうしてる？」

「え、ああ荒木さんですか」

「・・・朝、普通に出かけてった？」

心配そうなのは、ただ僕の所に一晚泊まったからというからじゃない。

「いたって普通だと思いますけど」

取締役のところから出て行ってしまったからだ。

「あの、僕のところには今大学の時の先輩が同居してるんですが失礼します、と断ってご飯を食べながら話すことにした。

僕のところにあともう一人一緒に住んでる人が居る、と言ってあげば余計な心配をかけないですむかと思ったから、そう話したんだけれどそれが面倒を増やす一因になるだなんて思っても見なかった。

「その先輩に朝なんにするー？って訊かれたから荒木さんにパンでいいですかって言って、でもってOKだったからパンとコーヒーとあとはスクランブルエッグだったかな」

「祐志、朝は普段食べないのに」

「結構食べてましたって、なんかね学生の時の合宿みたいかって言って」

僕も大学生の自分はこんな生活にあこがれてたんですね。

狭い部屋でごろごろと雑魚寝して学校に行ってるんだかなんだかわかんない毎日で、大好きな作家さんがそんな生活を4年間続けてたって、自伝小説で書いてるんですよ。いいなーそういうの、一度やってみたいよなーって思ってたんで、なんか面白いです。

クスクスと笑って話すと、どうにも納得できないという顔で「祐志がそんなこと言うなんて」とブツブツと零している。

「僕のほうはいつまで居てもらっても構いませんよ。荒木さんの気がすむまで」

それに、昨日の取締役の様子を見てるとなんかそれほど心配するほどじゃないかなとも思っくんですよね。

もぐもぐと口を動かしながらそう伝えた。

「なんでそう思っんだ？」

「だって」

あんなに幸せそうな顔になる関係なんでしょう？相手を思うときの取締役の顔、ずいぶんかつこよかったですよ。

思ったとおりのことを言うと、まんざらでもない顔で「馬鹿を言うな」と横を向いた。

「そういえば、僕の先輩って荒木さんと知り合いだったんですよ」

コーヒーをまずそうに飲んでいる取締役に言うと、驚いたように顔を上げて、

「誰だ？」

と訊いてきた。

「六本木の『ANAGURA』っていうスタンディングバーの店長やってる上原って言うんですが」

僕にしては当たり前のことをさらりと言うと、いつそう驚いた顔をして、

「嘘だろう・・・」

そんなの信じられない、と呟いた。

42 リボンとローヒール

なんか変だ。

『嘘だろう』

あの声は、明らかに戸惑っていた。

それは、最初僕が先輩と同居してるって言う事に対してだと思った。まあ、そりゃあ僕だって転がり込まれたほうで、すごく迷惑って訳じゃないけれどいつまでもこんなの続けてはいられないよな、と思っっているし、それに彼女だとばかり思っていた涼子さんとは実の親子なんだとわかって、別に喧嘩してるわけでもなんでもないのなら、家に帰ってもらって構わないんだから、とは正直思っけど。

でも、そうじゃないんだあれは。

先輩が、荒木さんと知り合いだったことを解って出たセリフなんだ。

それってどういうことだろう。

隣に立つ取締役の顔を、失礼にならない程度に気をつけながら見つめる。

取締役はあれから、それについては何にも言わなくなっていた。

1階の人事課まで降りると言った取締役に連れ立って、階段で降りればいいところを僕も一緒にエントランスでエレベーターを待っていた。なかなか来ないと思っっていたそれがチンと音を立てて扉を開けたとき、

「あ、待ってっ」

バタバタと後ろから駆けて来る人があった。

「わ、間に合った」

「美奈ちゃんっ」

閉まりかかった扉に慌てた僕と取締役が、それを押さえているところに、美奈ちゃんがぼおんと足を蹴って飛び込んだ。

「なんだ日浦さん、よかったあ階段使わなくちゃなんないかと思っ
た」

「よかったじゃないよ、危ないじゃん」

腕に絡んできた美奈ちゃんに、もう、と笑いかけた僕の隣で、取締役がすごい怖い顔をして立っていた。

「・・・美奈子さん」

「あ」

やだ、取締役もいらしたんですか。

えへ、と舌を出した顔が、微動だにしない怒り顔に次第にしゅんとして泣きそうになっていく。ああ、もうちよつと優しく接してや
ったっていいじゃん、と僕が言いそうになったとき、

「大事な身体だ・・・無茶をされては困ります」

短いけれど、ビシリとした口調で取締役が美奈ちゃんに向かって
言った。

「ごめんなさい」

美奈ちゃんは僕の方をチラチラ見ながら、でも何を言われている
のかちゃんとわかってそう返事をした。

「・・・ん？」

ってさ、これってもしかして僕が目撃しちゃいけない場面だった
んじゃない？

「・・・あの」

と声を出しては見たものの、その場の空気があまりにも緊張して
てそれ以上の突っ込みは出来なくて。

なんか変だよ。

頭の中でそう思うことしか出来なかった。

でもそれっきり、目を合わせないで真っ直ぐ前を向いていた取締

役が5階に着いた時、

「じゃ」

とエレベーターを降りた僕にだけずっと手を上げて、扉の向こうに消えていった。

「美奈ちゃん」

「えへへ、怒られちゃった」

「いやそうじゃなくてさ」

君は取締役となんか関係があるの？と聞きそうになって、そのときポンと思い出したのは『取締役の縁談』で。

自分の発想にとんでもなく、

『うそっ』

っと思ってしまった。

「・・・なに？」

立ち止まってしまった僕を振り返った美奈ちゃんは、「なんでもないよ」ととっさに返した僕に、

「そう？」

と不思議そうな顔をして、でもすぐににつこりとかわいい顔で笑って先に企画室のドアを開けて行った。

いつもながらの清楚なボレロスーツ、ふわりと広がったスカートは胸のところから切り替えのあるワンピーススタイルで、きゅっと結んだリボンがより可愛らしさを演出しているデザイン、それは自社ブランド『マーガン』のものだけれど。

その後姿を見てあれ、っと思った。

今日のはかかとの高いヒールじゃなくて、滑りそうもない幅広のローヒールだ。

それが何を意味するのかわからない僕は、この先の流行なのかな、とそのとき思っていた。

43・・・そんなはずはない

「日浦」

企画室に入ったとたん、目が合った主任にちよつと、と呼ばれてデスクに着く前にそつちへ足を向けた。途中佐々木先輩の顔がなんだかやけに嬉しそうにニヤついているのが気になったけれど、それよりも僕も主任に言っておいた方がいいかなと思うことがあったから、気にすることないやと思つて通り過ぎた。

「日浦、和孝が今どこにいるか知らない？」

ファイルを片手に持つて、はたから見れば仕事の打合わせって見えないこともない、でもちよつと接近しすぎな距離かなと思える近さで主任が耳打ちしてきた。こういうのつて、なんかドキドキすると思わずときめいた自分に余計にドキドキしながら、ええと、と返事をした。

「あ、取締役なら今まで一緒でしたけど」

で、1階の人事課に行くつて。

続けて荒木さんのことを話そうと思つたら、

「・・・和孝を捕まえなくちゃ」

とずいぶんと怒りお抑えた、不穏そうな声色でいう。

「なに、どうかしたんですか」

つられて僕も小声で問いかけると、ちよつとここではね、と言いつながら

「今夜時間ある？」

と言つてきた。

「え、ええ」

「じゃあ、一緒に話を聞いてくれない？」

「話？」

「そつ、和孝の、だつてあいつ・・・」

そう言いかけた目の前を、美奈ちゃんがコピーするための指示タ
グを山ほどつけた雑誌を抱えて横切っていった。いつもは軽やかに
飛び跳ねるようにして歩くのに、よっぽど重たいんだろっかなんだ
か一歩一歩慎重そうに見える。

「・・・新沢さん、今日はローヒールなの？」

ああ、とさつき僕も気がついたことを口にする主任に、僕は笑っ
て応えた。

「今までずっとかかとの高いヒールだったから、なんかいきなりっ
て感じですよ」

「日浦も気がついてたの？」

「え、いやあの、社員食堂からエレベーターに乗るときに飛び込ん
できて」

危ないじゃん、って言ったら一緒にいた取締役が凄い剣幕で『無
茶は困ります』って言って、それがまた本当にきつい声でなんか妙
な雰囲気だったからそれ以上は聞けなかったんだけど。

あれってなんだろう？

その場のことを思い出して、やっぱり妙だよなと思っていたら、
それを聞いた主任がひどく驚いた様子で美奈ちゃんの後姿を見つめ
ていた。

「まさか、ね」

「え？」

「・・・とにかく和孝に確認するのよ」

もし違ってたなら祐志に悪いし、間違ってたらなかったで祐
志に悪いんだけど、そんなはずはないし、そうよ、そんなはずはな
いもの。

ブツブツと繰り返す言葉を聞いて、エレベーターを降りてふと頭に
浮かんだ言葉を思い出した。

「取締役の縁談、のことですか」

「えっ、それなんか言ってた？」

バツと振り返って、僕の肩をつかんできた。

「急だしか、思っても見なかったとか、・・・失敗したとか」

「なんですかそれ」

「いや、言わなかったのならいいのよ」

そう言つと、ふう、と大きな溜め息をついて腕を組んだ。

こうしていると、どうもあの甘い眼差しが夢か幻かつてな感じに思えてくるのは僕の方だけなのかな？

今すぐにも触れることが出来る距離にいるのに、ひどく遠く感じるのは僕だけなのかな？

何があつたのかさっぱりわからないだけに、僕の不安はいつそう増して、どうしていいのかわからなくなる。

まいったな、本当に自信がなくなってきたみたい。

きりりと前を見据えて何かを考えている主任の傍で、僕は一人で途方にくれていた。

44 それって無理難題です

午後の仕事はなんだか身が入らなくて、パソコンの前でボーっとしてることが多くなった。

別に僕がどうにかできる話ではないんだろうな、だから僕には話が見えないんだよな、そう思って、でも今夜付き合ってといわれたんだから、今夜もしかしたらその話をきちんと聞けるのかも、と思うとそんなに焦らなくてもいいじゃんと思うんだけど、なんだろう、さっきの横顔が気になって仕方がない。

どうしても追いつけないと見せ付けられたような、強い意志というか。

それが単純に僕の経験不足というものだとはい、全然思いもしないでただその横顔が僕を不安にさせているんだということしか頭に浮かばなかった。

いけない、工作中だ。

だよな、いけないいけないと思って、午前中に最終確認した新規出店の企画書をグラフを使って見やすくまとめようとしていた時、企画室に普段は顔を見せない姿が入ってきた。

「あれは・・・」

商品部の高野部長と、販売部の香西部長だ。香西部長のほうはこのが販売部の一部だからなんとなくわかるとして、なんで高野部長まで、と思っていると、すぐ後ろから中山取締役が続いてきた。

「梶原君」

香西部長が主任を呼んだ。そういえば企画課課長はなにやってるんだと目をやると、すでに3人の傍まで行ってなにやら言葉を交わしている。いったいなんだろうな、と気になったのは僕だけじゃなくて、佐々木先輩や美奈ちゃんまで手を止めて企画室入り口に釘付けになった。

と思っただけだ、

「やっぱりかっこいい」

へ？と思つて見上げると、美奈ちゃんがその3人の登場に目をキラキラさせて、胸のところで手まで組んでうっとりつぶやいていた。

「え、つと誰が？」

「ええとお、高野部長お」

周りに気付かれないように小声で聞くと、くねつ、と腰をひねつて商品部部長の名前を挙げた。この3人、高野、香西、中山と言えば『ラウドネス』始動時からの強力ブレインで、中山取締役の脇をしつかりと固めていたのがこの二人だといつても過言じゃない。それに、若い視点と機動性と言うのを重視する取締役の方針の所為で、大掛かりな新規プロジェクトの時には必ずこの3人が先頭になって新人を多用して動く、と言うのもウチの会社の特色だ。

え、てことは。

まさかこの時期に新規プロジェクト開始、とか。

でもな、そんな大事なこと企画室の入り口で立ち話する訳ないか。

と自分の発想をまさかなあと疑いながら、美奈ちゃんがかっこいいと絶賛した高野部長に目をやった。

元々紳士服が専門だったウチの会社の、一番の主軸であるイタリアンテイストのスーツがばっちり映える体型、背が高くて肩幅が広くて、こんなところにいるよりもスタジオでグラビア撮影していたほうがよっぽど似合いたと思うハッキリした顔立ち。普通の人を着たら、たぶん『礼服？』と思うような濃いブルーのスーツは、ランダムに入ったシャドー 스트ライプが腕を動かすたびにキラリと光る。タイトめなシルエットに位置の高いウエストライン、フロントは三つボタンで小さめなデルタゾーンには淡いピンクのネクタイが見える。

対する香西部長は販売と言う『営業職』だからだろうか、カジュアルライン『ラウドネス・スポーツ』の深い臍脂のジャケ

ツトに、ところどころにオレンジの効いたチェックのシャツを合わせていて、快活そうな表情をよりくつきりと浮き出させていた。上から下まで『ラウドネス』で決めているのは見習いたいところだが、それもいかにもスポーツマンです、と言った風貌の香西部長だから出来ることで、僕はあんな格好したらまず学生に間違えられるよな、と思ってしまう。

身長は高野部長が一番高い、次が取締役で香西部長は僕とあんまり変わらないくらいか。

しかしこうやって並んでいると、ホントこの3人が雑誌のモデルで出てくれたほうが売上伸びるんじゃないかと思うくらい、ウチの洋服がよく似合うよなあ。

美奈ちゃんが言うとおり、かつこいいよね、と思うその中でも、全然見劣りしない主任の後姿にほう、と溜め息をついていると、

「日浦」

ちよつと来て、と声がかかった。

「はい」

なんだろ、と訝しそうに首を傾げた美奈ちゃんに見送られながら、僕はその輪の中に入ってしまった。

「これ、目を通しておいてくれ」

そう言っ取締役が差し出したのは、優に3センチはあろうかという分厚いファイルの束。間に写真が挟まっているらしくって、結構重さもある。

「明日朝からこの件について会議をするから、それまでに気が付いたことまとめとして」

「は？」

あの一。

いったい何事？と思って隣に立つ主任を伺うと、なんだか相当難しい顔をして同じようなファイルの束を睨んでいた。

すると、

「『マーガン』の姉ブランドを立ち上げることになったから、その戦略企画を君たちにお願いしようかと思って」

高野部長が、柔らかな声色で言う。

次いで、

「春の新規出店、新潟のラベル万代だったか、あそこに全国に先駆けて食い込もうと思ってな」

はきはきと滑舌よく、香西部長が言う。

「え？」

さつきまとめていた新規出店の企画書、それがラベル万代のものだったけれど。

それに、それともう最終決定の『まとめ』にはいつてる話なんですけど。

「・・・うそお」

主任の難しい顔がよくわかった。

無理難題、そうとしか言いようのないことがいきなり降って湧いてきたんだった。

45 僕だってそう思うよ

「・・・まったく、なに考えてるんだか」

「いや、僕だってこんな急にだなんて思ってたって」

「どうだか」

「ほんとだよ、社長が話進めろって言うからさ」

「いつ？」

「今朝の重役会議」

「けさあ？」

「だったらなんで昼に会ったとき、日浦に言わなかったのよ。」

主任は目の前に座った取締役に、詰るように言った。

そうしてむすつとした顔で、甘鯛のカルパッチョをフォークで突き刺す。香菜とオリーブオイルの彩りが綺麗なそれは、主任の選んだ白ワインとすごく相性が良くて、一緒に出された温菜のガーリックトーストとチーズのグリルともいいコントラストで一口食べるたびに美味しいと思うず言いそうになる。なのに仏頂面を見せる主任に、そんな顔して食べちゃ美味しいものもおいしく感じなくなっちゃうよ、と昔姉に諭されたことを思い出しながら、僕はカリカリしたチーズの触感を味わっていた。

高野部長と香西部長の思いもない新規出店提案に驚いて、しばらく頭が真っ白になっていた僕の脇で主任は、

「中山取締役、あとでご相談させていただきたいことがあるのです
が」

ときつちりと主張した。

「この件？ならそれは明日で・・・」

「いえ、ラウドネスの春の広告展開の件で」

「・・・あ」

「よろしく願います」

こんなに潔く会釈されたら、「わかった」と返事するしかなかっただろう。取締役はじゃああとで連絡するよ、と言ってその場は両部長と連れ立って去っていったのだけれど。

ホント僕だつて「なに考えてるんだ」と思っただくらいだから、主任は相当だつたんだろうな。

暗に荒木さんのことを含んだその相談に、どこか乗り気じゃなさそうな取締役を引つ張つてきてここ『La fiore fiorisce』に着いたとたん、「和孝のおごりだからね」といい置いて次々と料理を注文しだしたのだ。

テーブルには色とりどりの料理が並んでいて、中には砂肝のコンフィチュールなんていう、ペーストよりは柔らかい口当たりのそれをクラッカーに載せて食べるなんてのもあつて、面白いよなあと思つていたんだけど。

それにしても、テーブルの雰囲気はあんまりよくないよね。

隣で牡蠣のフライを口に入れて、美味しい、と目が語つたのを見た取締役が、「美味しいよね」と言つたとたんにはプイ、と横を向いた主任が僕と目があつて唇を尖らせた。

「あの」

僕はワインのグラスを空けた取締役に向かつて聞いてみた。

「新潟出店の件は先方にも確認してからでないと、どう企画を立てていいのかわかりません」

「うん・・・そうだね」

「出店予定の『マーガン』が20代から30代がターゲットだったので、他の出店リストとも合わせてみて採算が取れると思つてました」

姉ブランドとなると、ターゲットが若干上がる。そうなると客層・客層の市場調査も照らし合わせていかないと、どう展開していいのかの判断がつかない。ラベル万代にはユニクロとかGAPとか、若い世代が中心のブランドが出店予定だ。そこに同じ客層をターゲ

ットにして少し高級感が盛り込まれた『マーガン』をぶつけるのは、長い目で見ての投資と言う意味でも行けると踏んでのこと、これは出店計画を立てたときからの重役クラスの主張だったはずだ。でもそれよりも上の年齢層を狙うとなると、例えばデザイン一つ、ワンピースのアームホルの大きさ一つだって違えば、客の動線上にポンと年齢層の掛け離れた印象を持ったものがあるかどうか、わかりそうなもののに。

これじゃはじめっからやり直した、そう思ってた意見だった。

「採算ね」

うん、そうなんだよね、と取締役がばやくように言った。

「日浦の言うとおりよ、何で今更ターゲットの変更なんて」

私の言いたいことを全部言ってくれた、とにっこりと主任が笑う。でも、さっき取締役は「社長が進める」と言っただけで、てことは、これはもう決定事項なんだよな、と半分覚悟を決めて次の言葉を待っていたとき、

「実は、マタニティまでカバーできればって言ってるんだ」

「えっ」

「はあ？」

なに言ってるの、和孝っ

主任が腰を半分浮かせて驚いたように言う。僕だって驚いた、マタニティって、今までウチの会社のラインにはなかったじゃん。てことはやっぱり大掛かりな新規プロジェクトの一環と言うことになるのか。

コクン、と思わずつばを飲み込んで取締役の顔を見上げた。

「社長が・・・いや、親父がそういつてるのはさ、実は」

「実は？」

早く言いなさいよと主任が声を荒げる。うん、僕も気になる、その先は。

取締役は、その剣幕に押されるように目をうつろつろと泳がせて、

ぐると店内を一周した後、何かを決めたようにうん、と一つ頷いて僕らの方に顔を向けた。

「親父に子供が出来るからなんだ」

はあ？

僕と主任はバツと顔を見合わせて、次に主任はテーブルの上に身体を乗り出して言った。

「子供ですって？」

46 あれって試作品なんだよ

「うん、まあね」

ハハ、と力なく笑う顔は今にも自分だって戸惑ってるんだと言い出しそう、それを見た主任は「なんなのよそれ」と呆れたように言ってストンと椅子に座り込んだ。

「和孝の縁談のこと、聞き出そうと思ってたのに」
「ええと・・・」

だからそれって誤解だって言ってるじゃないか。そう慌てた取締役の言葉にかぶせるように、なのに社長に子供だなんて爆弾発言もいいところよ、と言って腕を組むと、思い出したように「だって聞いたんだもの」とまた身を乗り出した。

「聞いたわよ、あなたの縁談の話が噂になってるのを。会社でコンペに使ってるゴルフ場の副支配人が漏らしたって」

おかげでこっちはとんでもないことを聞かれたんだから。

話の取っ掛かりを見つけ出して、主任は一気にまくし立てた。

「誰とは言わないけど、あなたの縁談の相手が今ウチの企画室に派遣で入ってる新沢さんじゃないかって言ってきた人がいたわ。彼女、今年の春先から来てもらってたかしら、社長の縁故だって言うことだけだ」

案外社長も、はじめっからあなたの相手についてことで傍に呼び寄せてたのかもね。

そこまで言うのと再びフォークを手にした主任は、それでガーリックとアンチョビのパスタを器用に皿に取り分けた。

そうしてしばらくはそのパスタを食べることに集中しているように見える主任が、いったい何を考えてるのか僕にはわからなくて、その横顔をクラッカー片手にじっと見ていた。

だって。

美奈ちゃんの足元を見て、なんだかいろいろ言ってたじゃん。

なのにそれを聞きたださないで、どこから聞いてきたのかそんな噂話をするなんて。

なんか、主任らしくないな。

ぱくん、と口に入れた砂肝のコンフィチュールは、想像していたのとはまったく違って黒胡椒の効いたすごくさっぱりした味わい、こうして食べる前はレバーペーストと同じかなと思っていたから、そのイメージのギャップには本当に驚いた。

なんかさ、主任ってこんな感じなんだよね。

見た目から来る印象と、時々見せる表情がまったく違う。それがすごく新鮮で、見るたびに僕は驚かされる。

でも、今の主任はなんか隠してるって感じでどうもはつきりしない。

なんだろう？

もぐもぐと口を動かしながら見ていると、チラリと僕の方に目をくれた主任が、

「そっついえばさ」

と今思い出したように言い出した。

「新沢さん、今日はいつもと違ってローヒールだったのよね、そういえばファッションも緩めのシルエットだったし」

くるんと視線を取締役に向けると、覗き込むようにしてぼそりと言った。

「それこそマタニティみたい」

「・・・あっ」

僕は思わず大きな声を上げると、今頭に浮かんだことをするっと言ってしまった。

「もしかして、美奈ちゃんって妊娠してるの？」

驚いた顔で振り返った主任も、それまで困ったような顔でいた取締役も、僕の一言にうんうんと大きく頷くと声を揃えてこう言った。

「それって和孝の子じゃないでしょうね」

「それって親父の子なんだよね」

「えっ」

「うそっ」

「ちよつと待つてくれよお」

ぎよつとした様に動きを止めた主任と、ぐったりして椅子に座り込んだ取締役を前にして、僕は、

「本当なんですか？」

とおそろおそろ聞いた。

「うん、そう」

どこかほつとしたように返した後、「理紗子、それはないんじゃない？」と今度は取締役が巻き返した。

「だからさ、僕は祐志ただだって言ってるじゃない」

「そんなのわかんないじゃない」

「全然わかるって、僕の運命の人は祐志だけ」

きつぱりと言い切った取締役に、「だったらさっさとそう言っただけ断ればいいじゃないの」と主任は不満げに言った。

「和孝が社長にはつきりとそう言っしまえば済むことなんじゃないの、それなのにぐずぐずしてるから縁談なんてのをあっちこっちで言い触らされるのよ、でしょう？」

急に僕に話を振られて、「や、まあ、そう、ですね」とどぎまぎしながら応えた。それを聞いた取締役は、どうにも困った様子で、「そうなんだけどさ」と呟くと、ほう、と一つ溜め息をついた。

「祐志がいやだって言っただもんさ、僕が勝手には言えないって」
「・・・そうなんですか」

「そうなんだよね」

なにを考えてるのかってのは、僕の方が聞きたいよ、と言つと、まだ納得しかねた顔をしている主任に向かって

「前々から、僕は会社の跡は継がないっていつてるんだ」といきなり切り出した。

「え？」

「だって、祐志と一緒に生きるって決めたから、僕には将来に続く跡取りを作ってあげることが出来ない、だから社長にはいつまでも同族会社でいるんじゃないやなくて能力のあるものに会社を任せることを考える時期に来ているって進言してるんだ」

でもまあ、祐志の事はまだ話せてないけどさ。

ふわりと笑った顔はずいぶんと穏やかで、荒木さんの事を主任に話せたのが嬉しいと物語っているようだ。

「で、そんなときに美奈子さんのことがわかって」

彼女とは雑誌の撮影の時に知り合ったみたいなんだよね、彼女はウチの会社のモデルはやってなかったんだけれど、何度かスタジオで顔を合わせてるうちに食事でもと誘ったんだろうよ、親父がさ。どうりで去年から今年にかけて、理由もないのにスタジオ撮影があると見学して来るってよく言ってたんだよ。

クスリと洩らした笑みが、取締役もそれを嫌がっていないことを教えてくれた。そうだ、だってあの時も大事な身体だって、言ってたんだもん。

「親父もお袋が死んでから10年経ったんだもんさ、好きな女性が出来ても構いやしないけどさ、でもさすがに自分よりかなり年下だって知った時には驚いたよ」

それでなんだよ、その彼女に子供が出来て、なんだか僕が結婚してないってのが気になったらしくっていきなり縁談だなんて言ってるのはさ。

参ったよ、と洩らす取締役に、主任は「でも、じゃああなたの考えじゃないって事ね」と念を押した。

「当たり前だろう、親父は自分が結婚する時に、僕にも一緒に式を挙げるとかっておかしなことを言ってるってだけなんだ」

なんだかそれも凄いですね、という、と、だろ？おかしいよな、

と即答された。

「じゃあ社長は本気で新沢さんと……」

主任が信じられない、と言いながら呆然と取締役を見返すと、
「だってさ」

とまるで種明かしをするように小声で囁いた。

「彼女のお腹が大きくなってきたら、どんな服を着せようかってマタニティ雑誌を眺めていて、こんなんじゃないや納得できないっていった試作品を作らせるくらいの入れ込みようなんだって」

「え、試作品？」

「それってもしかして」

僕と主任が即座に聞き返すと、「そうそう」と嬉しそうに頷いて言った。

「今日彼女が着ていたワンピース、あれが新しい『マーガン姉ブランド』の試作品なんだ」

美奈ちゃんの、清楚で柔らかい印象を強調したようなボレロスリーブを思い出した。

47・・・なかなかだと思わないか？

木曜日は朝からなんだか慌ただしくて、企画室の扉を開けたとたんにあつちこつちから名前を呼ばれて、やれコピーの確認だ、こつちは写真構成の指示はどうだったかと、何で僕にはばかり聞くんだよ、と思つて首を伸ばすと、主任の顔も企画課課長の顔も見えなかった。

「あれ？」

美奈ちゃん、課長と主任は？と声を掛けて、くると振り返つた顔とばつちり目があつたところで「うつ」と声に詰まってしまう。なんつーか、どこもかしこも昨日とは変わらんだけれどさ、目の前の彼女がこれから母親になるんだとわかつてしまうと、どうしても今までどおりに見れないつていうか、なんだか信じられないつて言うか、こつちの方がどうにも落ち着かなくなつてしまつて。思わずじつくりと見つめてしまつたら、美奈ちゃんに「日浦さん、今日なんか変ですよ」と言われてしまつた。

「あ、ああごめん」

ちよつと疲れてるのかもなーこのところバタバタしてるからーハハハー、と間延びした返事をする。「もう、ちゃんとして下さいよ」と拗ねた振りをして笑われた。

うーん、やつぱり可愛いんだけど。

可愛いんだけど、お母さんなんだよね、もう。

そう考えると、女の人つてすごいや、と感服する以外なんにもできなくて、またもやその姿をまじまじと見つめてしまつた。

「・・・主任なら、朝一で取締役と呼ばれてそれから帰つてきませんよ」

「へ？」

「課長は香西部長に呼ばれてます、ええと、そうだこれ」

美奈ちゃんは机の上にテープで貼つてあつたメモ用紙を取り上げ

ると、

「高野部長からです」

と言つて僕に差し出した。

「高野部長？」

商品部の部長が、僕に？

「9時半からの会議、第一会議室で行うので出席をと言つことと」

僕がそのメモを受け取ったのを見て、一言付け加えた。

「その前に、商品部まで来て欲しいってことだったわ」

「僕が？」

「そう、しかも直接伝えてって、言われたけど」

にこん、と笑つて「なんなのよ？」と首を傾げる。

だからさ、そういう顔見せられると、昨日の取締役の話が信じられないって。

今日の美奈ちゃんのいでたちはやはり胸元にリボンのついたバルーンタイプのチュニックワンピース、下はショート丈のスキニージーンズで、足元は柔らかそうな革のペタンコな靴、それにもリボンがついてて全体的に「ふわんふわん」とした感じた。

・・・これも試作品なのかな？

しかも社長の趣味だとしたら、さすがアパレルメーカーの先端を走ってきただけはあるよな、と唸らざるを得ない。だってさ、これだと結構お腹が大きくならないと妊婦さんだつてわかんないし、今流行のデザインをさりげなく取り入れて、女性らしさまでアピールしてる。

これは「着せなくなる服」だよな、と納得して、うんうんと頷いてしまった。

「なにさつきからじろじろ見てるのよ・・・私なんかついてる？」

「あ・・・いや、あの・・・今日のファッションはまた最新だなと思つて」

「ああ、えへへ・・・ちよつといいでしょ？」

この冬は裾がこうやって膨らんでるのがいいんだって。

ちよつとつまんで見せた格好が、なんだか嬉しそうで思わず、

「美奈ちゃん幸せそうだね」

と言ってしまった。

「やだ、・・・なに言ってるのよ」

もつ、さつきから日浦さんったらおかしいよ。

そう言いながら、クスクスと笑うその顔はやっぱり昨日までとは違つてずいぶんと『大人』になつて見えて。

「遅れると怒られちゃうかもよ」

と窘められるのまで母親に言われてるみたいで。

僕は「じゃあ行つて来る」と言つと、そそくさと企画室をあとにした。

「ああ君か」

商品部の高野部長は、新規プロジェクトの会議前だというのにゆつたりと構えて椅子に腰掛けていた。

「資料には目を通してみたか？」

「はい、それと」

「・・・うん？」

なんだ、と目で語られて、僕はこくんとつばを飲み込むと昨日のことを口にした。

「試作品を拝見しました、いいと思いました」

「ふうん、・・・取締役が話したか」

「はい、今朝彼女が着てたのもそうなんですか？」

あえて名前を口に出さなかったのは、高野部長がそれをどう思っているのかがわからなかったからだ。取締役は見るところ賛成しているようだけれど、それはやはり家族であるからで、社会的に見るといかなものか、と思われるかもしれない。そう感じていたからだ。

僕が聞いたことをじっくりと吟味するように見つめられて、居心地が悪くなつて来たところに不意にふわりと笑われた。

「なかなかだろ？」

「・・・はい」

「製品自体はかなり前から企画していたんだ、ただ採算を考えるとどうにもGOサインが出なくてね」

『マーガン』の姉ブランドは考えなくてはならない時期に来ていたんだ。ラウドネス発売と同時に歩んできて、今では第一期のお客様の年齢は30代に近くなっている。10代後半から20代前半の女性の体型と、20代後半から30代の女性のそれは微妙に違う。ウエストラインやダーツの採り方を考えないと、無理に押し込むような印象になってくる。それじゃだめなんだ、そう思わないか？

あの時、ターゲットが違つとアームホールの大きさ一つ違うんだ、と思つたことを思い出した。

「いい機会だから、マタニティも盛り込んで社長にアピールした。君たちにはいきなりだったけどね、来春の新規出店には私も期待してる」

そう言つと、すつと立ち上がつて僕のすぐ隣までやってきた。

「日浦君」

名前を呼ばれて顔をあげた。すぐそこにある高野部長の表情は、にこやかに微笑んでいてなにを考えているのかわからない。

「君、商品開発課に来ないか」

48 でも諦めないから

はい？

とっさに何も口には出せなくて、ただ黙ったまま高野部長の顔を見返した。

よく目が点になるって言うじゃない、まさにあんな感じ。高野部長も黙って僕を見返してきて、そのままにらみ合うこと数秒。そうして部長の方から仕方なしって感じで声を掛けてきた。

「・・・なんだ、驚かないのか」

「いえ、驚きすぎて固まりました」

「ハ、ハハハ」

なるほど、君は面白いなあ。

あの中山が気に入るだけのことはあるか、と言うと、ポンポンと肩を軽く叩いてきた。

「今年の夏の『マーガン』のコミーシャル、コンテのアイディアは君だって聞いたよ」

「ああ・・・いえ、あれは企画室で出し合った案なので」

あれを考えたのは、僕だけって訳じゃないよな。

そう答えて高野部長から離れようとすると、ぐっと腕を取られますます距離を縮められた。

「いや、あの発想は販売にだけ使っているのはもったいない」

「ええと」

あの発想って。

「私は常々色の使い方はどう捉えているのか、それがデザインを決めるポイントだと思っている」

「はあ」

「モノトーンが流行するからと言って、ただ前習えで黒と白ばかり使っていたんじゃないや周りに埋没する」

「はい」

「だからと言って、その中でカラーに走ると敬遠される」

「・・・はい」

「君はその微妙な機微を捉えることができると思うよ、ところで」
高野部長は僕の腕を放すと、机の上に並んだファイルの一つを取り上げた。

「テレビコマーシャルがどれほどの影響力を持っているか、君は知っているか？」

「影響力ですか」

「ある調査では、新聞などの紙の媒体は、ブランド認知度の約17%程度に留まる、しかしだ、テレビコマーシャルからそのブランドを知る人は73%にもなる」

単純に4倍だ、そういうとマーガンのブランドカタログにある、夏の新作発表の時に一面で使われたコマーシャルの一部を広げてみせた。

「これを見て『マーガン』を知った人が10人中7人いるってことだ」

それはマリンブルーを思わせる綺麗な青の中に、サイダーの泡をちりばめてその中にマーガンのロゴをまるで跳ねるようにして出現させたコマーシャルのフォトで、おおよそファッション業界の宣伝とは思えないところが逆に受けて、テレビコマーシャルを見てから欲しいという人が増えだしたそのカタログは、都内のショップから1週間かからないで全て人手に渡っていった。

「目から入る影響力は大きいんだ」

君にはそれを動かすだけの力がある。それを商品開発に生かしていつてくれないか。

じつと見据えられて、僕はそれから逃れるように一時目を閉じた。

ちやんと考えなくちゃ。

高野部長が僕を高く評価してくれているのはわかる。でも、それって商品を作る側だろうが売る側だろうが、その商品をどれほど愛

してるか、によるんじゃないだろうか。

僕は、ウチの会社の洋服を出来るだけたくさんの人に着て欲しい。『着せたくなる洋服』をどんどん宣伝していきたい。この客層ならどういうアプローチでもって行こうか、それを考えているのが楽しい。ショップに居た時だってそうだ、一枚のＴシャツを、どうやって目立たせることが出来るのか、かつこよく見せることが出来るのか、それを考えてきた。今はそれが、一つの店舗としてどうやって見せたらラウドネスやマーガンの商品がより効果的、魅力的に見えるかを考えていると言うことになってるだけだ。もともとの考えはずっと変わってない。

変わってないんだ。

「僕は、できるだけ多くの人に自社の商品を知ってもらいたいです」

「・・・だから？」

「企画課にいて、それをやって行きたいです」

「ふうん」

なんだ、と言って高野部長はコツコツと足音を立てて椅子まで戻っていった。

「香西の言ったとおりだな」

「は？」

「香西、あいつが君はうんとは言わないさ、と言ってた」

「部長が」

「そりゃこつちだつて君にいきなりこんな話はしないさ、根回しはいろいろとさせてもらったが、どこもかしこも首を縦に振らないのでね、直接ぶつけてみたんだ」

でも、やっぱりだめってことか。

あーあ、とわざとらしい溜め息をつく、高野部長はファイルブックを持って立ち上がった。

「じゃあこれからの会議で、私がなにをしていきたいのかきっちり聞いてくれたまえ。それを生かしてくれるのは君だと信じているよ、

それが今私を振った君に出来る、唯一のことだからね」

ま、でも新規出店の成果が出たら、また考えてくれてもいいんだけどね。

こっちも諦めないから、と言いおいて、高野部長は先にたって第一会議室へと向かっていった。

マジですか。

諦めないから、と言った一言が、僕の中で繰り返しこだましていた。

49 97%は外見で判断される・・・んだって

第一会議室に入ると、そこには中山取締役、香西部長、企画課の西巻課長、それと梶原主任、商品部からは商品開発課の相澤課長がいて、相澤課長は僕の顔を見ると、先に席に着いた高野部長の顔をチラリと見てから軽く頭を下げてきた。

僕はそこで一瞬立ち止まって、「失礼します」と深々と頭を下げた。

出席者を見ると、商品部からは部長と開発課課長の二人だけで、しかも部長自ら立ち上がったところを見ると先ほど高野部長が言っていた「私がなにをしていきたいのかきっちり聞いてくれたまえ」は、言葉のあやでもなんでもなくて、本当に部長がプレゼンするんだと思うとちょっと驚いたって言うかなんていうか、そりゃウチの会社を引っ張ってるのはここにいる中山取締役と両部長だって話では聞いてたけど、こうやってその事実を目の辺りにすると、その緊張感つてのはやっぱりすごくて、絶対に失敗しちゃいけないんだなって思えてくる。

「日浦、どこに行つてたの？」

主任の隣に座って、「遅れてすいません」と声を掛けると、僕にだけ聞こえるようにちよつと肩を寄せて聞いてきた。

「高野部長のところに」

「高野部長？」

顔を上げると、プロジェクターを使って映し出したデータを相澤課長に確認しているその人の姿が見えた。主任も同じように前を見て、すぐに僕に目を移してきた。

「何の用だったのよ」

「ええと」

話して差支えがあるとは思わなかった。でも、なぜかその時とつさに頭に浮かんだのは『諦めないから』の一言で、こくんとその言

葉を飲み込むと「いえ、なんでもないんです」と答えていた。

「・・・本当？」

疑っているというよりも、何があつたのか知りたい、そう言いたげな声がした。

ずっと寄ってくるのが主任だと、その身にまとっている香りだけでわかる。甘すぎなくてきつすぎなくて、爽やかな感じのオリブ系の匂い。息を吸って、あの、と言いかけたところで、

「では、ご注目ください」

と高野部長の声が響き渡った。

市場調査の分析や、新潟市が来年4月に日本海側初の政令指定都市になるとの話から始まって、『マーガン』のデザインコンセプトの話になったときだ。

「男性ファッションの『ラウドネス』が発売から2年目に『ラウドネス・スポーツ』を発表し、ブランド全体のカバー世代が20代から40代まで広がったのに対し、女性ファッションの『マーガン』は20代がメインで固定していた。発表当初はターゲットとなつた客層も現在では30代前半となり、デザイナー的にも『かわいい』からもう少しコンサバティブなものを好むようになってきている。従来の『マーガン』愛好者にそれを提示できるブランドが今までウチにはなかったわけだが、ここに来てークラス上のファッションを提供するべく、次のブランド展開をしていく」

手元の資料を、といわれて目を落とすとそこには、

『estate』

という言葉がゴシック体で印刷されていた。

「エスタミ、これは『愛されてる』という言葉をフランス語にした中から作り出した造語だ。女性がその洋服を身につけると愛されてると感じる、着せたい、着せてみたい服というのがブランドコンセプトになる」

「女性が自分で、ではなくてですか」

主任がすかさず聞いたのは、受身的な印象に取ったからだろう。僕もそれが気になっていた。

「『ラウドネス』 は女性が男性に着せてみたい服、がデザインのコンセプトだ、『マーガン』 はかわいいと愛するがそれに当たる『エスタミ』 は大人の女性が「愛される」ことを意識してきて欲しい服、ということになる。ターゲットは30代がメイン、そしてその年代の前後に多いと思われるマタニティも視野に入れる」

知ってはいたけれど、それをあらたまって聞くと、今までそれを考えた『レディスファッション』 はなかったんじゃないかと気付かされた。

子供服からトータルでカバーするブランドはある。男女の差もなく、ファミリーとしてもブランドもある。今回新規出店する新潟のラベール万代には、それがブランドコンセプトになっている「ユニクロ」と「GAP」が既に参入が決まっている。でも、そこに「マタニティ」は存在しない。だからといって高野部長の用意した資料を繰っていくと、マタニティがメインになるわけではないのがわかる。女性が美しく見えるスタイル、体型を「悪く見せない」スタイルの追求、という文章が形を変えて何度も出てくる。

「人は見た目が大事というけれど、データによると97%はまず外見で判断されるそうだ。こればかりが理由だと考えているわけではないが、女性が出産に望む際に自分がどう見られるか、どんなスタイルになるのか、それを気にする部分を少しでも軽減することが出来れば、少子化対策にも一役を担うことができるのではないかと考えている」

「え？」

「・・・そこまで？」

そこまで話が飛躍するの？

はっとして顔を見合わせたのは僕と主任と西巻課長で、あとはうんうんと頷いている。

マジすか・・・えーと、マジっていうか、皆さん本気ですか？

「では、試作品が何着か出来ているので今度はそれをご覧頂こう」
そういうと、会議室のドアまで移動していた相澤課長が「入って」とドアの向こうに声をかけた。

カチャリ、と音がしたドアから入ってきたのは3人のモデル、モデルといっても多分商品開発課の誰かなんだろうけれど、『マーガリン』に比べると襟ぐりの開き方が若干狭くてスクエアなものと、腕のラインがゆったりしているもの、思ったとおりアームホールは大きめにとられていて腕を動かしても引き攣れるような皺が出ないようになっている。

もう一点はさつき美奈ちゃんが着ていたようなチュニックワンピースで、前合わせがカシユクルタイプで胸のすぐ下のラインで重なるってあとはギャザーを入れて膨らんだ形になっていた。

「パターンは新たに作り直した。全部で3種類用意している。それには大手下着メーカーと協力して、30代前半の日本女性の平均値を元になっている。また、タイアップ商品も発売予定だ。それと」

そういうとプロジェクターの画面が変わって、2人の女性の顔が映し出された。

「イメージキャラクターとして、各界から3名の方にこのプロジェクトにご参加いただくことになった。20代後半のターゲット対象はバイオリニストの佐久間レイさん、30代にはタレントの江藤みどりさん、続いて」

そこで取締役が立ち上がると、「はいって戴きますね」と僕達に言っ、ドアの向こうにいる誰かを迎えに行った。

「誰かいるの？」

「さあ」

「日浦も聞いてないんだ」

高野部長に呼ばれていたのは、その話じゃなかったのね。

主任がそう言ったのに、僕はすぐに返事が出来なかった。「その話」が本当は何の話だったのか、僕は話すことができるんだろうか。

主任に。

「どうぞ」

取締役に促されて、その人がはいつてきた。

「……えっ」

「うそぉ」

「『エスタミ・グレース』のイメージキャラクターをお願いした、フードコーディネーターの川島涼子さんです」

レースをふんだんに使った、ノーブルなブルーのドレスを着た涼子さんがそこに立っていた。

50 ハイクラスってのはこれのこと

「どうしてここに」

呆然とした僕の目の前で、嫣然と微笑んだ涼子さんは、取締役の腕に自分の腕を絡めてスクリーンの前までやってきた。

「みなさまこんにちは、川島涼子です。今回はこのような晴れがましい役を頂戴して、身に余る光栄でございます」

チラツと僕に目をくれた後、隣の主任にははっきりとそれとわかるように会釈をして、先にいたモデルの二人をまるで両側に従えるようにすつと背を伸ばして立った。

なんていうか・・・大女優って感じ？

「ポージングが素晴らしいわね」

「・・・え？」

ポージング？

言われて涼子さんをもう一度見ると、少し斜め向きに立って右足を左足にわずかに隠れるくらいに後ろに引き、上半身は真っ直ぐこちらに向くように捻じって、手は丁度腰の辺りで軽くまげて指先が合うようにしてしている。ウエストラインの細さが強調されて、なんだかドレスが身体に吸い付くように見えてドキツとした。

「プロのモデルがよくやるじゃない、一番綺麗に見えるように立つ事をポージングって言うのよ」

「へえ」

「スタイルが単にいいってだけじゃ、洋服は綺麗に着こなせないから。背筋が綺麗に伸びてる、それが大事なのよ」

以前モデルでもやってたのかしら？

どこか悔しそうな気配を滲ませて、主任は涼子さんから目を逸らした。

涼子さんは取締役のエスコートされて、一番端の椅子に座った。どこか親しげに言葉を交わしているのを見て、あれ？と思ったけれ

どこの場では何も訊くことは出来なかった。僕は高野部長が再び立ち上がったのを見て、手元の資料を繰って『エスタミ・グレース』のロゴを探し出した。さっきの『estami』の次に『G』が配置してあるだけのシンプルなもの、これも最初の『エスタミ』と同じくゴシック体なので、これからデザインを起こすということなのかもしれない。

「『エスタミ・グレース』は『エスタミ』から発展した、大人の女性のための服だ。見てもらっているようにレースやサテンをふんだんに使って、ハイクラスなパーティーシーンでも着ていけるようなドレスを展開していく」

高野部長がそういうと、カシヤリと音を立ててスクリーンに新しい映像が映し出された。

それは何枚ものデザイン画で、涼子さんの着ているブルーをはじめ、ボルドーやゴールドなど、今まで『マーガン』では使っていなかった色の展開がそこにはあった。ドレスといってもほとんどがトップスとボトムズのセパレートで、同じデザインでパターンがいくつも用意されているからその組み合わせでロングにもパンツスーツにもなるというアイデアが出されている。

「前々から考えていたってことだったけど・・・」

高野部長はどれほど前からこれを考えていたんだろうか。

ウチの会社では、女性服は『ラウドネス』の発表から遅れて半年後に発売された『マーガン』が最初で、そしてそれが唯一だった。『マーガン』は若いOLやお洒落に敏感な女子大生の間では人気のブランドで、『ラウドネス』の隣に立つのなら『マーガン』と雑誌でコメントが付くほどになってきていた。

でも、言われたとおり対象年齢層の幅の狭さは気になるところだった。

女性の服へのこだわりは、男性の比ではない。でもそこは会社自体女性服をメインとして扱ってこなかったため、目を向けてなかったというのもあったと思う。高野部長は、それではいけないんだと

考えていたんだろう。

そこには「危機感」もあつたのかもしれない。

このまま幅の狭い客層相手にデザイン展開していても、頭打ちになるのは目に見えている。高野部長も言つてたとおり、ブランドとして気に入ってくれた人たちも、年と共に好みが変わっていくのは十分考えられる。ならそこに新しいデザインと今までの志向を引き継いで、尚且つ世代に合った服を自分達が提供していかないと、他のブランドに客を取られてしまうことになる。

せっかく『マーガン』と一緒に育つた人たちを、みすみすほかに手渡すことはないじゃないか。

今回のこの決断は、そう言っているように思えた。

目を上げて、前で話す高野部長の顔を僕は見つめた。

この人は、絶対の自信を持って今回のプロジェクトを立ち上げたんだ。

そうして、僕ならできると言ってくれた。

ちゃんと、応えなくちゃ。

「では続いて販売戦略の検討に移ろう」

その前に一息入れようか、中山取締役はそういうと、立ち上がった。それまで隣で座っていた涼子さんの手をとった。

「今日はありがとうございました、このお礼はまたのちほどさせていただきます」

「・・・あらいいのよ、私はこちらとご一緒にきて嬉しいんだもの」

クスン、と口元の上がった笑みが、僕と主任を指差していた。

「え、彼らを知ってるんですか？」

取締役はそういうと、信じられないといった顔で僕と涼子さんを見比べた。

知り合いも何も・・・。

僕はそついかけた口をぎゅっと閉じて、黙ってきつちりと頭を下げた。

51 梶原理紗子のユウウツ<9>

さすがに連日イタリアンは食べたくない、と言って今日のお昼は会社の裏にある和食処 『わのわ』 に来て、私は鮭わっぱ定食を、佐々木はお好み御前を頼んだ。そう言えばここのご主人も新潟出身で、このわっぱ飯と言うのは新潟の郷土料理だとメニューの最初に書いてあったのを思い出した。

あ。

日浦の出身も新潟だった。

確か海の近くだって、言っていたような気がする・・・何しろ一番最初に企画室に来た時の挨拶の場面の記憶だから、確信はないがたぶん新潟だったように思う。

縁があるって言えばいいのかしら。

テールに出されたお膳には、木で出来た丸いわっぱと呼ばれる小さなおひつと、あとは豆腐とわかめのお味噌汁、筑前煮と漬物が並んでいた。この『わっぱ』にさまざまな具材とご飯を入れて蒸すので『わっぱ飯』と言うのだけれど、蓋を開けてほのかに上がる木の香りが、なんとも言えず食欲を誘うのだ。

「いただきます」

嬉しそうに言うのは佐々木、ホント食事時は美味しそうに笑うわよね、と思いながら、私も箸を取った。

午前中の新規プロジェクトのプレゼンは、前半は商品部の高野部長による新しいディスプレイブランドの説明で、前の日に和孝から聞いていたよりももっと大掛かりで、商品部としては威信をかけたといってもいいほどの規模のものだった。

なんといっても、今まで培った『マーガン』と言うブランド力をそのまま継承するのではなく、その発展と継続を賭けたもの、

と言えると感じた。

話を聞いていて、高野部長が長い間このプロジェクトをあたためていたのはわかった。それに自分がこの先『マーガン』を着続けられるだろうかと振り返ってみて、難しいと思ったのも事実だった。高野部長が言ったように体型云々の問題ばかりではなくて、そのデザインコンセプトに『可愛い・愛らしい』が含まれる限り、30代になった自分には少し難しいと思ってきたところだったのだ。

必然で必要なニーズってことか。

会社がそれを今まで考えなかったとは思わない。でも、採算とか需要とか、そういったことを考えるとメインが紳士服、しかもイージーオーダーやフルオーダーが主だった当社にとっては冒険にはいるのかもしれない。

だから尚更、この時期にいきなり、それもごり押しのようにして組み込んできたのはどうにも納得できない。自信を持って望むのなら、もうちょつと慎重になってもいいはずだ、なのにもう決まっている出店計画のターゲットを変えるくらい理由はいいどこにあるんだろう。

何があつたのかな？

今朝読んだ経済新聞には、特に目立った情報はなかった。

衣料関係の株価はほとんど安定している。自社株はマイナス10円だったけれど、それくらいの変動は1時間の間にだって起こる。

あとは自分のところとは業種の違う光学機器メーカーの吸収合併の話、新しく出来る地下鉄の駅の売店の名前、今年のワインの出来具合がどのというトピックス。

ワイン。

不意に川島涼子の顔を思い出した。

「・・・まいったわね」

「ん？なにどうしたのよ」

「あ、いえ今度のプロジェクトの話」

「ああ、新潟出店のことね。ラベール万代だっけ？ずいぶんいろんなテナントが入るって聞いているけど、一番の話題は1階にはいるジュエリーショップよね」

「え？」

「ああ、聞いてない？表参道ヒルズにも入ってる『ラバーズジュエリー』が日本海側初の出店だって、ジュエリー系の雑誌に出てたわ」

もぐもぐ、と口を動かしながら佐々木が言う。

この人の情報網って、いったいいくつあるのかしら？

佐々木の言葉に驚きながら、もしかしてあと何か知ってることはないかと箸をおいて聞いてみた。

「あとは？何か知ってる？」

「え・・・えつとお、GAPはキッズとベビーが入るし、4階のユニクロは他の店舗にはない商品が入るって聞いているわ」

「・・・ふうん」

「あと、ジェラードショップが入るって」

「ジェラード？」

「そうそう、イタリアのアイスクリーム。『La fiore fiorisce』を出してる会社の系列だって、聞いたわよ」

「『La fiore fiorisce』って・・・」

涼子さんのところじゃない。

レースをとるところに散りばめた、ブルーのドレスを着た川島涼子が素晴らしいスタイルを見せ付けて立っていた姿が甦った。その姿を見たとき、どうしても負けられない、そう思った自分も。

「・・・参ったわ」

これって本能的な対抗心なのかしら。

呟きながら、筑前煮の照りのいい鶏肉を箸でつまんで口に持っていた。

52 梶原理紗子のユウウツ<10>

美味しかったわね、といいながら企画室に帰ってきて、しばらくした頃佐々木からメールが入ってきた。

「？」

話すことがあるのなら声をかけてくれればいいのに、と思って顔を上げると、佐々木はこちらのことなんか全く気にした様子も見せないで、なにやらデータを打ち込むのに忙しそうだった。

「なんなのよ」

立ち上げていた画面を一旦最小化すると、メールを開けて佐々木から来た分を確認する。メールにしたと言うことは、急ぎって訳じゃないのかなと思いつつも、こんな事をしてるのは初めてだったので、ちよつと気になりながら出てきた文字を読んでいた。

「・・・え？」

それは、メールマガジンと呼ばれるもので、自分の気に入った情報をいち早く流してくれるようあらかじめ登録しておくいわばネット情報誌なのだが、佐々木が送ってきたのは女性服の通販のものと、『ブランド通信』という業界情報、あとは株価情報だった。

まず女性服の通販サイトを開くと、午前中に高野部長が言っていたような、明らかに30代をターゲットにした『仕事服』と銘打つものがずらりと並び、よくよく見ると広めに取ったウエストラインや、パフスリーブで隠れた二の腕周りなどがそれとわからないようにデザインされたものが多かった。色はほとんどがアースカラー、冬に向かって黒や茶が増えるのかと思ったら、今年は流行がグレイと言うことで、グレイの濃淡を組み合わせているものが目立っていた。『マーガン』では主流のショート丈やフィット感の高いラインはそこにはなく、ナチュラルで身体が布地の中で動く感じのするものが多いように思った。

次の業界情報では、海外のブランドで今後期待できるものを、と

いうトピックスが最初に目に入ってきた。

『スポーツブランドであるアディダスやラコステの衣料部門の強化が、今後のファッション動向にどう影響するか』

この一文を読んだ時、そういえばラベル万代にもラコステが入るんだったと、新規出店の企画書の内容が思い出された。最近このスポーツブランドの女性ファッションは本当にお洒落になってきていて、朝の情報番組で紹介されたとき、そのロゴが入っているだけでどんな奇抜な色あわせも華やかに見えてくるから不思議だと思ったことが頭を掠める。ふうん、このブランドがこうやって注目されているのね、と納得したそのあとに、一番衝撃的なニュースが待っていた。

『太陽商事はショッピングセンター事業を展開する四葉不動産と共同で、婦人服のプライベートブランド 『エルベリーナ』 を企画・販売することを発表した。四葉不動産は関西を中心に総合スーパーやショッピングセンターを展開、昨年暮れに太陽商事と業務提携したのを期に消費関連事業にも着手する構えだ。太陽商事ではまず年内中に新規ブランドを紳士服、子供服にも立ち上げる構想と言う。』

株価情報の中の太陽商事をチェックとあつたのでそれをクリックして出てきたのはひと月ほど前のレポートで、そこには大手総合商社の太陽商事が繊維部門の強化を図るためにその重要施策のひとつとして消費拡大ビジネスに参入したという記事があつた。

総合商社としてはエネルギー価格の高騰で資源関連が上向きになり、業績的には上がっているというのは経済新聞で株価をチェックしていて知ってはいた。しかし繊維部門は国内の繊維業界の低迷を反映して、軒並み低下の一途を辿っていると思っていた。でも、この太陽商事は違った。記事を読むと全関連会社の利益のうち、繊維部門が1割強を稼ぎ出すと書かれていた。

しかもただの総合商社じゃない。日本でも1、2を争う総合商社の1割だ、金額にして200億近い数字がグラフに表されていた。
「・・・うそお」

よく読んでいくと、太陽商事はここ10年の間に名の知れている海外のブランドを数多く買収してきたとある。日本で独占的に製造・販売の出来る権利を持っているものは自分でも知っているものばかりで、これが一緒になって展開されたらどれほどの脅威になるか。

そこでふと気になったのは、四葉不動産のことだ。

四葉不動産はもともと戦前の三大財閥の一つで、戦後になってその形を企業連合体と変えた「四葉グループ」の中の一部門になる。そして関西が本拠地で西側経済の中心的存在となる四葉不動産に対して、関東を中心に不動産関連、特に様々な業種を組み込んだショッピングモールを展開して成功を収めている、いわば東側の経済中心になっているのが住忠不動産だった。

ラベール万代も、表に出る社名は違うがこの住忠不動産が再開発を請け負ったショッピングモールだった。

3年ほど前に同列会社の不況で閉店に追い込まれた大型スーパーを居抜きで買い取り、外観はそのまま内装に手を入れて初期段階の開発費を抑えるというのは、ウチの会社が新規出店を決めたときに説明された。商業施設として魅力ある空間を作り出すためのお手伝いをする、というのが再開発のコンセプトだが、当然のことながら利益が見込めない開発はしないということなのだろう。その独自のマーケティング戦略と運営管理によつて、今まで手がけてきた施設はことごとく成功を収めている。日本海側では今回の新潟がはじめての出店で、万代シティと呼ばれるランドマーク的な場所での再開発は絶対に失敗できないと考えているはずだ。

高野部長は、この二つの事柄をどの時点で知っていたんだろう。

四葉不動産の衣料品を中心とした消費関連事業への参入と、住忠不動産の地域発展をかけた再開発事業。

新規プロジェクト立ち上げの背景は、対抗するというよりも、自

社の顧客を護るという発想なのかもしれない。

気になって検索をかけた『エルベリーナ』というブランドは、客層が20代から30代を中心としたコンサバティブなデザインが主流で、価格帯も大型スーパーでの販売を見越してか、5,000円前後から上は12,000円、インナーとしてのカットソーでは1,000円台で買えるものがあるなど、『買ってもいいかも』と考えるような商品説明があった。この価格帯は『マーガン』からすると3,000円ほど下回る形になる。

『エスタミ』はどれくらいの価格帯で設定するのか、販売部の部長である香西から今日の段階では説明されなかった。販売戦略としてブランド名を伏せてのコマーシャル展開を年内いっぱい行い、『ラウドネス』を掲載している主要男性誌および女性ファッション誌にはカウントダウン形式で見開き広告掲載をすること。そのほか3月の新潟出店のあと4月5月と横浜のショッピングモール、川崎の駅に併設した複合ショッピングプラザへの出店のことなどが説明されただけだった。

どうする気だろう。

顔をあげたところで、佐々木と目が合った。

『ありがとう』

そう言うつもりで片手を挙げて、軽くふったそれを西巻課長に見つかってしまった。

「梶原君」

「は・・・はい」

まずい、と慌てて手を下ろすと、それには触れないで「ちょっと来て」と手招きされた。

「なんでしょっ」

机の前に立つと、ふうと溜め息をついた課長がおもむろに、
「悪いんだけどさ」

と言ってきた。

「明日は『K I S A R A G I D E S I G N』さんの打合わせだったよな、うーん、できれば速いうちがいいんだが、じゃあ来週早々にも新潟まで出張してくれないか」

「は？」

「市場調査、というか、高野部長が街の雰囲気をつかんできてくれるって」

「雰囲気ですか」

「そうそう、それで」

そこで一旦言葉を区切ると、もう一度「悪いんだけどさ」と言うてからこう言った。

「日浦と一緒に行ってくれるかな」

「・・・・・・はあ？」

日浦と、出張？

二人でつてのは何かと問題があるかもしれないけど、ま、そこは仕事だから、面倒なのはわかってるけどそこをなんとかね、納得してもらえないかな。

脇でごちゃごちゃ言ってる課長の言葉はもう頭に入ってこなかった。

日浦と二人で、しかも日浦の出身地である新潟に出張・・・・・・。

うそお。

53 何が参ったって？

「・・・なんか」

疲れた。

ふう、と息をついて駅の改札を抜けて、すぐに細い路地に入って真っ直ぐ歩く。

今日はなんだか本当に疲れた。

足を一步踏み出すごとにそう考えて、立ち止まりそうになるのをかろうじて耐えてまた一步足を前に出した。

朝から思いも寄らないことの連続で、新規プロジェクトについての高野部長の話もさることながらその後の香西部長の話もぶっ飛んでた。

「年内いっぱいには新しいブランドのことはマル秘扱いにして、ただし新商品発売の事はコミーシャルする。関東1都6県と新潟を含めた北陸3県、新潟・石川・富山で展開だ。その方法は・・・日浦、君に任せるよ、来週中に素案を考えてきてくれ」

「えっ」

「え、じゃないって。ブランドロゴに関しては、今回も『K I S A R A G I D E S I G N』さんをお願いする、そうだな、明日来るそうじゃないか、それまでにどういったものにしたいのか、君の意見をまとめてきてくれ」

「は？」

「『マーガン』の販売戦略をそのまま使ったのは無しだぞ、なんとってコンセプトが違うからな」

「・・・部長っ」

「ああ、雑誌関連は梶原君だ。今現在広告展開している主要雑誌をリストアップしておいてくれ、そっちはカウントダウン形式で展開

する」

「わかりました」

あっさり返事をした主任はトントンと資料をまとめると、「じゃ、もう昼だからな、解散するか」といった香西部長に頷いてから立ち上がって軽く頭を下げた。

「期待してるぞ」

ポン、と肩を叩かれた僕は「はい」と返事はしたもの、どうしたらいいのかと途方にくれていた。

高野・香西両部長の期待に応えるだけの意気込みはある。そう意気込みは誰にも負けない、なんたってそれだけしか自分には取り柄がないんだから、頑張るっていうのには自信がある。

でも、だ。

最終段階にきていた新規出店計画を白紙に戻して、もう一回建て直しをする。同じのはため、コンセプトが違うんだってはつきり言われた。しかもマル秘扱いと宣伝が同時進行で、雑誌広告展開がカウントダウンってことは失敗して先延ばしってことは絶対に認めないって事だ。

『期待してる』 そう言った香西部長が、僕の胸の内を見透かしたようににやりと笑って、肩に置いた手にぎゅっと力を入れた。

「頑張ります」

「よし」

じゃ、飯にするか。

バシンと背中を叩かれた後ろでは、西巻課長が高野部長に呼ばれてなにやら話をしてた。

チラリと僕と主任に目をくれたと思ったのが、そのときは何のことかさっぱりだったけれど、それは午後になって明らかになった。

午後からそれまでに組まれた新規出店計画書をもう一度確認して、基本的な構想は使えるんじゃないかと思って細々した予算の部分の

データを別に移したりしていた時のこと、「日浦ちよつと」と呼ばれて廊下に出たところで主任に「来週早々出張することになった」と告げられた。

「新潟ですか？」

「そう、高野部長からの指示らしいわ。街の雰囲気をつかんで来いって」

「で、主任と」

「・・・二人でって」

その言葉に、さっきの高野部長の視線の意味がわかった気がした。まさか部長にまで知られてるってことはないだろうけれど、僕はどうでも主任がそれをどう思うのか、そこがわからなくて、ふわっと笑いかけた主任に僕は笑い返すことが出来なかった。

「でもなんで」

そう言った僕にはつとしてすぐに笑顔を引っ込めると、主任はきりつとした顔を見せて、

「仕事だから」

と言った。

「・・・まずいよな」

うん、どう考えてもあれはまずかった。

いや、主任と一緒に言うのがまずいって訳じゃない。そっちはどっちかって言うのと、嬉しいなと思ったりするけれど、そう、この感覚なんだ、まずいのは。

嬉しいなと思うけれど、手放して「ヤッター」とかとは思えない。もやもやっとしてて、嬉しいのか嬉しくないのかどっちなんだと訊かれれば、そりゃ嬉しいですよと答えるって言うくらいの嬉しい・・・。

だからさ、説明できないんだって。

あの時とっさに、はるか上の上司に知られていると思ってしまっ

たことの方がウエイトが高かっただなんて言えるわけないしな。

と、ブツブツと独り言を言いながら角を曲がって、足元を見ながら

「参ったなあ」

と洩らした時だった。

「なにが参ったって？」

「わっ」

「わってなんだよわって」

「荒木さん」

僕のアパートの入り口のところに、荒木さんが立っていた。

「遅かったんだな、もう帰ってるかと思ったら鍵がかかってたから」

「・・・ああ、すいません」

言いながら、何ですいませんって僕が言っただろう、と思わないでもなかったけれど、ずいぶん待たせたかと急いで部屋の前まで行く間、荒木さんはそれが当然のように後ろからついてきた。

「あの」

「大して待たなかったから、別にいいけどさ」

あつさり返すのにちよつと考えて、

「そっちじゃなくて」

と言ってみた。

「・・・うん？」

「帰らないんですか？・・・その・・・取締役のところに」

鍵を開けてそういうと、それには答えないで僕より先にすつと足を中に入れて、脇に下がった僕の顔を当たり前のようにして通り過ぎて部屋の中に入ってしまった。

「しばらく君のところに厄介になるって、言っただろ？」

「でもですね」

バタバタ、と駆け寄った僕に主任と同じようにふわっと笑いかけると、「疲れたー」と言っただけでベッドに腰掛けた。

「で」

どっちがこの部屋の主なんだろうと錯覚するくらい自然な溶け込み具合で、荒木さんは立ったままの僕に訊いてきた。

「なにが参ったって？」

54 思い込みが激しいって・・・

「ええと、何がいわれても・・・」

「参ったって、あ、仕事のことなら明日は朝一で君のところに顔を出すことにしてるよ」

「それもあるんですけど」

「ああ、それとも新しいブランドのこと？それも和孝に聞いてるって」

「・・・仕事の話はするんですね」

「そりゃ、ビジネスパートナーだし」

「なら、何で帰らないんですか」

ここで、見上げてきていた顔が一瞬曇ると、「それとこれとは話が別だろ」と言い捨ててそっぽを向いてしまった。あ、まずいことを言った、と、今日何度思ったかわからないことが頭を過ぎって「すいません」というと、

「で？」

とすかさず聞き返された。

「じゃあ、理紗子のこと？」

考える暇もなく言われて、うつと詰まった僕の顔を見ると、「ふーん」とどこか納得しない顔で頷いた荒木さんは、「ま、いいか」と言つと、

「とにかく、今夜は飲むか」

と言ってきた。

「は？」

「いや、押し掛けてるご挨拶って言つかさ、まあそんなところで」

「ビールは冷蔵庫に入ってるってのは知ってるんだ、朝見たから。だからつまみだけ買ってきた」

「いや、あの僕は」

「いいから、けちけちしないであるだけ持つてこいって」

えーと・・・マジ？

「早くしろよお」

ベッドに座ったまま、言うとおりにしないとどこでも動かないぞ、というオーラをバシバシ出している荒木さんは、ベッドの前のローテーブルにビール袋の中身を次々に並べだした。

実は僕、お酒飲めないんですが。

なんていつても聞いてくれないだろうなあ・・・。

はあ、と溜め息をついて僕は台所にとって返した。

「あの」

えーと、何でこうなるの？

今、僕の隣には荒木さんが居て、でどうなってるかって言うと冷蔵庫に入っていたビールが全部空になっていて、夏のお中元シーズにうちは誰も飲まないからっていつて西巻課長に無理やり持たされて、そのまま忘れ去っていた赤ワインの中身が上から半分はなくなっている。テーブルの上に散乱してるのは荒木さんが買ってきていたチーズが一箱とソーセージや燻製やらと、僕の実家から送ってきてあったおかきの詰め合わせが一缶分。そのほとんどは荒木さんの胃袋の中に入ってた、僕はと言うと最初にあげた350mlのビールをまだ持て余していた。

冷蔵庫のビールの持ち主は当然ながら先輩で、飲んじやったからって頭ごなしに怒るということはないと思うけれど、でもやっぱり黙って飲んじやうって言うのは良くはないよな、と良心がじくじくと痛みながら、それでもなんとなく抵抗できないでいるのって、
・
・
・
なんてだろうな。

チラリと横目で見る荒木さんはとてもそんなにいっぱい飲んでるとは思えない様子で、くーっと空けてるのは『夏のボジョレー』

とかつて箱に書いてある僕はさっぱりわからない銘柄だけど、荒木さんは手にとって「ふうん」と頷くと、瞬く間に半分飲んでしまったんだった。

「・・・美味しいんですか？」

他に言うことあるだろ、と我ながら突っ込みを入れつつ訊いてみると、

「まあまあだね」

とまだしつかりした口調で返してきた。

僕だったら絶対気を失ってるよ、と言うのが確実な量を飲んでるとは、とても思えないっての。

「ドミニク・ローランのボジョレー・ビラージュ、葡萄の味がしつかり生きてて、絶妙って言えば絶妙だけど、まあ飲みやすいって言うか、日本人の口に合いやすいって言うか」

「そうなんですか」

「飲んでみる？」

「いやーそれは・・・」

両手を盛大に振って断ると、ハハハ、と笑ってまたグラスに注ぎ足した。

飲み始めて早々、僕が下戸だったのはバレちゃっていた。

でも、ボジョレーって11月に解禁になるって言うワインをそう呼ぶんじゃないんですかって、知りたがりがむくむくと持ち上がった訊くと、「だからさあ」と言った顔がぐつと近寄ってくる。

「ボジョレーってのは、いわばその葡萄の産地の地名なわけ。ブルゴーニュとかボルドーとか、そういうのと同じ。ああ、シャンパンだってシャンパーニュってところで作るから」　シャンパン　「っていうんだ」

わかる？と聞き返されたその顔は間近で見るとほんのり赤くて、もしかしたら全然そうは見えなかったけど相当結構・・・

酔っ払ってるんじゃないですか。

「・・・君みたいボジョレーは11月の解禁時のみ、と思ってる

思い込みの激しいのは、本当のことを知らないで終わるんだ」

「えっ」

その言葉になにか含みを感じて目を上げると、据わった目のまま口元だけ引き上げて笑って、ローテーブルに手をついた。

「次は何があるんだ・・・新潟が地元っていうんなら、日本酒があつてもいいだろ？」

勢いよく立ち上がった、ぐらりとふらついた腰を慌てて支えたら、振り向いた顔がまともに目の前にあって、それがあんまりにも近かったからドキツとしちゃって手を離しそうになったそこに、身体をぐつと預けてきた。

「あぶないですって」

もう飲むのよしましようよ、そう続けるはずだった言葉にかぶせるように、荒木さんの声が耳元に響いた。

「君の腕の中って、結構居心地いいね」

「・・・なっ」

今度こそバツと手を離して、ドスンと音を立てて床に座り込んだ荒木さんは「冗談だよ冗談」と笑いながら言う、その笑い声に混じってこう言ってきた。

「理紗子には黙っててやるって」

「・・・黙ってるも何もっ！」

あんたが酔っ払ってるからってだけでしようがっ

もう、と憤懣やるかたなしと言った声を上げると、僕はまだ笑っている荒木さんを置いて引き戸をぴしゃりと閉めた。

飲んでしまった先輩のビールと、口直しにウーロン茶でも買つてこなくちゃ。

そう思つて、バッグをつかんで飛び出したドアの向こうに人が立っていたなんて、全然さっぱり、気がつきもしなかった。

55 僕も行くから

僕がコンビニから帰ってくると、荒木さんはすでにベッドで丸くなって寝ちゃってて、「えーっ」と思ったけれどよく見るとビールの空き缶は新しいゴミ袋に全部突っ込んであって、テーブルの上はざっとゴミだけどかしましたって感じだけれど、綺麗にはなってた。

「・・・もう」

なんだかなあ。

うーんと寝返りを打つ姿が、さっきまで着ていた服のままなのに今度は「あーあ」、と思う。

気持ち良さそうに寝ているのを邪魔しないようにそろそろと後ずさって、ベッドサイドに大きなファイルブックとポスターなんかを入れる筒が置いてあるのを見つけて、そこで「明日は朝一で君のところに行くよ」と言っていたのを思い出した。

「明日か」

荒木さんが月曜日に持ってきたコンテでだいたいのところは決まっている、ただカタログの写植の行間とか、その書体とか、細かいところの修正があるだけだから、そんなに時間は取らないはずだ。それを考えると明日の来春のコレクションの打ち合わせは、『ラウドネス』の話だけじゃ終わんないよな、と思った。

新しいブランドコマーションシャルの提案って、どうしようか。

荒木さんに明日相談してみようかな、そう考えながら、音を立てないようにして引き戸を閉めた。

そうしてキッチンの壁に作り付けになっていた時計に目をやるともう11時で、そうだよ今日相談してもよかったのに何にもしないでこんな時間になってしまったじゃん、とちよっと焦ったけれど、手に持ったビールの重さにそれは違うよな、と思いなおした。

僕は、荒木さんと飲んだんだよな。

ていうか、主任の弟さんと、言ったほうがいいのか。

どっちかって言うと、付きあわされたに近いかも、と思わず苦笑した。

今日までそれほど親しく話したことはなかった。それがこうやって僕の部屋にやってきて今夜で二晩め、主任の弟さんだって知ってからだって二晩め、取締役との仲を知ったのだって二晩め、そう、まだ荒木さんを個人的に知ってからだって二晩めなんだけど、なんていうか違和感がないって言うか親近感があるっていうか。

主任と話してるのと似てるようで似てないっていうか。

そう、その話しぶりがなんとなく似てるよな、と感じて、だから違和感がなかったのかな？

持ったままのビールを冷蔵庫に入れるために、手を伸ばしてその扉を開けたとき、不意に言われた言葉を思い出した。

『思い込みの激しいのは、本当のことを知らないで終わるんだ』
それって、どういう意味だろう。

荒木さんはいったい僕に何が言いたかったんだろう。

仕事のことがかと思っただけ、あの雰囲気はそうじゃなかった。

じゃあ、主任のこと？

僕のことを好きだったといった主任のことを知っていて、その上で僕に言っただとしたら。

僕が、主任のことを好きだって言ったのを、どこまで信じられるかってこと？

それが思い込みだって、言いたかったとか。

最後の1本を入れ終わって、ボタンと閉めた扉に背中をくっつけて寄りかかる。そうしてずるずると床まで腰を下ろして、ぺたんと座り込んだ。

だって、僕は言えなかった。

荒木さんに、主任と二人で新潟に出張するって、で、それをきくと嬉しいと思ってる主任を、たった一言で不安にさせたなんてこと、言えなかった。

そういうこと？

僕の思いは思い込みだって、そう言いたかったのか。
でも。

所在無しに握った手を、開いてまたぎゅっと握り締めた。
でも。

握った内側が赤くなっていくのをじっと見つめた。
でも。

その先の言葉が出てこなかった。

金曜日はなんとなく朝からそわそわとして、目覚し時計が鳴る前に起きたのに荒木さんはもういなかったし、先輩は先輩でいつ帰ってきたのかわかんないのに僕より早く起きてて今日はパワーブレックファーストだなんて言って差し出したのは4段重ねのホットケーキだし、それにたっぷりメープルシロップをかけられて甘いのを我慢して食べてたら「今日は帰り寄れよ」とかって珍しく言ってくるし、やっとのことで平らげてギリギリ遅刻しないで会社に着いたら主任はもう会議室に行っていて、美奈ちゃんは相変わらずだけど僕の机の上にはその美奈ちゃんの字で書かれたメモが載っていて、それが高野部長からのもので午前中の目処がついたら部屋まで来いって言う話でマジかよと思っていいたら取締役がやって来て、ぶんぶん手を振るのに気がつかないでいたら、むかついた顔をされて、

「日浦君っ」

と名前を呼ばれた。

「は、はいっ」

うわっと立ち上がって駆け出すと、後ろから美奈ちゃんが「いつてらっしゃい」と声を掛けた。

「すいません」

まだファイルも用意してなくて、そういいながらスーツの前を無

意味にパタパタと叩くと、

「日浦君さ」

とこれは意味ありげに顔を寄せてきた。

「祐志に昨日、なんか言った？」

「えっ」

ドキッとしたのは、そりゃ昨日の酒盛りを思い出したからで。えーと、と言いながら言葉をさがしていると「祐志がさ」とまた声を落として言った。

「新潟に一緒に行くって言ってる」

「ええっ？」

「自分も雰囲気掴みたいからって、・・・あのさ」

昨日はそんな話一つも出なかったのに、そう思っているところに取締役がぐつと身体ごと近寄って言うてきた。

「祐志が行くなら、僕も行くから」

56 徹底しないと、ダメだろ？

『祐志が行くなら、僕も行くから』
って。

マジですか。

取締役にそう言いそびれて会議室に入ると、A全紙サイズのポスターの上で主任と荒木さんがなにやら不穏な雰囲気向き合っていた。

「何も祐志が来ることないって言うの」

「でも、市場調査だろ？出来ればインスピレーションの為にも一度見てみたいなあ」と

「だからなんで一緒になのよ」

「一緒に行けば一度で済むだろ？こっちだって写真やらレポートやらで感覚掴むよりは手っ取り早いし」

「・・・祐志」

「なに？」

「新潟出張の話、誰に言われたの」

ボタン、と大きな音を立てたドアは取締役の仕業、僕がその音に驚いて振り返ったら、主任も荒木さんも一緒になって顔を上げた。

「・・・日浦君」

荒木さんが先につこりと笑って声を掛けてきて、それとは打って変わって主任はさっと顔を曇らせると、「遅いわよ」と言っポスターに目を落とした。

「で、出張どうなったって？」

僕の後が続いた取締役は能天気にも二人の間に割って入って、どちらとも目を合わせてこないのに困った顔をして、「なんだよ」と不平を言った。

「僕が言ったんじゃないよ、それに僕が考えたんなら先に言ってるし」

「誰もお前だなんて言ってる」

「ゆづじい」

昨日のプレゼンテーションの時とは大違いの、なんとも情けない口調で取締役は荒木さんの名前を呼んで、それをひどく冷たい表情で無視すると、荒木さんは僕に向かって「コマーシャルではいつものロゴを使うけれど、それでいいかな？」と訊いてきた。

いきなり春のコレクションの話になってるんだと気がついた僕は、「はいっ」と答えると慌てて傍に寄ってポスターの上に広げられたコンテを覗き込んだ。

月曜日に再度レイアウトをお願いしていたのは雑誌の広告で使うロゴの選定と、その見開き左に使うコメントのフォントと行間通常の明朝体の上に楷書でインパクトをつけたいといった僕に、明朝体を10ポイントにするか11ポイントにするかで雰囲気が違うからそこにどういった楷書の形がいいのか、探してくると言ってくれていたのだ。そのインパクトをつけたいといった文字は「風」の一文字。来春はベースのアースカラーに、組合わせた原色で表現するという、『ラウドネス』のデザインコンセプトの「躍動感」を、漢字で表すとどうなるかと考えた末の選択だった。それはただのゴシック体ではありきたりで、同じ明朝体では埋没する。じゃあと思ったのが楷書だったのだけれど、何とか手書き風のまさに『書きました』といった感じのがないか、そうお願いしたのだった。

「・・・これ」

そこには、想像した以上のものがあつた。

「どう？」

「いいですね」

「払いの先の感じが、書いてるって感じだろう？」

「そうですね、どのフォントなんですか」

右には指を見ている読者側に向けて開いているモデルの写真、当

然着ているのは『ラウドネス』のジャケットで、にやりと笑った顔の下に見えるシャツがくしゃりと自然に皺を寄せているのがひどく扇情的だ。荒木さんが選んだ文字もまさにそんな感じ、払った先の筆の名残が、動きを見せていい感じに仕上がっている。

「ダイナフォントの宋楷書、それをこれだと92ポイントで組んである。文字数が少なかったから、明朝体の方は11ポイントで行間は前回よりも開けたんだ」

「なるほど」

うんうんと頷く僕の隣では、主任が腕を組んで話を聞いていた。

「で、こっちはカタログで使うレイアウト。夏ときは肌を出してたけど、今度はそれが少ないフォトが多かったからね、カラーで色気を出していったらいいと思って、前回よりもピンクと赤を多くしてみた」

それは雑誌での先行宣伝と同時に展開するカタログのレイアウトで、年を明けると同時に店頭に並ぶ予定になっていた。バックにピンクと赤を取り入れた所為で押さえた統一感が出て、モデルの3人がさらに際立つなかなかカッコイイ出来栄だった。

「かつこいい・・・」

「だろ？新しいブランドはこういうのじゃないんだろ？から、どうやってアプローチしたらいいのか、それが知りたいんだよね」

「え？」

「だからさ、新潟に新規出店するラベル万代のこと。レディスってことだけれど年齢層が今までよりも高いんだろ？」

「ええ」

「だからさ、それをこの目で確かめに行こうと思って」
え？

思わず後ろを振り返って、取締役がいるのを確認した。ブンブンと顔を横に振る取締役は、『だから僕じゃないッ』と声を出さずに口だけ動かした。

「あの」

「ん？」

「誰からそれを？」

「ああ」

荒木さんはふつと笑うと、僕の隣にいる主任を気にするようにチラリと目をやった。きゅつと上がった口元がまるで悪戯でも仕掛けているように思えて、僕は思わずドキリとして、今度は主任を振り返った。

「ブランドの話は以前から来てるよ、でも時期が早まったってことで僕が言っただ、出店先を見に行きたいって」

「荒木さんが？」

「そう、ここの高野さんに」

「・・・高野部長ですかあ」

またあの人か、そう思っただけを抱えなくなった。あの人はいったい何を仕掛けてくるかわかんないな。でもそれなら昨日話してくれただけよかったのに、と言いかけた僕の腕に、主任の手が触れた。

「とにかく」

耳元で主任の声がした。

主任が触れたところからじんわりと熱くなってくるのを感じて、なにか言わなくちゃと思うのにそれがまた出来なくて、そのまま突っ立ってるだけの僕に主任はぴたりとくっついてきた。

「新潟へは仕事で、出張で行くんだから、遊び半分でこられちゃうのよ」

ね、日浦もそう思うでしょう？

言外の圧力と言うか、なんていうか、ぎゅつと握った手の強さに僕が頷きかけると、

「遊びじゃないさ、一番人出の多い時が見たいから、日曜に行こうって言ってるだけじゃないか」

「え？」

「祐志、だからあんたね」

「ゆづじい、それって僕も行くって」

「・・・仕事だろ？理紗子、仕事だっというんなら徹底しないとダメだって」

クスリと笑った荒木さんは、取締役に向かって言った。

「和孝も仕事って割り切るんなら一緒に来たっていいさ、その代わりお前がスポンサーな」

出張費割り増しで請求するから、その覚悟でいろよ。

そう言いきった荒木さんに、取締役は「マジ？」と言いつつも結構うれしそうで、その正反対に主任は僕の隣で「もう」と不満そうな声を漏らした。

57 梶原理沙子のユウウツ<11>

いつたいどういふつもりなんだろう。

「じゃあ、今夜相談しようよ」

と日浦の肩をポンポンと叩くと、祐志は次の打ち合わせが待ってるからさ、と言ってあつという間に会議室から出て行ってしまった。

今朝早くに相談したいことがあるから、という内容で入ったメールに応えて会社に着いたのは始業30分前、もう企画室の前で待っていた祐志は私の顔を見るとすぐに「新潟に行くんだろ？」と訊いてきて、驚いた私の顔をあっさりと無視すると「まずはこっちの仕事を片付けてからな」と言って手にしたポスターをポンポンと叩いたのには正直むっとした。

なによ、どういふつもりよ。新潟つて、どこから聞いたんだろ。はらはらと焦る気持ちを隠して『ラウドネス』のポスターとカタログのコンテの確認をした。月曜日に話していたのは紙面から受ける印象に躍動感がなくて、ただ綺麗な男の人が立ってるだけの印象が強かった。そこをもっと動きのあるものと言って、モデルの写真を入れ替えてコピーはそのまま、フォントサイズをどうするかというところで日浦がいい事を言った。

『楷書体かなんかで手書き風ってないですかね？』

この紙面で楷書体って言うのは、普通は考えないでしょう？

そう思っていたのだけれど、こうして出来上がっているのを見ると、それがしっくりとしていてなんだか本当に風が吹いているように思えてくる。

ああやっぱりいいセンスしてる、そう思って思わず微笑んだら、それを見透かして祐志が言った。

「やっぱいいなとかって思ってるんだろ」

「なによ」

そりゃいいんだもの、いいと思ってるだけでしょ。

つんと横を向くと、「日浦君の発想って、なかなかいいよな」と
なんだか嬉しそうな声で言い出した。

「昨日も俺に付き合わせちゃって悪かったけど、話しが合うって言
うか、うん、あいつ、いいよなあ」

「そりゃあ・・・」

私が好きになっただくらいなもの、そう言いかけてぐっと言葉を飲
み込んだ。

くすり、と祐志が笑ったからだ。

「日浦君がいったい何に気がついて、どう感じるかっていうのを実
際この目で見てみたいんだ」

「え？」

「だからさ、新潟の新規出店場所。こつちと違って何にもない場所
にいきなりドーンとあつたりしたら、困るじゃないか」

そうすると、集客から考えなくちゃいけない、そう言う祐志に「
何も祐志が来ることないって言うの」と返した。

出店計画の段階で、ラベル万代があるのは新潟駅からまっすぐ
古町という新潟市内の真ん中と言ってもいい繁華街まで行く途中の、
バスターミナルを中心にした一つのランドマーク的な場所であるこ
とは確認済みだった。伊勢丹が後ろに控えていて、両脇には中高生
に人気のショップが入っているファッションビルがあつて、幅広い
世代の集客が見込める場所であることは間違いがなく、そんな場所
をただ放っておくのはもったいないと、流通と再開発事業を手がけ
る会社は考えるのは必然と、私でも思ったものだ。

でもそれを、祐志が知らないで言っているとは思えない。だから
出店先を見たいというのは単なる口実で、「一緒に行く」って言う
方が目的なんじゃないの？と、いったい誰からその話を聞いたんだ、
と訊いてみるものらしくりと交わすばかりで、まさか日浦が話し
たんじゃないだろうか、日浦と一緒に誘ったとか、そうまで考え
ている時に当の日浦がやってきた。

日浦はこつちの様子なんか全く気にすることもなく、祐志が持ってきたコンテの確認をし始めた。その横顔に昨日新潟出張の話をしたときにひどく意外そうに、「でもなんで？」と言われてしまったのを思い出した。私と一緒に、二人でと伝えたらなんと言ってくるんだろうと淡く思い描いた期待は、そこで見事に打ち消された。

好きだと伝えなかったっけ？

私はあなたのことが好きだと、言わなかったっけ？

ぐるぐると回る気持ちをよそに、日浦は祐志となんだか嬉しそうにフォントの話なんかをしている。それがそんなに大事な話なの？と言ってしまいそうになるのを我慢して、二人の話を聴いていた。だって仕事の話だもの、来春のコレクションには私も力を入れているんだもの。

基本カラーに赤やピンクでさし色を入れるというのを、商品部に企画の段階で意見したのは実は私だった。『ラウドネス・スポーツ』では当たり前に使われている臙脂や紫も、もっと明るいい色にして全体の印象をもっとソフトにしたらどうかと考えたのも、最近盛んに言われるスロウライフカラーを取り入れた生活をイメージしたからだった。

「かつこいい」

思わずといった感じで洩らした日浦の声が、私を現実に戻した。

「だろ？新しいブランドはこういうのじゃないんだろ？から、どうやってアプローチしたらいいのか、それが知りたいんだよね」

「え？」

「だからさ、新潟に新規出店するラベル万代のこと。レディスってことだけれど年齢層が今までよりも高いんだろ？」

「ええ・・・」

語尾がなんだか戸惑っている。何かを確認するように和孝に顔を向けたのはなんだったんだろう。

「あの」

「ん？」

「誰からそれを？」

「ああ」

そこで祐志はにやりと笑った。そうして私の顔を見て、まるで種明かしでもするように勿体つけて話を続けた。

「ブランドの話は以前から来てるよ、でも時期が早まったってことで僕が言っただ、出店先を見に行きたいって」

「荒木さんが？」

「そう、ここの高野さんに」

「・・・高野部長ですかあ」

それなら話がわかる、とでも言うように素直に納得した日浦にいったいそれってなんなのよ、と今すぐにも訊きたくなった私は、自分でも驚くくらいすんなりとその傍によってその身体にぴたりと寄り添った。

そうでもしないと、日浦を取られそうぞ。

そんな馬鹿なと思いながら、それでもその腕を握る手の力を緩めることが出来なかった。手の平に伝わってくる日浦の温かさは、まだ私のものだと思っていたかった。

でも、取られると心配する相手は、祐志じゃなかった。

結局新潟出張は、祐志と和孝も一緒に行くことになった。

「遊び半分でこれちや困るのよ」

そう言っただ私に祐志は遊び半分じゃないといった。仕事なら徹底しなくちゃだめだと。

それは新しいブランドのことだとばかり思っていたけれど、祐志はそればかりでないことを、私に教えていたのだ。

「新潟、『KISSARAGI DESIGN』の荒木さんも行くんだって？」

来春の『ラウドネス』のコレクションカタログのコンテを、課長に言われて香西部長に説明に行ったところ、そこには高野部長が同席していた。

会釈をして顔を上げてすぐ、そう問われて「はい」と返事はしたものの、どうしてこんなに早く、と思つて祐志が連絡を入れたのだと気がついた。この新規ブランドはこの高野部長が中心になつて動いているのはこれで明白で、でも次の言葉が出てくるまでまさかそんなことを考えているだなんて、これっぽっちも思つていなかった。

「日浦君にはがんばってもらわないとな、このプロジェクトが成功したら、是非商品部に來て欲しいものだ」と香西に話していたところだつたんだよ。君も、優秀な部下を持つて幸せだな」

「は？」

「おいおい、俺はまだ承諾してないぞ。まるで決定事項のように言わないでくれ」

「ははは、悪い悪い。でも、いい話だと思わないか？ 梶原君」

名前を呼ばれて、私はやつのことで顔を上げた。

「私には……」

なんと返事をしていいのかわかりません、そう言いたかつた。そういうために口が動いたのに、途中で止まつてしまった。

「梶原君、どうした、顔色が悪いぞ」

このところいろいろと仕事がつまつていたからな、と心配して氣遣つてくれる香西部長の声ももう遠くに聞こえていた。

日浦が企画課から居なくなる。そんなことが起こるだなんて思つても見なかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0377c/>

日浦君の恋愛事情

2010年10月11日02時49分発行